

---

# 漂流者は守護者で保護者～ヤテンノオヤコ～

金貨の騎士

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

漂流者は守護者で保護者ゝヤテンノオヤコゝ

### 【Nコード】

N8489Y

### 【作者名】

金貨の騎士

### 【あらすじ】

なのはやフェイト達、そして自分の同類であるフィアと共にジュエルシード事件を解決した八神みらい。しかし、そんな彼らを今度は『闇の書』が騒動に巻き込む…。

『漂流者はハイブリッドな現役将校（無印編）』の続き（A's編）です。

## とある世界の物語（前書き）

どうもこんにちは、金貨の騎士です。改めてよろしくお願ひします。  
感想は指摘でも不満でもいいんで遠慮なくどうぞ。

## とある世界の物語

昔々、あるところに一人の男の子がいました。彼は魔法が大好きでいつも魔法の練習をしていました。男の子はたくさん練習をしたのでとても魔法がうまくなり、天才とまで言われました。

ところが、それを羨ましがった友達は何を嫌い、大人たちは彼を化け物と呼び、家族には怖がられて捨てられてしまいました。男の子は一人ぼっちになってしまいました。

一人で魔法の練習をして、一人で遊び、一人で食事をし、一人で眠り、いつのまにか男の子は世界で一番不幸な者になってしまいました。

そんなある日、男の子は一冊の本を拾いました。その本は、拾った人の願いを叶えてくれる魔法の本でした。そして彼は願いました。

『寂しいのはもう嫌だ！！誰か僕と一緒に居て！！』

男の子の願いは叶いました。魔法の本に宿る女神様は、四人の家来を彼の家族として呼び出しました。男の子はとても喜びました。

それからというもの、新しい家族に囲まれた男の子は毎日が幸せでした。一緒に魔法の練習をして、一緒に遊び、一緒に食事をし、一緒に眠り、毎日が光輝いていました。

彼女達と暮らすうちに新しい友達がたくさんでき、好きな女の子もできました。気づいたら彼の周りにはたくさんの人達がいました。

でも男の子は女神様と家族のみんなが一番好きでした。

ところが、そんな日々も突如終わりを告げました。魔法の本の女神様と四人の家来は旅に出なくてはいけなくなりました。その旅に男の子は連れていきません。男の子は悲しくて泣き続けました。

『一人にしないで!!』

女神様は男の子を優しく諭します。

『あなたはもう一人じゃありません、あなたの周りにはたくさんの人たちが居るのだから…。だから、もう泣かないで。私たちに笑顔を見せてください…。幸せになってください……。』

願いを叶え続けてくれた女神様の初めてのお願いに、ついに男の子は泣くのを止め、笑顔で女神様達を見送りました。

それから時が経ち、世界で一番一人ぼっちだった男の子は、世界で一番多くの友達を持ち、世界で一番温かい家庭を手に入れました。

それでも彼は、女神様と家族達のことを忘れないために：“みんなに忘れられないように”、“彼女達と過ごした日々のことを本にしました”。

いつの日か、誰かが女神様たちに会った時に、こう伝えてほしくて…。

『ありがとう…僕は世界一の幸せ者になれたよ……。』

くアルテミア王国童話集・男の子と本の女神く

## プロローグ（前書き）

さゝ頑張ろう

## プロローグ

はやてside

〈海鳴市・ジュエルシード事件の2年前〉

時刻は午後8時。車椅子の少女が暗い夜道を一人で進んでいた。

彼女の名前は『八神はやて』。幼いときに両親を亡くし、その後は一人で暮らしている。今日は気晴らしに隣町まで電車で出かけたのだが、帰りの電車が途中で止まってしまったのだ。整備不良なのか人身事故なのかは定かでは無いが、そのせいで自宅付近に着いた時には、辺りはすっかり暗くなっていた。

「はあ…特におもしろいこともなかったし、今日は散々や…」

ついつい溜息と共に愚痴が零れてしまう。別に隣町に何も無いわけではなかった。この辺では見かけない店や、公園だってあった。でも…。

「…一人で行ってもつまらへん……。」



学校に行っていないので友達はロクにおらず、通院先の石田先生とは仲はいいが忙しいだろうし、遺産を管理してくれてるおじさんも同様である。

「……言っても仕方あらへんか…、気づいたら家が目の前やし…。」

一人モンモンと考えながら帰り続けてたら自宅が見えてきた。一人暮らしの自分にとっては広すぎて寂しく感じる自分の家が…。

ところが、玄関前に辿り着いたら心臓が止まりかけた。

…黒装束の男が一人、玄関に立っていた。

「だ、誰…？」

当然ながら何者かを問うはやて。しかし男の口から出た言葉は、はやての『困惑』を『恐怖』へと変えた。

「『闇の書』に選ばれし者よ…我らの計画のためにも、お前には死んでもらう…！…！」

「…え。」

言うや否や、男は長い棒のような物を取り出し、はやてに向ける。そして、その先端に光が灯り始めた…自分の命を奪う死神の光が…。

だが、はやてはそれを見て恐怖しつつも、浮かべた表情は『苦笑』だった…。

（神様…私って、何か嫌われることでもしたん……？）

- - - 私は一人ぼっち…。

- - - 友達もいない…。

- - - 家族もいない…。

- - - さらに命まで奪うと言っんか…。

（…………あの世で会ったら絶対文句言ったる…。）

そんなはやての心情も知らず、男ははやてを不気味な物を見るような目で睨む。

「殺されそうな目に遭ってるにも関わらず笑うとは…やはり、貴様は死ぬべきだ。消えろ!!」

(こんな…こんなあんまりや…!!)

その言葉にはやては、自分の死を覚悟して目を瞑る。だが、何故か男が驚愕の声を上げる。

「ッ!?!何だ!?!」

男が急に焦りだしたことを不思議に思い、はやては目を開ける。すると、男が驚愕の表情ではやてを見ていた…否、はやての“背後”を見ていた。つられるように背後を見ると…

「…ここはどこだ?」

グレーの髪に緑色の目、羽根突き帽子を被り、全体的に茶色い貴公

子のようなスーツを着た男が立つおり、周囲をキョロキョロと見回していた。さらに、彼の背後には光輝く魔方陣のような物が漂っている。

黒装束の男がはやてに向けていた棒を、その男に向けて問う。

「何者だ貴様！！次元漂流者か！？」

「ん？次元漂流者？…知らぬ。逆に訊くが、『アルテミア王国』を知っているか？」

「どこの世界だそれは！？」

「そうか、知らないか…。お前はどんなんだ？」

そう言つてはやてに尋ねる。さつきからありえない状況が続いているにも関わらず、不思議と落ち着いてきた。なので男の質問に答える。

「…知らへん…いや、知りません…」。

「ふむ、わかったありがとう…。ところで、この状況はアレか？俺はどうすればいいんだ？」

そつ言つて黒装束に視線をやる。すると黒装束は口を開いた。

「貴様は俺の邪魔をせず、黙って消え失せればいい。」

「…なんの“邪魔を”だ？」

「無論、この小娘を殺すところをだ…。」

その言葉を聞いた途端、彼は眉を顰めた。そして、はやてに声を掛ける。

「…おい、お前は殺される心当たりはあるのか？」

「さっぱりわからへん…。なあ、あんたもせめて理由を教えてくれへんか？」

「どうなんだ、黒いの？」

「貴様らに教える義理は無い。」

二人の問いかけに即答した黒装束の男。それに対し、彼は額に青筋を浮かべた。

「そうか…ならば、俺はお前の邪魔をしよう。」

「…え？」

「何だと…？」

その言葉に困惑する二人。そんな二人を余所に、彼は指と首をペキペキ鳴らし始める。

「当然であろう。俺からしたらお前は、か弱い少女を襲う不審者か変態にしか見えん。」

「漂流者風情が、とっとと消えうせればよいものを…後悔するかい…！」

黒装束の杖…デバイスの先端から光の矢が放たれた。しかし、彼はそれを…

「ふんつ。」

- - 魔力を纏わせた片腕で弾いた。

「何！？――（ガシツ！！）ぬッ！？」

「貴様の事情は知らん。だが俺に敵意を持たせ、俺に殺意を向けた…その時点で貴様は俺の敵だ。ならば…。」

彼は驚愕する黒装束に掴み掛かり、そのまま…

「目の前の敵は全て我が屠る！！せえい！！」

- - ブオン！！

「うわあああああああああああああ！？」

空に向かって投げ飛ばした。だが、彼は止まらない。続けて出現させた魔法陣に手を突っ込み、そこから銃剣を取り出した。そして…。

「それが我『ラインベルト』なり！！【天河瀑布】！！」

- - -ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

青白い光の柱が夜空へと伸びていった。はやてはその光景を呆然と眺めていた。やがて、自分を助けてくれた彼は舌打ちをしながらこつちを向いた。

「逃げられたか…。おい、怪我は無いか？」

「…あ、大丈夫です。ありがとうございます。…あのぉ、おじさんの名前は？」

- - -グサリッ！！

そんな音が聴こえた気がした。何故か、名前を尋ねられた彼はorz状態になっている。



「えっと…、どうかしたん？」

「…名前は『ミランダル・ラインベルト』……まだ、24歳だ…。」

「ええ！？全然ッ見えへんッ！！30ぐらいあるかと思たわ…。」

「気にしてるんだからそれ以上言っな…。お前の名は…？」

「自分、『八神はやて』言います。改めて、ほんまにありがとうございます。」

とりあえず危険が無くなり、一安心する二人。不意にはやてが口を開く。

「ところでミランダルさん、さっき次元漂流者って言われてたやん？それってなんや？」

「俺も分からんが…多分、異世界から跳んできた遭難者のことじゃないのか？」

「ミランダルさんって迷子なん？」

「…別の言い方は無いのか？だいたい、さっき通ってきた魔法陣をくぐれば帰れ……。」

…彼が出現した時に背後で浮いていた魔法陣は、とつくに消滅していた。

「…迷子確定やね。」

「…そうだな。」

ミランダルが凹んだその時、はやては何かを思いついたかのような表情を見せ、ミランダルに話しかける。

「ミランダルさん、しばらく私の家に来いへんか？」

「…いいのか？」

「ええよ。……どうせ、私しかおらんし……。」

その言葉にミランダルははやてのことを色々察した。なので、あえて厚意に甘えることにした。

「それじゃあ、少しの間世話になる。よろしくな、はやて。」

「こちらこそよろしく、ミランダルさん。」

・・・こうして『銀河の守護霊』と呼ばれた男は、そう遠くない未来に『夜天の主』と呼ばれる少女と出会い、騒がしいくらい賑やかな日々を送り始めるのであった。

## 第一話 非日常な日常（前書き）

ヴォルケンズの登場までもうしばらくお待ちください…。

## 第一話 非日常な日常

みらい side

〈現在（冬）・海鳴市、八神家付近〉

『ミランダ・ラインベルト』改め『八神みらい』は、道を歩きながらはやてと出会った時を思い出していた。あの時はちよつと居候したら去るつもりだったのだが、気づいたらもう3年近くも一緒に暮らしており、お互いに家族として認め合っていた。

「みらいさん、どうしたんですか？」

「ん？ちよつと昔のことを思い出してな…。」

「ふん。それにしても、楽しみだな。はやてちゃんの家に行くの。」

彼の隣には、栗色の毛をしたはやてと同じ年齢の少女、『高町なのは』がいた。ジュエルシード事件に決着がついたあとも当事者達は交流が続いていた。基本的に暇な八神家やフィアがちよくちよく『翠屋』に遊びに行っていたのだが、今日はなのはが八神家に行くことにしたのである。はやては家でなのはと彼女を迎えに行つたみ

らいを待っている。

そして、ついに八神家に着いた。

「おじゃまします。」

「「いらつしやうい。」」

玄関に上がると、リビングのはやて前と後ろ（背後のみらい）から返事が返ってきた。なのはは、そのままはやてが居るであろうリビングへと向かった。みらいも続いて靴を脱いで、それを揃えるために視線を下に向けた。その時…。

「ひゃあああああああああああああああああ！？」

――ズドンッ！

「にゃあああああああああああああああああああああ  
あああ！！？？」

はやてとなのはの悲鳴、さらに何かが突き刺さる音が八神家に響いた。何事かと思い顔を上げると、目に入ってきたのは扉の前で腰を抜かしたなのはと…。

――リビングへの扉をぶち破り、顔を突き出すカジキマグロだった…。

はやてside

みらいに拳骨を落とされたはやては今、頭を抑えてゴロゴロしていた。

「痛い――そんなに怒らんでもええやんか。」

「馬鹿野郎！！『家でカジキに刺される』なんてシニール過ぎて笑えんわ！！」

「み、みらいさん…別に怒ってないからもついいですよ……？」

二人のことを待つてる間、暇になったはやては最近すっかりハマッタ釣りをしながら待つことにしたのだ。みらい特製の『どこでもフイッシング魔法陣（はやて命名）』を発動させ、魔法で強化した釣り道具を使い、暇つぶしを始めたはやて。

しばらくして、なのは達が家に来たと同時に竿に魚がヒットした。  
みらいとなのはが来たことだし、さっさと釣り上げて終わらせよう  
と思い、釣竿をおもいきり振り上げた。

みらいがその釣竿を『鯨が釣れるほど強化してあることを』忘れて  
…。

「それで…？あれほど勢いよく釣竿を振り上げるなど言ったのにソ  
レをやらかし、異常なくらい勢いをつけてカジキを釣り上げ、その  
まま扉にズドンか？」

そう言っただけ顔だけ突き出し、ダランとしているカジキに目を  
やる。

「…うん。」

「全く…。次同じことやったらデコピン（恐怖の制裁）だからな？」

「ひいっ！？それだけは勘弁やー！ー！！」

（拳骨より怖いのか？）



はやての異常なビビリ具合に不思議に思うのは。しかし、彼女は知らない。みらいのデコピン（恐怖の制裁）は魔力を纏わせた手でやってくることを…。

「あれはマジで首が飛ぶかと思たわ…。」

「一体どんなデコピンなの！？ていうか、はやてちゃんその時何したの？」

「エイプリルフルでみらいさんの私物を全部質屋に入れたって嘘ついた。」

「…自業自得なの。」

次元漂流者のみらいがエイプリルフルを知ってるわけ無いのに…。不意になのはの視界にあるものが目に入った。

「あれ？その本はなんなの？」

そう言ってリビングの窓際に佇む本を指差す。その本は全体的に黒く、独特な装飾がされていたが、一番気になったのはその本が鎖で縛られていたことである。

「あ、またこんな所に来て…。」

「やれやれ、この前なんてトイレにいたぞ？」

「…ん？」

二人の反応になのは違和感を感じた。この本が二人の物なのは分るのだが…。

「ねえ、はやてちゃん…二人の言い方がすごい気になるんだけど…。」

「ん？なんか変やった？」

「うん、なんか『この本がまた勝手に動いた』みたいに聴こえたの…。」

「それであつてんよ？」

「……………ふえ？」

-  
-  
-  
今、なんと仰った？

「だからこの本、家の中なら神出鬼没なんよ…。戻しても戻してもどっかに行くんや…。」

「ふえ ええええええ！？オバケええええええええええええ！」

「……自分だって魔法少女で魔王だろうが……」

取り乱すなのはボソリと突っ込むみらい。だが、とりあえず説明してやることにした。

「これは俺の持ち物でな、俺の一族に代々伝わる家宝……らしい。」

「らしいって。」

「ずっとこの鎖が外れなくてこれがなんの本なのかすら判つて無いんだよ……。ところがだ、はやての家に居候し始めた時にな、はやての部屋にもこれにそっくりな本が置いてあつたんだよ。」

「それで？」

「折角だから二冊とも本棚に並べて置いたんだが…そこから例の怪奇現象が始まった。」

それを聞いただけでなのは顔を青くした。ある時はリビング、ある時は玄関にキッチン、さらにはトイレにまで出現する謎の本に最初こそビビッタものの、それ以上のことは無かった。

「ぶつちやけ詳しいことは私らにも分からなかったけど、呪ってくる訳でもないから無害やし、ほっとしてるんや。なにより流石にもう慣れたわ…。」

「そ、そうなの…。」

とりあえず謎の本のことはこれで終わりになった。

「この話はもういいだろう。なのは、フェイトからのビデオレターは？」

「あ、ちゃんと持ってきてますよ。」

「ほんまか！？フェイトちゃん私のメッセージ見てくれたかな？」

何度か『翠屋』に行った時に、一緒にビデオレターを見せてもらい、なのはが返事を送るついではやても自分のメッセージも便乗させてもらったのである。

「私もまだ見てないんだよね。……そういえば、フィアさん来れなくて残念だったね…。」

「いや、あいつはむしろ結果オーライだろ。運がよければフェイト達に直接会えるだろうし。」

この場にいないもう一人を思い出す二人。彼は今、とある用事で海鳴市どころか地球にすらない。

「フィア兄、今頃どうしてるんやろか……ボソッ」また一緒にみらいさんからかって遊びたい…。」

「今頃、武装隊の半分くらいは花畑と川を見る羽目になってんじゃないか？」

そう言ってみらいは、ジュエルシード事件を経て戦友となった彼のことを思い浮かべるのだった。

クロノ side

〈とある管理外・世界〉

そこは碌に生物がおらず、瓦礫の山が広がり続ける世界だった。かつては高度な文明を持っていたようだが何かの原因で滅亡し、世界全体がただの廃墟と化したのである。

そんな世界でクロノは瓦礫に身を潜め、今の自分の状況を呪った。

「……なんでこんなことに…。」

今思えば、心の中で『所詮質量兵器』などと思っていたのかも知れない…。今はそれが恐ろしい勘違いだと自覚していたが…。気づけば味方はほぼ全滅、残ってるのは自分だけだった。

「とにかく、ここから離れないと…。」

《目標を発見しました。クロノさんです。》

「流石と言うべきか……。やっぱり最後まで残ったのはお前か……。」

「ッ!？」

突如上空から声が響いた。クロノが慌てて上を見上げると、そこには黒い軍服を身に纏い、背中に黒い4枚の翼、赤みを帯びた茶髪に青い瞳、さらに肩には金色に近い毛並みの猫を乗せた男が居た。

やがて男は口を開く。

「訓練時間終了。クロノ、お前はクリアだ。」

みらいと同じく次元漂流者であり、臨時教導官の『フィア・レイガード』はそう言った。

## 第一話 非日常な日常（後書き）

次回の更新は月曜日くらいになりそうです。



## 第二話 鉄と火の脅威（前書き）

あれ？サイトの画面がおかしい…俺だけ？今だけ？

## 第二話 鉄と火の脅威

クロノ side

数時間前、アースラ・執務官室

「生存訓練…？」

「おう。ぶつちゃけ、お前らの質量兵器に対する認識が甘すぎる…。」

「

クロノの執務室に来て開口一番にフィアはそう言った。現在彼は、リンディとの取引の結果『臨時教導官』をやらされている。素性や能力の関係上ミッドチルダや管理世界には立ち入るのは不可能だが、管理外世界や無人世界なら可能とということで引き受けることになった。

管理局には素性（連邦）を明かしたくないので、『現地協力者』で通している。フィアと彼の祖国『ベルフィア連邦』のことは、ジュエルシード事件に関わったなのは達とアースラのメンバーしか知らない。

「ところで、その肩の猫は？」

「ん？…ああ、こいつは『アリス』だ。この前拾った。」

今、フィーアは肩に猫を乗っけている。その猫は尻尾が二つあり、金色のような毛並みを持っていた。

「それよりも…今後の訓練の参考までにアンケート的なモノをやったんだが…。見てみる。」

苦い顔をしながら、そのアンケート用紙をクロノに見せる。対象はアースラの武装隊である。

「……………。これは…本当なの…か？」

「…一応、書いた本人達に訊いてみたが…マジだ。」

その結果を見たクロノは哑然とした。アンケートに書いてある内容は以下の通りである。

…日頃の訓練内容について。

- - - 今まで経験した戦闘状況について。

- - - 各自の得意分野。

この3つの内容だけの結果ならば、全体的に別段おかしいことは何も無かった。しかし、二つ目の内容の結果にフィードバックはある違和感を感じ、内容をひとつ追加して改めてアンケートを取ったのだが…。

「『今まで遭遇した質量兵器。』を訊いてみたんだが…。改めて問うが、お前ら管理局の目標のひとつは『質量兵器の根絶』だよな？」

「…その通りだ。」

「なのに武装隊の半分近くが『銃と刃物しか“知らない”』ってのはどういうことだ！？“遭遇してない”じゃなくて“知らない”ってのは！？」

そうなのだ…彼らの半数近くが“魔法関係の戦闘”しか経験しておらず、“質量兵器との戦闘”を経験した者がいないに等しかったのだ…。管理局全体が魔法主義なのは解ってるが、先日のように地球のような世界にだって行く時があるのだ。質量兵器と戦闘する可能性が無いわけ無い。

「つーわけで、リンディ提督にも許可貰ったからちよいと痛い目に遭ってもらう。なに、安心しろ。死なない程度でやってやる。」

「…分かった。彼らにもいい機会だ。是非やってくれ。」

「アホ。『リンディ提督に許可貰った』って言っただろ？今更、お前の許可を取りに来たわけねえだろ。お前も参加するんだよ。」

「…え？」

フイア side

「2時間前・とある無人世界」

「諸君、俺が臨時教導官のフイア・レイガードだ。よろしく頼む。なるべく返事は『了解』で返せ。」

「……了解!!」「……」

訓練場所選ばれた無人世界で、武装隊メンバーの返事が響く。肩に猫アリスを乗つけたフイアの隣には、クロノが顔を青くしながら立つ

ていた。

（…フィアは“アレ”を向けてくるんだろうか？確か魔法弾も鉛弾も撃てると言ってたが……。）

“アレ”とは、フィアが『時の庭園』で使用した【炎翼砲門】のことである。合計十五門のガトリング砲による一斉射を目の前で見たクロノは、自分があの時の傀儡兵のようにバラバラにされるところを想像してしまった。

……だが、待っていた現実はそれどころでは無かった…。

「と、言うわけで…これから諸君らには質量兵器との戦闘訓練を行うってもらう。質問は？」

いつのまにか大雑把な説明が終わったようである。若い局員が手を挙げ、フィアに質問する。

「意味あるんですか？それ…。」

…質問どころか、真っ向から否定してきた。その局員に対し、フィ

ーアとクロノは溜息をつく。渋々ながらフィーアが口を開く。

「お前、名前は？」

「『ジム・ヘリオン』一等空士です。」

「そうか、ヘリオン空士か…。そこまで言うなら、お前には“特別な内容”を追加してやる。」

「…？」

意味が解らず、ヘリオン空士は首をかしげる。それを無視するようにフィーアは話を進めた。

「ま、『百聞は一見にしかず』。経験すれば嫌でも解るだろうさ…。ルールは至って簡単！！今から二時間、俺の攻撃から生き延びろ！！生き延びるためなら何をしても構わん！！魔法を使うもよし！！俺を攻撃するもよし！！とにかく生き残れ！！以上！！」

《訓練開始まで、残り1分前。》

リリアによるその言葉と同時に、アースラ武装隊のほとんどがフィ

ーアから逃げた。一部の武等派だけがフィーアの目の前に立ったままだが、どうやら開始と同時にフィーアを攻撃するつもりようだ。

《残り30秒。》

「ほう、ヤル気満々か…。」

フィーアを睨む局員達。どうやら彼らはフィーアのが気に食わないらしい。

「何をしてもいいんだろう?。」

「次元漂流者なんかに教えて貰うほど、俺らはひ弱じゃねえんだよ。」

その言葉にフィーアが困ったような表情を見せた。

《残り10秒。》

「…参ったな、これじゃあ訓練にならない……。」「





『訓練開始。同時に『ザク陸士』、『リーオー三尉』脱落。追加訓練決定だよー!』

「ちょっと待てエイミィ…追加訓練ってのは何だ？僕は聞いてないんだが……。」

『開始と同時に失格になっちゃった人達は訓練にならないから、後で改めてやり直したって。クロノ君や他のみんなも、あっさり失格になったら同様だってフィーア君が…。』

「なん…だと……。」

呆然とするクロノ。彼は直前にしたフィーアとの会話を思い出していた。

「…ちなみに、厳しすぎて訓練にならなかったらどうするんだ？」

「…俺が“一人ずつ”、“丁寧に攻撃しながら”指導してやる。」

（冗談じゃない！！それは死ぬっ！！）

『善は急げ』とばかりにクロノはそこから急速に離れた。彼に連れて数人の局員達もその場から離れた。それとほぼ同時に…。

――ドゴオオオオオオオン！！

再び響く爆音。振り向くと、さっきまで彼らが居た場所が派手に吹き飛ばされていた。そんな中、局員の一人が空に指先を向けて声を上げる。

「おい！！あれは何だ！？」

その先には、煙を引きながらこちらに向かってくる複数の何かだった。クロノと一部の局員はそれが何か気づく。

「ッ！？馬鹿、あれは迫撃砲だ！！撃ち落せ！！」

「ええ！？あれも質量兵器！？」

その言葉と同時に放たれる複数の魔法弾。迫撃砲の弾は空中で迎撃され、ほとんどが爆散した。撃ちもらしたモノは見当違いの方へと

落ちていったようで、爆発音が響いた。

攻撃を防ぎきり、彼らは安堵する。

「…焦っちまったが、狙いが雑だったな。」

「まだこつちの場所が判って無いんじゃないのか？」

「……“判って無かった”の間違いじゃ…。」

「「「え？」」」

――3人目の言ったことは正しかった。嫌な予感がし、再び上を見上げると目に飛び込んで来たのは、彼らの位置を割り出したフィアアの集中砲撃による砲弾で真っ黒な空だった。

ヘリオン side

完全にこの訓練を舐めきっていたヘリオンは今、一人で瓦礫の廃墟

を走っていた。

（いったい何なんだ！？）

訓練開始からわずか30分たらずで、武装隊の3分の1が脱落となつてしまった。その現状が信じられず、ヘリオンは半ばヤケクソになつてきた。

「畜生！！質量兵器つて魔法より劣るんじゃないのかよ！！」

ヘリオンにそう吹き込んだ彼の先輩は、開始早々に脱落している。

「魔法に引けを取らないどころか加減知らずの分、性質悪いじゃないか！！」

「よく解つてんじゃないか。だが、それと戦うのがお前ら『時空管理局』じゃ無いのかよ。」

「ッ！？」

声がしたほうを見ると、涼しげな表情を見せるフィアが立っていた。その姿に、ヘリオンは嫌な汗を流す。直接は見ていないが、フ

イーアが質量兵器を用いて自分達を攻撃しているのは理解している。  
故に、どのように攻撃してくるのか判らずヘリオンは恐怖する。

「まったく…機会が無かったとは言え、自分達が敵と認識してるものくらいちゃんと理解しておけ。」

《フィア。彼もアンケートに『銃と刃物しか知らない』と書いた一人です。》

「…マジか。」

そうなのだ、ヘリオンも質量兵器をほとんど理解してない者達の人だったのである。ここまで生き残れたのは途中までクロノについできたからである。もっとも、途中で見失ってしまったが…。

「おい、ヘリオン空士。」

「…はい、なんでしょう?」

「俺の言った事は覚えてるか?」

「…自分だけ“特別な内容”を追加？」

そう言った途端、フィーアがニヤリとした。そして…

…ドガッシャアアアン！！

轟音と共に、何かが瓦礫を蹴散らしながらフィーアの背後に現れた。それは四角形が二段重なり、二段目には筒状のモノが正面に突き出しており、左右にキヤタピラを装備していた。早い話…。

…戦車である。

「第97管理外世界地球、日本の軍隊（自衛隊）の主力戦車、『90式』だ。」

「…、これも質量兵器！？」

90式の巨体に圧倒され、ヘリオンは後づさる。彼にとって戦車は、怪獣のようにも見えたらしい。若干涙目のヘリオンにフィーアは容赦無く宣告する。

「撃て。」

《発射！！》

――フィアとリリアの声、そして戦車の咆哮を最後にヘリオンは意識を手放した。

フィア side

〈訓練終了後（現在）〉

フィアはその後も【黒羽】を用いて質量兵器を大量生産しながら  
局員達を恐怖のどん底に叩き落した。あるものは地雷に爆破され、  
あるものは迫撃砲で蹴散らされ、あるものは戦車砲で蹴散らされた。  
武装ヘリも使ってやろうかと思っただが、その頃にはクロノしか残っ  
てなかったから結局止めた。

「んで、終わってみて感想は？クロノ。」

「…生きてるって素晴らしい。」



後半、クロノはとにかく回避することと逃避することに集中したようである。しかし、残り30分前にして生き残ったのが自分だけになり、フィアの攻撃が全て自分に集中した時は…

「瓦礫の世界で“綺麗な花畑と川”が見えたよ…。」

「…すまん、やりすぎた……。」

念のために断っておくが、フィアの魔道科学を用いて即席で造った非殺傷機能を使用したので、死者は一切出てないのであしからず。脱落者は全員アースラへ強制転移されている。今、アースラの医務室は全身打撲の武装隊メンバーで一杯だろう…。

「それにしても…君は戦車まで造れるのか……。」

「流石に執務官なら知ってたか、戦車。」

陸の質量兵器の王者、戦車。執務官ともなると、遭遇しなくてもその存在くらいは知っていたようである。

「今度の訓練内容に『戦車とタイマン』追加しとくか？」

「できれば遠慮したいが…頼む、やってくれ。魔法だろうが質量兵器だろうが、戦いの訓練に変わりはない。」

「了解。んじゃ、ちょっと休憩挿んだら訓練再開な。」

「了解した。」

その言葉と同時に、休息のためにアースラへと帰還するクロノ。転送ポートに入る直前、心なしか足をふらつかせながらガッツポーズを決めてた気がするが、見なかったことにした…。

「さてと…俺らも一回帰るか……。」

（ねえ、フイーア。）

誰も居ないはずのこの場所で頭に響く、自分のものでもリリアのものでもない声。しかし、彼は特に驚きもしないで返事をする。

「ん？どうかしたか？」

（なんでいつもは戦車とか造らないの？）

「無駄に高性能な動く砲台（戦車）を一台造るより、魔法で浮かせる大砲を三台作ったほうが安上がりなんだよ…。今回の訓練は、質量兵器を使う世界の常識に合わせてみただけだ。」

「魔法で空飛ぶ大砲なんて、自分の祖国ベルフィアくらいだろうし…。」

（ふん、そうなんだ…。）

「…なあ、いい加減フェイトたちに教えてもいいんじゃないか？」

（…まだ無理よ。心の準備というかなんというか…とにかく無理…。）

「…分かったよ。まだ秘密にしとくさ。でも、期待すんなよ？アリスも判ってると思うけど、俺の隠し事はすぐばれる…。」

（承知の上よ。それと、誰も居ないときは本名でいいわよ。）

「はいよ、『アリシア』。」

・ ・ ・ そう言って、フィアは自分の肩に乗った猫に… 『アリシア・  
テストロツサ』に返事をした。

### 第三話 起動（前書き）

ついにあの四人が…

### 第三話 起動

みらい side

〔 12月24日・pm18:00・八神家 〕

「そうか…、こっちは当分帰れそうにないか…。」

『 ああ、ここぞとばかりにコキ使われてる…。年越しもアースラで過ごすかも…。 』

現在みらいは、はやてとなのは、それとなのはが呼んだアリサとすずか達と共にクリスマスパーティーを楽しんでいる。女子達の会話が盛り上がってきたその合間に、ベランダで一人くつろぎながら彼はフィーアと思念通信で談笑していた。

『 そついえばリーゼ姉妹に会ったぞ? 』

「元気にしてたか? 最近、二人とも仕事が忙しくて中々来ないんだ…。」

『その内『またちよっかい出しに行つてやる』ってよ。愛されてんな（笑）』

「……『また、はやての世話を頼んでやる（揉まれてしまえ）』と伝えとけ。」

特に『ロッテ』の方には散々悪戯された記憶がある……。同時に、はやてのセクハラを『アリア』以上に受けてたが…。

『はっはっはっ、了解。伝えとくさ。んじゃ、はやてとなのはにもよろしく。』

「おう。」

そこで通信を終わらす二人。みらいは誰もいないベランダから、はやて達のいるリビングへと戻っていった。

「アースラ艦内・フィア専用室」

アースラの空き部屋を改造して完成したフィア専用室。そこに“彼ら”はいた。

「あゝあゝ…楽しそうで羨ましい限りだよ……。」

《こんな美女二人と一緒に過ごしたい何を言いますか。》

「……美女って……。」

《……聞かなかったことにしてください。自分で言っただけで恥ずかしくなりました……。》

お互いドンヨリとした空気を漂わせていた。異世界出身故に、クリスマスなんてイベントは知らなかったのだが、普通に楽しそうだったのでみらい達が羨ましかった。

そんな二人に声が掛けられる。

「まったく……。だからって、そんな雰囲気出さなくてもいいじゃない……。」



「とは言ってもなあ…。って！！勝手に人型になるな！！誰か来たらどうすんだ！！」

「大丈夫よ、近くに人の気配は無いわ。」

顔を上げるとそこには、綺麗な金髪を伸ばし、赤い瞳を持った少女がいた。服装は黒がベースのゴスロリ風のドレスを着ていた。その少女の姿は、フィーア達によく知る少女と瓜二つである。

「それにしても、改めてフェイトとそっくりだな…。いや、逆か…フェイトがアリシアにそっくりなのか…。」

「当然でしょ。フェイトは私の分身として生まれたけど、それ以前に大切な妹なんだから。」

「大切な兄弟が必ずしもそっくりになるとは限らねえぞ。」

「それは同じ“死に損ない”としての経験談？」

「…そう、彼女はフィーアの猫『アリス』こと『アリシア・テストタロツサ』である。」

例の事故で死んだ彼女は、プレシアのことが心配で『幽霊』と化してしまったのだ…。案の定、心配した通りにプレシアは廃人寸前になってしまい、尚更彼女のことが心配になって成仏できなくなり、ずっとプレシアを見守り続けていたのだ。

ところが、プレシアが『プロジェクト・F・A・T・E』に手を出し始めた時に変化は起きた。当初アリシアは、プレシアが“自分の代わりとなる娘”を産み出そうとしているのかと思っていた…。かつて生前に交わした約束を母が守ってくれたと……。だが、現実とは違った。プレシアが求めたのは“アリシア自身だった”。それだけでも衝撃的だったにも関わらず、その後も悲しみは続いた。

生まれ方はどうあれ、アリシアはフェイトを妹として見ていた。何故なら、あの約束がある限り、自分が死ななくても彼女は生まれたかもしれないからだ。だから自分にとっては大切な妹であった。にもかかわらず、その大切な妹は、大切な母親に傷つけられていったのだ…。

――全ては自分が死んだせい…。

いつしかそんな考えが頭を占め、彼女は深い悲しみに苛まれていった…。やがて、限界を突破した負の感情により、『悪霊化』するはずだったのだが…。彼女は深い眠りについただけであった。彼女曰く、“温かい何か”に包まれた感覚だったそうだが…。

「ところで…、その“猫耳”と“尻尾”は隠せないのか？」

「無理よ。この耳と尻尾、あと世話好きの部分は『リニス』の名残なのよ…。」

書き忘れたが、今の彼女には猫耳と二つの尻尾が付いたままである。そして、今でお解かりになったと思うが、アリシアの悪霊化を防いだのは同じくプレシアのことが心配で幽霊化したフェイトの教育係りであり、プレシアの使い魔の『リニス』である。彼女はアリシアの魂と自身の魂を融合させて彼女を助けたのだ。意識を完全にアリシアに譲ったため、今となってはアリシアを助けた理由も含めて、彼女の真意は判らず終いである。

その後、『ジュエルシード事件』による『時の庭園』での戦闘により、おかしい空間が出来た。まず、『時の庭園』自体が“次元の狭間”に存在し、“ジュエルシードの暴走した魔力”、“時の庭園の動力炉”、“虚数空間”、“試作型AMF”、“異世界の超魔法”、“白い魔王とその仲間達の魔法”…今思えば、『混ぜるな危険!!』要素のオンパレードであった…そんな空間に居たせいか、眠っていたアリシアの魂に異変が発生し、気づいたらただの『幽霊』ではなくなり、そして…。

「俺も“普通に”亡霊化したら妖怪になったのかな…？」

「知らないわよ。」

《て言うか何を持って“普通”とするんですか？》

- - - 彼女は幽霊から妖怪になっていた。『猫叉』になったのはリニスが“山猫”だったからなのではと推測されている…。

「そんなにいいもんじゃ無いわよ？常に自分がここに居るのか居ないのかハッキリした感覚なくてフワフワしてるし…。大体、母さんとフェイトに『私、妖怪になったの』なんていきなり言えないし…。」

「あの二人とアルフは平気だと思っただが…。最初はビックリするだろうけど…。」

いきなりこんな形で甦ってきても受け入れて貰えるか不安なので誰にも打ち明けておらず、アリシアの事は未だにフィーアとリリアしか知らない。

「いいの…！とにかく今はまだ黙っとくの…！」

「はいはい…。とにかく、そろそろ夕食に行かないか？」

「え…私が作ろうと思ったのに……。」

「今度でいいよ。ほら、乗っかれ。」

『にゃ。』

そして、猫化したアリシアを肩に乗っけながらフィーアは部屋を後にした。途中、遭遇したエイミイがアリシアを思いつ切り抱きしめて引っ搔かれたのは割愛する。

はやてside

～pm23:57・八神家～

「あゝ楽しかった。来年もなのはちゃん達、呼ぶべきやな…。」

自分の寝室で眠りにつこうとしながら、今日の楽しい時間を思い出していたはやて。なのは達は、アリサを迎え来たリムジンに便乗させてもらいながら帰っていった。

みらいはリビングの片付が中々終わらず、悪戦苦闘している。

「…ただ、楽しすぎたせいで全然眠くならへん……。」

もう日にちが変わるというのに全く眠気がこないのである。いくら休日続きと言っても、寝不足はお肌の天敵である。

「そうゆう時はみらいさんに添い寝してもらうに限るわ…。」

はやては眠れない時、よくみらいに添い寝してもらっていた。みらいも別段断る理由も無く、すんなりとお願いを聞いてくれる。添い寝＋子守唄、時々朗読による効果は抜群で、絶大な安心感と共に眠りにつけるのである。

「早く戻って来いへんかな…ありや、25日になってもうた……。」

ふと時計を見たら丁度一日が終わったところだった。だが、それ以上気にすることも無くゴロリと寝返りをつつた。ところが…。

『起動。』

「え…？」

声のした方を振り向くとそこには…よく瞬間移動するみらいの本ではなく、今までピクリとも動かなかった“自分の本が怪しく光ながら宙に浮いていた”。思わず思考がフリーズするはやて。しかし、そんな彼女に構わず自体は進行する。

――カツ！！

「おわっ！？」

突如光が強く輝き、はやての寝室が光で満たされた。やがて、光が収まるとそこには、四人の人影が存在していた。そしてそのうちの一人、ピンク色の髪をしたポニーテールの女性が口を開いた。

「『闇の書』の起動、確認しました。」

続けてやや短めの金髪の女性が言葉を紡ぐ。

「我ら闇の書の蒐集を行い、主を護る守護騎士でございます。」

そして、白い髪で獣の耳と尻尾を付けた筋肉質の男と、赤い髪を三

つ編みにした少女が言葉が続けた。

「夜天の主の元に集いし雲。」

「ヴォルケンリッター。なんなりと御命令を…。」

そう閉めくり、主であるはやての返事を跪きながら待つ四人…『ヴォルケンリッター』。だが、いつまでたっても無反応であるはやてを怪訝に思い、赤髪を三つ編みにした少女が顔を上げる。

すると、はやては気絶とまでは行かなかったが、呆然としていた。日ごろ、みらいやファイア達と過ごしたせいで耐性はついていたが、流石にこんな予想外な場所とタイミングでこんな状況になったことには驚きを隠せなかったようである。

「…おい、あんた大丈夫か？」

「え？…ああ、うん。大丈夫や…。」

「ヴィータ、主の御前だぞ。無礼な真似は許さん。」

三つ編みの少女…『ヴィータ』に咎めるような口調で話しかけるポニテールの女性…『シグナム』。



「別に気にせんでもええよ？私もこの状況がよく判らんし…。詳しい話、聞かせてくれへん？」

「主の望みとあらば。」

物事が割と穏やかに進み、ホッとするはやて。何度か命を狙われたことのある彼女にとって、彼女らに敵意が無い時点で充分なのだ。

「では、改めましてこの『闇の書』なのですが…。」

――ガチャッ

「おい、はやて。また勝手に魔方陣弄くつたのか…。」

流れる気まずい沈黙。片付けを終わらせた直後、何故かはやての部屋から魔法の反応を感じ、様子を見に来たみらいが寢室の扉を開けたのである。

「……………」

何を言えいいのか判らず、6人は沈黙を保つ。だが、その空気をシグナムが叩き壊した。

「『シャマル』、『ザフィーラ』主を守れ！！ヴィータ、やるぞ！！」

-  
- 物事を物騒でややこしい方向へと…。こうして、海鳴市二度目の騒動は幕を開けたのである。

### 第三話 起動（後書き）

近日、アリシアを含めた数人のプロフィールを書きます

## プロフィールと補足（リリア追加）（前書き）

改めてオリキャラ二人の紹介と補足を…。

## プロフィールと補足（リリア追加）

名前 八神みらい（本名ミランダ・ラインベルト）

年齢 26歳（年明けと共に27歳になる予定）

武器 銃剣オルギニス（ベルカ式）

出身 アルテミア王国

備考・管理局も知らない世界から突如地球に現れた次元漂流者。偶然はやてを助け、そのまま居候していたら、いつのまにか家族と認め合うほどの仲になっていた。ジュエルシード事件を経てフィアやなのは達と交流を持ち、現在でも家族ぐるみで度々遊んでいる。ちなみに、元近衛隊の猛者ゆえ、実力は折り紙つき。大量の魔力光を引き連れて戦う姿から『銀河の守護霊』と呼ばれていた。

今回の『闇の書』による騒動は、彼の所持品と祖国の“とある物語”が関わってくる。

名前 ファーア・レイガード

年齢 20歳（来年の春頃に21歳になる）

武器 魔剣ヴィルガロム（現在、少々おかしなことに…）

出身 ベルファーア連邦

備考 みらいと同じく管理局が知らない世界から来た次元漂流者。アルテミア王国とベルファーア連邦は同盟世界なため、二人は互いの噂程度なら知っていた。今では戦友といった間柄になっている。ジュエルシード事件解決後、ほぼ成り行きで妖怪化したアリシアと行動を共にする。祖国では特務准将の座に就いており、自身の能力とどんな状況でも生き残ることから『黒鋼の不死鳥』の異名を持つ。もつとも、一度死んだことがある本人にとっては皮肉にしか聴こえていない。

彼らが度々使う『思念通信』や『非殺傷機能』などは、『思念通話』や『非殺傷設定』などと微妙に仕組みが違う。が、大体は一緒である。

名前 リリア（正式名称 先行試作型携帯式サポートAI・No1 2・リリアンヌ）

年齢 造られてから13年経過、ついでに人格は女性。

備考 兵士をサポートするべく造られた試作AIの一機でフィーアの相棒。見た目は腕時計となんら変わらない。魔道科学の結晶であり、高性能な通信システムや索敵システムを搭載、さらに魔法も科学も理解できる上に使用もできる。試作型とはいえAMFを強制解除したこともある。本来なら数年の試験運用の後に回収される予定だったが、フィーアとリリアが渋ったために未だ現役を続行中。

フィーアと共に戦場を歩み続け、進化と成長を続けている。現時点では並みの魔導師より驚異的である。

名前 アリシア・テストロッサ

年齢 幽霊時に意識不明状態の期間があったので不明（精神年齢は15歳前後）

出身 ミッドチルダ

備考 死後リニスと魂が融合し、様々な力が集った『時の庭園』を経て妖怪『猫又』化したプレシアの娘。魔力は無いに等しいが妖力を所持しており、使い魔と違って完全に独立した存在。とりあえずプレシアとフェイトを救い、自分の亡骸を家族の元へと連れ帰った

ファイアに恩を返すべく現れたが、いつのまにか二度目の生を謳歌することに夢中である。また、家族を含めた周囲の人間には、まだ自分の事を教えていない。

ある日、こっそりファイアの魔剣に触れたら、自身の妖力に反応してヴィルガロムがおかしな事になった。今は特に問題無いのでファイアは怒ってない。



プロフィールと補足（リリア追加）（後書き）

ツッコミどころ満載ですな…。

#### 第四話 守護騎士と守護霊（前書き）

あ…プロフィールに2人の通り名とリリアのこと書き忘れた……。

## 第四話 守護騎士と守護霊

みらい side

＼八神家・am0:03＼

「待て待て待て待て待て待て！！落ち着け落ち着けえ！！」

「問答無用！！」

今、はやての部屋はいつになく混沌としていた…。突如現れた守護騎士『ヴォルケンリッター』に敵と認識され、いきなりそのリーダー格に斬りかかれたみらい。彼は必死の形相で彼女の愛刀『レヴァンティン』を白刃取りで抑えていた。

（『はやてを守れ』と言ったな…。つまり敵では無い筈。そもそも…。）

…敵ならば…はやてに害なす者ならば、この家に設置した迎撃魔法が発動するはずなのだが…。

「…私の斬撃を初見で見切るとはな。貴様、できるな……。」

こっちは頭の整理を含めて必死だというのに、目の前の女性は心底楽しそうである。

「TPOを弁えていれば俺も似たようなことを思ったかもしれん。だが、敵と認めてない者に向ける闘志は持つとらん……！」

「それは私が相手にする価値もないということか……！」

「…おい、シグナム……。」

言葉の意味を勘違いし、激昂する目の前の彼女…『シグナム』。だが、そんなシグナムに『ヴィータ』と呼ばれた少女が気まずそうに声をかける。

「後にしろヴィータ……！騎士の誇りに賭けて私はこの男を……。」

「そいつ……主の家族だって……。」

・・・ピシッ

そんな音がシグナムから聴こえた。冷や汗をダラダラと流しながら、『ギギギ』ときこちなく首を後ろに回すシグナム。すると目に入ったのは、顔を真っ青にした守護騎士達と、笑顔を保ちつつ額に青筋を浮かべた主…はやてが居た……。

はやて side

くリビングにてく

「申し訳ありませんでした…。」

「いや、気にしないでいい。」

八神家の住人2人と守護騎士の4人は、色々と詳しい説明をするためにリビングへと移動した。リビングに来た途端、シグナムがみらいに土下座をしていた。

「甘いで、みらいさん。こいついつ時はもっとビシッとせな…。」

「ならば、お前にももうちょい厳しく…。」

「前言撤回や。」

「…あれ以上厳しくされんのは嫌や…。え？充分甘やかされてるやと？細かいことは気にしたらあかんよ？」

「…何を考えている？」

「何でもあらへん。さ、説明してもらおうで？」

「承知しました。」

その言葉を機に、シグナムが『闇の書』の説明を始めた。曰く、この全部で666ページもある『闇の書』というのは、他者の魔力の源…『リンカーコア』を全ページ分集めると持ち主に絶大な力を授けるというものらしい。彼女ら『ヴォルケンリッター』はその持ち主を守る護衛役なのだそうだ。

そして、彼女達が『ベルカ』に縁がある者達であることと、『時空管理局』とはなるべく会いたくないということも聞いた…。

「成る程な。これって実はとんでもない本やったんか…。」

「…うつすらと魔力がにじみ出てたのは気のせいでは無かったのか…。」

「では、早速蒐集のほうを…。」

説明を終わらせて早々にシグナムが蒐集の開始を提言する。しかし…。

「却下や。」

「「「「…は？」「」「」」

これには守護騎士の4人も啞然とした。眼前の主は、強大な力を手に入れる機会を目の前に『却下』と言ったのだ…。そのことが信じられない様子の4人だったが、みらいは違った。

「やっぱ、そうなるか…。」

「当たり前や。んな人様に迷惑かけてまで力なんか欲しくないわ。そういうわけで蒐集は禁止。これは主としての命令や。」

はやては『闇の書』を完成させる気が全く無いようである。そうすると困るのは守護騎士達のほうである。最初に赤髪の少女…ヴィータが口を開いた。

「じゃあ、あたしらはどうしたらいいんだ…？」

自分たちの役目のひとつ、蒐集が禁止されたので何をすればいいのかわからず、戸惑ってしまう4人。そこで、はやてが提案する。

「私たちの家族にならへんか？」

「……え？」「……」

まさかの提案に再び啞然とする守護騎士達。今日は思考がフリーズしてばかりである…プログラムの方にバグが発生しないか不安になってきた…。

「確かに蒐集は禁止したけど、私が主なことに変わりは無いんやろ？ だったら、みんなの面倒をみるのは主である私の責任。ただ、どうせなら家来とかじゃなくて家族として面倒みたいんや…。」



「い、いいのか…？」

「ちょ、ヴィータちゃん！！」

まだ若干躊躇う4人。そんな彼女らをみらいが後押しする。

「お言葉に甘えておけ。俺も、お前らと似たようなもんだった…。」

……ただの居候から、いつの間にか本当に大切な家族になっていた。

経験者にもそう言われて決心がついたらしく、守護騎士<sup>みらい</sup>たちはついにはやての提案に首を縦に振った。それに対し、はやてはすごく嬉しそうである。

「よし、決まりや！！私は『八神はやて』。改めて、よろしく頼むで〜。」

主のそれに応じるために、守護騎士達も改めて名乗りだす。

「闇の書の守護騎士ヴォルケンリッター、剣の騎士、烈火の将、『シグナム』でございます。」

「同じく、湖の騎士、風の癒し手、『シャマル』です。お世話になります。」

「鉄槌の騎士、『ヴィータ』だ…。」

「盾の守護獣、『ザフィーラ』。お気遣い、感謝する。」

各自、物々しくも礼儀正しく（1名、微妙）自己紹介をすませたヴォルケンリッター。さらに将であるシグナムが全員を代表して締めくくる。

「我らヴォルケンリッター一同、ご厄介になります。」

「いえいえ、ようこそ八神家へ。…って、みらいさん？何、自分だけ難しい顔しながら黙っとるねん…。」

「…ん？ああ、すまん。ちょっと考え事を…。」

今まで沈黙を保っていたみらいが慌てて名乗る。

「俺は『八神みらい』。いわゆる次元漂流者で元居候だ……おい、はやて。何故にそんな目線を送ってくる？」

何故かはやてがジト目でみらいを見つめてきたのだ。困惑するみらいにはやては口を開く。

「分かってないなみらいさん……。みんなが折角かつこいい名乗りを上げたのに、自分だけそんなんでいいと思つとるんか？」

「…つまり、俺に本名の方を名乗れと？」

「そうや。」

その言葉にため息を吐くみらい。しかし、シグナムを筆頭に全員名乗ってもらった手前、自分だけそうしないわけもいかず、諦めた。

「それでは改めて…アルテミア王国、元王家直属近衛銃士隊一等武官、『ミランダル・ラインベルト』だ。この際だ、好きに呼んでくれ…。」

「因みに『銀河の守護霊』なんて通り名がついてたらしいで。」

「それは言わない約束だろがあああああ!!」

いきなり黒歴史を暴露され、荒ぶるみらい。『20代で物語の英雄扱い』という、むしろ光栄に感じる理由なのだが、どういう訳か本人はひどく嫌がっている。

「ええやん。『盾の守護獣』がありなら『銀河の守護霊』くらい普通や。な? ザフィーラ。」

「我ですか? ……自分としては立派な二つ名だと思いますが…。」

「…もう、いいよどうでも……。」

…そんなに重たい話ではなく、むしろ笑い話の部類に入るのでいつか話してやるかと決めたみらいであった。

シグナム side

はやてとみらい、二人のやり取りを見ながらも、シグナムはある事

を訊きたくてもしょうがなかった。ところが、先にその事に触れたのはみらいだった。

「そつえば、訊きたいことがある。」

「なんでございましょう…?」

「…これ。」

みらいは“ある物”を取り出す。それを見た瞬間、守護騎士の表情が驚愕に染まる。

「…やはり見間違いではありませんでしたか…。」

「「!?!」」

「『闇の書』がもう一冊!? あんた、これどうしたんだ!?!」

ヴィータ達を驚かせたのは、みらいの所持品である『謎の家宝』である。こちらは未だに鎖で縛られたままだが、やはり『闇の書』と瓜二つである。先ほどのゴタゴタの最中、視界にチラリと入ったので気になっていたのだ。

「うーん…その反応からして、やっぱりコレの正体は謎なのか……  
あと、もうひとつ驚くかもしれないことがあるんだが…」

そう言つて手を掲げるみらい。すると、彼の手に三角型の魔方陣が出現した。

「…もう、なんとはいいいのか分かりません……。」

ただでさえ信じられないこと続きだというのに…自分達ベルカと全く縁の無い筈の世界出身の彼が何故…。

…ベルカ式の魔方陣を展開している？

咄然を通り越して、最早狼狽の域に達してきた守護騎士たち。彼女らのその様子に、みらいも流石にこれ以上話しを続ける気が無くなった。なにより、はやてがいい加減眠くなってきたようで、ウトウトし始めている…。

「なんか話が長くなりそうだから続きは明日…いや、もう日にち変わってるのか……。朝にしよう。部屋はどうするか…。」

「丁度いい空き部屋があるから、布団出してシグナムとシャマルはそこにしよ。ザフィーラはみらいさんと一緒にええか…。」

「あの、あたしは…？」

一人余ったヴィータが尋ねる。それに対し、はやてはニッコリしながら答えた。

「私と一緒にや」

「あ、そう…。」

ヴィータは微妙な表情を見せたものの、翌朝に満足気な表情を見せながら起床してくることは、本人さえ知らない。

――この日、八神家に新しい家族が増えた。その光景を、“みらいの本”が心なしか嬉しそうに眺めていた…。

#### 第四話 守護騎士と守護霊（後書き）

ヴォルケンズの称号、特にシグナムのってアレであってましたっけ？



## 第五話 平和で騒々しい日常（前書き）

今後、ちよいと展開が原作と季節がずれるかもしれません…。

## 第五話 平和で騒々しい日常

はやて side

「12月28日・八神家」

「みらい殿、また手合わせ願えないだろうか？」

「ん？いや、今日はちょっと。」

朝食を終え、新聞を読んでいたみらいに模擬戦を申し込むバトルマニア（シグナム）。それに対し、同じく戦闘好きである筈のみらいは珍しく渋る。そこへ、ヴィータとはやてが口を出す。

「ちょっと待て、シグナム。今日、みらいはあたし達と遊ぶんだ。」

「そうやで。だいたい、昨日二人が暴れたせいで庭がとんでもないことになったばかりやないか…。」

先日、二人の戦闘狂により八神家の庭は悲惨なことになる…。無論、原因である二人は責任を持って庭を修復した後、残りの家族全

員に説教を受けた。

「ぐっ…。」

「そういうわけだ。それに、今日は先に二人と遊ぶ約束をしてたんだ。悪いがまた今度な？」

「…わかりました。ですが、年内にもう一度くら「今日の夕飯はシグナムだけシャルルの料理や。」…すいません、自重します…。」

「ちょっと！？それどう言う意味よ!？」

自身の料理を罰ゲームのように扱われ、食器を洗いながら憤慨するシャルル。しかし、そのことに関しては誰も味方してくれなかった…。

「言葉のままだ。あのザフィーラを見てもまだ言っか…。」

そう言ってベランダの方を指差す。するとそこには、蒼い毛並みの狼が丸くなって蹲っていた。実は昨日の夜からずっとこの調子なのである……原因は…言わずもがな……。

「違うもん！！私、料理下手じゃないもん！！昨日はたまたま失敗しただけだもん！！」

「失敗しても“マズイだけ”にしろ！！」

昨日ザフィーラが倒れたとき、シャルは『ただ眠くなっただけよ』  
と言ってたが、みらいは目撃した。彼女がこっそりザフィーラに“治療”魔法を使用したのを……“治療”ではなく“治療”だったことが余計に不安だった…。

「まったく…。頼むから、もう一人で料理すんのはやめてくれよ？」

「…はい。」

……『闇の書』の起動から三日、守護騎士たちは八神家での生活に早くも慣れてきたようである。彼女らを迎え入れた二人も、新たな日常を満喫している。特にはやては、みんなの服を買いに行った時にとてもイキイキとしていた。

「そんで遊ぶ約束はしたけど、何をするんだ？いつもみたいに釣りは無理だろ？」

「そつやな、ヴィータがなあ…。」

先日、みらいの『どこでもフィッシング魔方陣』で釣りを教えてみたのだが…ヴィータは開始3分で飽きてしまったのだ。彼女の性格上、ああいうのは無理らしい。

「あれの何がおもしろいんだよ…。」

「大人の遊びつてもんが分かってないな…。そんなだから見た目も…。」

「ああ！？（怒）」

「すまん、言い過ぎた…。」

そんなわけで頭を悩ます3人。あんまり派手に体を動かすようなことは、車椅子のはやてがキツイので却下。室内系は、元気が有り余ってるヴィータが嫌がる…。

「…あ！隠れんぼでもするか？」

「え？家でするん？」

「狭いんじゃないかねえか……？」

八神家は比較的に広い方に分類されるが、隠れんぼをするには流石に狭い。そんな二人の心配を余所に、みらいは不適な笑みを浮かべる。

「ふふふ……、抜かりは無いぞ？ ちよつと待ってろ。」

そう言つて早速魔方阵を展開するみらい。ベルカ式と独特の技術が混ざったアルテミアの特有魔法である。シグナムとシャルがその光景を二日前の会話を思い出しながら眺めていた。

「……やはり、細かい部分は違えどベルカ式だな。」

「そうよねえ……。でも、アルテミアなんて世界……私たちの時代にあったかしら……？」

『闇の書』が起動した翌朝、みらいはシグナム達に自分の世界のことを語った。特に、互いにその存在すら知らないにも関わらず、何故か同じ魔法技術を有していることには驚いた。名前が『ベルカ式』で彼女達の出身が『ベルカ王国』なら、やはりアルテミアになんらかの形で技術が流れたということで一応片が付いた。

「…だが、実用性や出鱈目加減は向こうの方が上かもしれん……。」

「…体をそのまま縮めるってどんな魔法よ……？」

二人の視線の先には、みらいの発動した魔法陣により人形サイズまで縮んだはやてとヴィータ、そしてみらいが居た。

「うおおおお！？なんだこりゃああああ！？」

「わああ…、家具がめっちゃでかく見えるわ……。」

「ぬはははは。本当はコレ、潜入や隠密行動専用の魔法なんだけだな…。まあ、要は使いようだ。これで思う存分遊べるぞ……ん？お前も参加するのか…？」

よく見ると、3人に加えて“みらいの本”…最近はとりあえず『黒の書』と呼んでいる例の本が一緒に縮んでいた。こっちは“自力で”縮んだようである。

「なんか最近積極的やな…。もしかして、前から構って欲しかったんか？」

「…あたしはあんまりコイツ好きじゃないんだけど……。」

「どう考えたって、あの時はヴィータが悪いだろ？」

あの時とは、アルテミアとベルカの話が終わらせたとのことである。ひとりでに移動することからただの本では無いことは確かなのだ。しかし、一応できる範囲で調べたのだが、結局『闇の書』とそっくりな理由も中身がなんなのかも解らなかった。鎖が取れないので中身を調べれないのだ。それに痺れを切らしたのがヴィータだったのだが…。

『ああもうメンドクせえ！！どいてろ！！』

『馬鹿！！よせ！！』

『「ラケーテン・ハン」ズビシッ！！「ブベツ」？』

…鎖を叩き壊すべく『グラフ・アイゼン』を振り上げたヴィータの顔面に、『黒の書』がメリ込んだ…。

みらい曰く、自分も同じようなことを何度かしたらしいのだが、ヴィータと同じように反撃されるか瞬間移動で逃げられたのだそうだ



…。そのため、鎖を外すこと自体はとうの昔に諦めていた。

「ていうか、知ってたら止めろよ!」

「『よせ!』って言ったろうが…。」

「まあまあ、とにかく始めよ? 『黒の書』さんも混ぜてええよ。」

はやての言葉に喜ぶかのごとく『黒の書』は宙を舞った。その様子に若干ヴィータがおもしろくなさそうな表情を見せる。しかし…。

「んな顔して…。本当は自分が悪かったって分かってるくせに…。」

それを直接言うと思うので黙々とくみらいであつた…。そして同時に、今後のことを真剣に考え始める。何を考えてるかという、自分たちの友人達のことである。

- - - 先日、管理局員であることが発覚した猫姉妹。

- - - 前回の事件を経て交流関係が続いている提督と執務官ら。

- - - 管理局の民間協力者である戦友達。

そう…彼の周囲には、守護騎士たちが接触を避けたいと言った管理局員だらけなのだ……。そのことを言った時の4人の様子は、容易には語れないほどに落ち込んでいた。それに対し、みらいは『大丈夫だ』と言ったのだが…当然、簡単な話では無い。

（なのはやフィーアは話せば解るとして…問題はアースラか……。）

特にクロノだ…。あの真面目な性格上、説得には苦勞しそうである。リンディは…考えるのはよそう…絶望しそうだ……。

…ハラウン親子と『闇の書』の因縁を知らないみらいは、それ以上のことを考えなかった…。

「みらいさん？どうしたん？」

「おっと、悪い悪い考えごとしてた…。」

せめて、今ぐらいそのことは忘れよう…。そう思いながら、みらいははやて達と遊び始めるのだった。

…この時、彼はまるで予想していなかった…。“あの二人”が自分達に隠し事をしていることを…そして、それが辛くなってきた

いたことを……。

## 第五話 平和で騒々しい日常（後書き）

次回は大晦日の話になります。

## 第六話 大晦日 年越し準備編（前書き）

作者は転生物が嫌いなわけではありません。むしろ、お気に入り登録してあるのがチラホラと…。

## 第六話 大晦日 年越し準備編

みらい side

〽海鳴市・12月31日・15:37〽

本日は大晦日。一年の終わりとあつて、どこの家庭でも多少なり忙しそつである。ある者は終わらなかった大掃除を、ある者は宴会の準備を、そして…

「【紫電一閃】!!」

「【三日月閃光波】!!」

……ドゴオオオオオオオオン!!

今年最後の模擬戦を楽しむ…のはこの二人ぐらいであろう……。レヴァンティンとオルギニスをぶつけ合いながら、二人の戦闘狂は次第に笑みを深くしていく。

「流石です、みらい殿!!」

「そつちもな！！シグナム！！」

二人は、はやてに頼まれた今晚の買い出しの帰り道である。思ったより早く済んだので、空き地で模擬戦と言う名の道草に興じていた。当然、抜け目なく封鎖結界は展開済みである。

「それにしても…、別に敬語使わなくていいって、言ってるだ…ろ！！」

…ガキンツ！！

「私がそうしたいだけです！！お気になさらず！！」

振り下ろされた銃剣をレヴァンティンで防ぎながら返答するシグナム。この数日で、みらいとはやてに敬語を使っているのはシグナムとザフィーラくらいだった。しかもザフィーラの場合、ただでさえ口数が少ないので微妙に判別がつかない…。

「なんかムズムズするんだよ！！」

「慣れてください！！」

その後も2度3度と切り結び、戦いは激しさを増していく。ところが、その二人の間に水を差すような音が響く。

・・・ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。！

「つと、時間が…。」

「そのようですね…。仕方ありませんか…。」

ほつとくと一生終わらないことは自覚してたので、アラームをセツトといたのだ。これ以上続けると時間が遅くなり、道草食ってたことがばれる…。

「ザフィーラの二の舞は嫌だからな…?」

「承知しております…。」

・・・八神一家暗黙のルールその1。悪い子には『シャマル飯』。  
「『みらいのデコピン』。」



「…みらい殿のデコピンも相当なモノでしたが……？」

「当たり前だ。今、はやての辞書に『自重』があるのはデコピンの御蔭だ。」

最近の犠牲者はヴィータである。勝手に『黒の書』の鎖を壊すことにチャレンジし、それに対して『黒の書』が激しく抵抗したせいで家が滅茶苦茶になってしまったのだ…。そして主の権限により、お仕置き内容が『みらいのデコピン』になったのである。

「その後、ヴィータはずっと呻きながら床を転がってましたよ…。」

「ヴィータも流石にこれで懲りたる。さて、さっさと帰らないと俺らが同じくらい酷い目に遭うからな…急ぐぞ？」

「はい。」

そうして二人は買い物袋を手に、帰路に着いた。しかし、悲しいかな…戦闘の余波で傷んだ食材があったため、二人が寄り道して模擬戦をしていたことが発覚してしまい、二人ともシャマルの作ったお菓子を食べる羽目になった。その結果…。

「シグナムてめえ！！俺が先だああああああ！！」

「譲れません！！こればかりはああああ！！」

「二人とも…あんまりうるさいと、夕飯無しやで…？」

「…夕飯時までトイレの獲り合いが続いたそうだ…」

フイア side

〈次元航行艦アースラ・艦長室〉

「本当にお疲れ様。」

「どうも。疲れの元凶さん…。」

アースラの艦長室で、二人の人物が向かい合っていた。1人はこのアースラの艦長『リンディ・ハラウン』提督。もう一人は『フイア・レイガード』臨時教導官である。今年の仕事が一段落し、ね

ぎらいの言葉と報酬を受け取りに来たのである。

「あら酷いわ。諸悪の根源みたいな言い方なんかして…。」

「実際そうでしょう？あなたの無茶なスケジュールのせいで、今年最後の一月月武装隊とクロノの顔しか見た記憶がないんですから…。」

「

げんなりしながら言うフィアだったが、その言葉を聴いたらクロノ達は本気で怒るかもしれない…その鬱憤を晴らすための被害者は主に彼らだったのだから…。」

「ま…給料も入ったし、それなりに楽しかったからそれ程悪くはなかったですけどね…。」

「それはよかったわ。…因みに、この後は何か予定でもあるのかしら？」

「いや。家に帰っても俺しかいませんし、だからと言って各自の家族団欒を邪魔したくありませんから、もう一日御厄介になります。」

それを聴いてニツコリするリンディ提督。いつもの嫌な予感をする笑顔とは微妙に違い、逆に不審に思ったが、その心配は無駄だった。

「アースラクルーで年越しパーティやるんだけど、来ない？」

「本当ですか？それは是非とも参加させてください。」

元々そういう宴会や祭り事は好きなので、内心すごく喜んでいて。さて、何を持っていいのかな…と、考えていたらある事を思い出した。

「…開始時間はいつです？」

「午後6時だから…まだまだ時間には余裕があるわね。何か用事でも？」

「はい。それまでには終わりそうなので先に済ませときますね。それでは後ほど…。」

「ええ、待ってるわ。」

そう言ってフィアは艦長室を出て、そのまま真っ直ぐと向かっていった。自室では無く、先日の訓練時に赴いた『瓦礫の世界』へと…。

??? side

とある管理外世界

「クソッ…一体、何がどうなっているんだ……。」

「落ち着けよ、それを確かめるために呼んだんだろ？」

前回、フィーアとクロノ達が訓練で使用した瓦礫だらけの世界に二人の人影があった。二人ともフィーアが鍛えた武装隊の一員である。

「だがな、俺の記憶上あんな“奴ら”いなかった筈だぞ？あいつらのせいで展開も大分変わっちゃったし……。」

愚痴をこぼし続ける金髪でオッドアイの少年。それに対し、相方らしき黒髪に赤い瞳の少年が答える。

「けど、どっちかつーと良い方向に変わったじゃないか。プレシアとフェイトも和解してたし……。」

「そ・れ・を、俺がやりたかったんだよ!!」

「…いい加減、前世のことは忘れないか？」

「馬鹿言え!! 九死に一生よりレアな状況だぞ!? 簡単に諦めれるか!!」

金髪の少年の言葉に、黒髪の少年は深い溜息をついた。別に友人と言えるほどの仲では無いが、自分の周囲に居る“同類”は彼しかないのだ。当初、“知識が無い”自分は世界を壊すかもしれない恐怖に襲われて下手に動けなかった。そこで、背に腹は変えられないので彼と行動を共にしていたのだが…。

「俺は神に選ばれた存在だ!! ハーレムを作る権利くらいある筈だ!!」

（…絶対に頼る相手を間違えた…。）

第一、こいつの言う通りならすでに自分が恐れてた『世界の破壊』が起きたのだ。その影響は自分が思ったより全然しょぼく、むしろ悪くなかった。同時に、『展開』を半ば神聖視してた自分がアホらしく感じた。

（この世界が前世のアニメ世界だからって、ちょっと自惚れたのか  
もしれない…。）

――自分はもう、この世界の一人の人間であることを忘れていた  
のかもしれない…。

そんなことを考えていたら金髪の少年が声を荒げ始めた。

「遅ええんだよ！！いつまで待たせんだ！！」

「…提督への用事の方が一局員の呼び出しより重要に決まってるだ  
ろ？」

気づいたら相方が呼び出した人物…『フィア・レイガード』がい  
た。心なしか彼は少々不機嫌そうである。当然と言えば当然だが…。

「で、なんの用だ？『閃夜光』二尉。『レスター・D・シャーマ  
ン』三尉。」

黒髪の少年…『レスター』は若干俯いたものの、金髪の少年…『光  
一』は叫ぶ。

「とぼけんな！！てめえも『転生者』なんだろ！？」

なんの駆け引きも無く、いきなり核心を問いかけた光一。それに対しレスターは啞然とするが、フィーアはというと…。

「違う。」

即答した。だが、レスターは不審に思った。転生者では無いと言うのなら、何故“転生者と言う言葉に疑問を持たない”？光一も同じらしく、立て続けに怒鳴り散らす。

「嘘つくな！！知らないなら“転生者”って言葉に疑問を持つ筈だ！！」

「俺はお前の言う『転生者』じゃあ無い。が、『転生者』がなんなのかは知っている。」

「何…？」



「この世界は…、君達の言うところのアニメの世界なんだろう？そして、君達は前世の記憶があり、さらに神を名乗る者から力を与えられた……だろ？」

「ッ！？」

二人の反応を見て、自分の予想が当たっていることを確信したフィアは言葉を続ける。気のせいだろうか…フィアの雰囲気が変わって来た気がする……。

「やはりそうか…。この半年で、『転生者』を名乗る人間が何人も僕のことを殺しにきたよ…。やれ『原作を守る』だの、やれ『俺の嫁に手を出すな』だの、やれ『原作をぶっ壊す』だの……何様のつもりだい？」

「ひいつ！？」

言葉と共に殺気をぶつけられ、光一が悲鳴をこぼす。だが、フィアの言葉は終わらない。

「君達の前世ではどうだったか知らないさ…だけど、この世界の住人は間違いなく存在し、生きているんだ。みんなそれぞれの物語を歩んでいるんだ…。にも関わらず、君たち転生者はみんなを“会話できる登場人物”ぐらいにしか考えていない！！みんなの人生を“

物語の展開”ぐらいにしか考えていない!!”」

訓練の時とは比べ物にならない規模の怒気と殺気を溢れさせながら  
フィーアは激昂する。その気配に当てられ、二人は全身が震え始め  
た。だが、震えながらも光一は抗う。

「ふ、ふざけんな!! 勝手なことばかり抜かしやがって!! 黙らせ  
てやる!!”」

「よせ!! 確かに俺たちはこの世界の住人を“ひとりの人間として  
”見て無かった!! 間違ってたのは俺たちだ!!”」

「すっ込んでろ腰抜け!! 俺は神に選ばれた人間だ!! モブキャラ  
”ごときに!!”!!”」

――フィーアにソレは禁句だった…。それは今の彼にとって一番  
の禁句…。

「…閃夜……。僕は言った筈だ…“この世界の住人はそれぞれの物  
語を歩んでいると”……。”」

「黙れモブ!! “原作の主要メンバーが居れば後はどうでもいいん  
だよ”!!”」

-  
-  
- その瞬間、レスターの視界から閃夜光―が“消えた”。

第六話 大晦日 年越し準備編（後書き）

大晦日は三つに分割します

第七話 大晦日 荒ぶる不死鳥編（前書き）

これで大丈夫かな……？反射対策……。とりあえず、光一が能力を原作キャラ程使いこなせてないのを前提でお願いします。

## 第七話 大晦日 荒ぶる不死鳥編

レスター side

(う、嘘だろ…!?)

転生者：レスターは大変驚愕していた。さっきまでフィアに向かって口上を述べていた光一が視界から消え、彼がいた筈の場所にはフィアが立っていた。光一の腹部があつたであろう部分に蹴りを決めた体制のまま…。

しかし、それ以上に驚くべきことがあつた。

(なんで『反射』が発動しなかった…!?)

――光一が神を名乗る者から受け取った『ベクトル操作能力』が発動しなかったのだ。

光一は神を名乗る者に出会った時『SSS級の魔力』と、レアスキルとして『ベクトル操作能力』を所望したのである。その要求は通り、彼は“自分が考えうる限りで”無敵の存在になった…筈だった。ちなみにレスターは、自分の好きだったアニメの機体をデバイスに

してもらっている。

（『木原真拳』でも使ったのか？）

無敵と謳われたその能力を、原作で破った数少ない方法を思い浮かべる。しかし、その割には威力がおかしいような…。

「…ねえ。」

「はいい！？」

いきなり声をかけられ、思わず両手を挙げて上擦った声を出してしまった。今更だが、フィーアの雰囲気が目頃のものと同じすぎてメチャクチャ怖い…。

「君も僕と戦いたい？」

「滅相ありません！！」

そもそも光一が勝手にやってることであって、レスター自身はフィーアと戦う気などなかった。それ以前に勝てる気がしない…。

「そう…、だったら早く“訓練通り”にした方がいいよ?」

「え?」

「【羽ばたけ・黒羽】。」

そう言つてフィーアは翼を生やし、さつさと飛んでいつてしまった。  
一人残されたレスターは、フィーアの意味を考える。そして  
…。

「ッ…! やつべ、そういうことか! ? 『ガデラーザ』 セットアップ  
! !」

《AiAiSir》

慌てて自身のデバイスを展開し、その場を飛び去るレスター。

…それとほぼ同時に、レスターの居た場所が光の奔流に飲み込まれた。





・・・ヒュンッ！・・・どごおおっ！！

「うごっおおおおお…！？てめえ…なんで生きてやがる…！？  
てか、なんでさっきから『反射』が発動しねえ…！？」

「企業秘密だ。」

風を切る音と鈍い打撃音が響く。空中から一気に加速し、思いつき  
り光一を踏みつけた。実はさっきから『反射』は“発動している”  
のである。さっきからフィーアはある程度手加減した蹴りを放ち、  
その威力に比例した出力の『反射』による力を感じた瞬間、全力の  
蹴りを放ちながら“『反射』の力をぶち抜いている”のである。

ただ…この方法はやたら神経を使い、『反射』に逆らって蹴り抜く  
ので足が痛い上にかなり威力が減るのである。しかも、相手が『反  
射』の出力を最大にしたらこの手は使えなくなる。

「…クソツタレ！！どきやがれ！！」

「おっと。」

ベクトル操作により力を増幅させ、勢いよく起き上がりながらフィ  
ーアを退ける光一。フィーアは特に焦ることもなく立ち退き、その  
まま彼は瓦礫の山に走り込んだ。

「逃げる気か！？ふざけんな腰抜け！！【ジェノサイド・インパクト】！！！」

彼のデバイス『エクスカリバー』により放たれた魔砲が周辺を薙ぎ払う。だが、何発放とうともフィーアにはかすりもしない。その時、急にフィーアが動きを止めて光一に話しかけてきた。

「なあ、閃夜光一二尉…。君は、この世界を何だと思っている…？」

「ああ…？そんなの決まっているだろ！！アニメ『魔法少女リリカルなのは』の世界だ！！」

「…その物語には出ないが、確かに存在している人々は君にとって何だ？」

「ハンツ！！モブキャラなんてただの“目障りな背景”だ。いつそ皆殺しにしてや……。」

光一はそれ以上言葉を続けることができなかった。何故なら…。

「…それを聞いて安心したよ……これで躊躇せずに…。」

- - - コロセルネ !!

『ベクトル操作能力』の『反射』は常に何でもかんでも反射してるわけでは無い。この世の全てを反射するということは、『重力』も『光』も『音』も『酸素』すら拒絶するということだ。某学園都市の最強は音を遮断したこともあるが、自分に話しかけてきた人物が何を言っているのか判らず、結局話を聞くために音の反射を切った。

つまり、日常生活に支障が出るものは“基本的に反射してない”ということである。戦闘のプロならば状況に合わせて最適な反射を選択しただろう。だが、光一は素人同然のクズ。

- - - カッ!!

「ギャあああああああああああああああああああああああああ  
ああああッ！！！！？」

故に、唐突に目の前で『スタングレネード』を炸裂させられれば、目を焼き切られるのは当然。ファイアの『黒羽』製、手加減無しに閃光弾は一瞬にして光一から“光を奪った”。

「目がっ！！目がああああああああ！！？」

--  
バァアアアアアアアアアアン！！

「――！！？」

ネタとかテンプレ抜きで苦しむ光一に容赦無く追い討ちを仕掛ける  
フィア。今度は“音を奪うべく”、“炸裂音を増強”させたグレ  
ネードを造りだし、炸裂させた。鼓膜を破り、さらに激しい苦しみ  
を伴う光一はもはや立っていることもできず、地面をのた打ち回っ  
ていた。

真つ暗で無音の世界に叩き落され、激痛に苦しむ光一はさらに自分に迫る脅威に気づくことはできなかった。いつのまにか彼の周囲

を怪しげな煙が取り囲んでいたのだ。フィアはいつのまにかガスマスクを造りだして装着している。やがて…。

「じぼッ…!？」

“酸素結合型の毒ガス”により吐血し始めた光一。様々な激痛に襲われながらも、本能的に彼は『ベクトル操作能力』により体内の毒素を排出しようとした。だが酸素と結合しているために、いつも以上に操作が難しく、毒素の排出に“ベクトル操作を集中”せねばならなくなつた。

この瞬間、『光』と『音』と『体の自由』を奪われた光一は、『反射』さえ奪われた。

- - - 『体の自由』を奪われた故に、逃げれない。

- - - 『音』を奪われた故に、彼の足音が聴こえない。

- - - 『光』を奪われた故に、彼が右手に握る黒い物が見えない。

- - - 『反射』を奪われた故に、その銃弾を跳ね返すことは叶わない。

「さよなら、閃夜光――等空尉。」

――ファイアの言葉と銃声が瓦礫の世界に響いた。

Fire side

「こんなもんか…。」

彼の足元には半端無い激痛の果てに、脳天に『ヴィルガロム・魔法銃形態』による“呪い弾”を撃ち込まれて沈黙した光一が転がっていた。死ぬ一步手前だが生きている。短期間とはいえ腐っても教え子の一人、しかも宴会の直前に殺人沙汰を起こすつもりは無かった。もつとも、“呪い弾”を撃ち込む直前までは殺す気満々だったが…。

《これからどうなさるんで？》

「呪い弾で『ベクトル操作能力』は使えなくしといた。あとはアイスラに連れて帰る。こんだけ酷い目にあっただ…流石に、この世界が物語なんかじゃない本物の現実って自覚したろ。」

《彼からしたら背景にボツコボコにされたってことですからね。そんな主人公願い下げです。》

「もっとも、これで懲りないようなら…。」

…今度は即効で殺す。

「さてと…シャーマン三尉!!降りて来い!!」

「はい!!」

不意に上を見上げながら声を出すファイア。すると上空には、一部始終を見ていたもう一人の転生者『レスター・D・シャーマン』が居た。悪魔のような戦闘を行った男に唐突に声をかけられ、恐怖しながらも素直に従う。



体をガクガクと震わせながら降りてきたレスターを睨みながらフィアは問う。

「俺が閃夜二尉を蹴り飛ばす直前に、貴官が言ったことに嘘偽りは無いか？」

「え？……あ…。」

「……確かに俺たちはこの世界の住人を一人の人間として見てなかった。間違ってたのは俺たちだ！！」

それは正真正銘自分の本音であるため、体の震えを抑えながら真っ直ぐな視線で答える。

「はい。それは俺の本音です…。」

転生者として、知りもしない原作の展開を気にして全ての行動を躊躇い続け、最終的に光一みたいな馬鹿にくつつくしかなかった…。今思えば、自分もその馬鹿の同類だったかもしれないが…。

「…ふむ、自覚してるだけコノ馬鹿（光一）よりマシか……。いい

だろう、害も無さそうだしほっといてやる。」

「へ？」

「なんだ？コイツと同じ目に遭いたいのか？」

「いやいやいやいやいやいやいやいやいやいや……  
そんなこと無いですけど、最初の口振りから考えて転生者が憎いよ  
うでしたから……。」

レスターはフィアの最初の言動から考えて、何人かの転生者と遭  
遇した拳句に転生者にあまりいい感情を持っているようには感じな  
かったのである。

「……実際、この半年で俺を襲ってきた何人かは憎くてしょうがない  
さ……。封鎖結界も張らずに襲い掛かってきた拳句、一般人を何人  
も巻き込みやがった……。その上こう言った奴がいた……。」

……こいつらが死んだって原作に影響は無い。

その言葉に啞然とするレスター。転生者としてではなく一人の人間

として、その言葉を吐いた転生者が信じられなかった。改めてこの世界の一人住人であることを認識した今は尚更である。

「流石にそいつを含めた何人かは殺した…。この馬鹿も同じ臭いをするが…まだやって無いようだから今回は見逃してやる。“一般人に向かつて攻撃したら死ぬ呪い”もかけといたと、そいつが目覚ましたら伝えておけ。」

「…了解。ですが……。」

「ん？」

自分の同類たちの行いに意気消沈するレスター。それでも、彼はフイーアに訊かざるを得なかった。

「あなたは一体何者なんですか？」

現在自分が存在するこの世界が広いことと、原作なんてものが通用しないことを理解している。それにしただって、『転生者』が平均して異質な存在であることに変わりはない。

…そんな存在をあっさり仕留めた彼は何者なのだ？

そう思うのは当然である。そんなレスターの疑問にフィーアは自嘲気味な笑みを浮かべながら答えた。

「ただの“死に損ない”さ…、詳しいことは後で色々教えてやる。ほら、さっさとアースラに帰るぞ。年越しパーティが始まっちゃう…。」

「は、はい。」

…沈黙中の光一を抱えながら、二人はアースラへと帰っていった。

くオマケく

「しかし、“アリス（アリシア）を預けたエイミィは”無事だろうか…？」

光一の呼び出しにきな臭いもの感じたので、念のためアリシアはエ

イミイに預けといたのである。

《普通、“エイミイさんに預けたアリスさんを”心配しません?》

「本気で言ってるのか?」

(アリス? ああ、あの猫か…。)

二人の会話を聞いていたレスターは思い出す。最近、何度も執務官補佐が金色の猫に抱きついては引つ掻かれるところを…。

(うん、危ないのは補佐官の方だ…。)

諦めることなくアリスに抱きついては切り傷を増やす補佐官の姿を想像するのは簡単だった。

…案の定、アースラに帰って来て出迎えてくれた彼女は絆創膏だらけだったそうなの…。

第七話 大晦日 荒ぶる不死鳥編（後書き）

レスターの方は今後ちよいちよい出します。

第八話 大晦日 年越し編（前書き）

みらいとリーゼ姉妹の出会いはその内書こうかな…。

## 第八話 大晦日 年越し編

レスター side

（アースラ艦内・食堂・12月31日・pm20:56）

「ようネーちゃん一緒に飲ま（バキイ！！）…。」

「アリス（猫）に絡むな酔っ払い…。」

「フィアさん！！艦長がクロノにも飲まそうとしてます！！」

「全力で止める野郎共！！」

「……了解！！」

現在、アースラの食堂は混沌としていた…。年越しパーティが開始されてしばらく経ち、いわゆる二次会状態になったのだが…武装隊と艦長含む一部の大人組が暴走し始めていた…。

「大丈夫ですか執務官！？」



「すまない、助かった…。」

「リンディ提督は一体何本飲んだ…？」

「…。（空き瓶の山を指差す）」

「ひい、ふう、みい、よ……七本!？」

乗組員に未成年も少なからず存在するアースラ。しかし、どうせなら年が変わるまでは起きていたいで、結局この戦場染みた宴会場にいるしかないのだ…。それ故、未成年と良識ある大人達が全力で鎮圧を続けていた。

その様子を遠くから、レスターは炭酸飲料をチビチビ飲みながら見ていた。自分は仲間達とちやっかり安全地帯に居たりする。

「改めてみると…、フィーア教官ってすっかりアースラで馴染んでるよな。」

そう言ったのは、武装隊で比較的仲のいい『ドートレス・リーオー三尉』。それに同調するように、『ジム・ヘリオン空士』が頷く。

「俺も最初は認知外世界出身って言うから、どんなヘツポコかと思つてたよ…。今思えば、すごい失礼な考えだよな…これ……。」

いつだかの訓練で質量兵器の恐ろしさと、しばらく共に過ごすうちにフィアの人格を知った彼は、管理外世界に対する偏見を無くしていた。

「ところでレスター、あの馬鹿の様子は？」

「ん？ああ、あいつか…。今は視力も聴力も回復してるよ。ただ、レアスキルと心が…。」

フィアに喧嘩を吹っつけた挙句、逆上して非殺傷設定を切りながらレスターごと攻撃した光一は、今は魔道科学による治療を受け、医務室で呻きながら眠っている。本来なら懲罰物…下手したら殺人未遂だが、フィアが訴えなかったことと、光一の惨状を見たリンディ提督たちが『もう充分罰を受けた』と判断したので不問となった。

「…そもそも、ぶつちやけ光一は女性局員と武装隊全員に嫌われていたので誰も嘆かなかった。」

「まあ、奴にはいい薬になったろうさ…。」

「だいたい…なんでいつもレスターはあのアホと一緒に居るんだよ？」

「こっちにも色々事情があったんだよ…。でも、もうその必要はなくなっただ…。」

フィアと自分の素性を話し合うのは光一のこともあり、また今度ということになった。だが、確かに今のこの状況でその手の話をしたくないのは確かだ。それに…。

「…もう原作のことは忘れて、自分らしく、こいつらと一緒に馬鹿やりながら過ごそう」。

そう決意を改めたレスターは、もう転生した自身のことを気にするのを辞めていた。そこへ、3人にフィアの声が掛けられる。

「シャーマン！！リーオー！！ヘリオーン！！手伝えええええええええええ！！エイミィがああああああああ！！」

「げ！？」

「執務官補佐って確か……。」

「隠れ酒乱じゃ……。」

年越しまであと三時間……彼らの夜は長い……。

みらい side

〈八神家・21:45〉

ところ変わって八神家。みらいはベランダで人型になったザフィーラと酒を飲み交わしていた。女性陣はリビングで『ガつか』を見ながら爆笑している。いや……シグナムだけ必死に耐えていたな……。

「……普通に楽しみやいいのに……。」

「我々の中では一層プライドが高いので仕方ありません……。」

「……お前も敬語なの……。」

「とても20代の貫禄に見えませんが故に。」

微妙にニヤリとしながら言いやがったザフィーラに若干腹をたてながらも、御猪口で酒を煽るみらい。正直に言うところ最近リーゼ姉妹とフィーアが来ないので、いわゆる飲み友がいなくて寂しかった。なので、今酒を共に飲む相手が居て結構嬉しかったりする。

「それにしても…、来年からマジでどうしよう……。」「

「…申し訳ありません。」

「いや、お前らのせいじゃないさ。気にするな。」

困っているのは、みらいの周囲に居る管理局関係者のことである。年末故に、家族で過ごすのを優先しているため、高町家とテストロスサ家には今のところ会ってない。リーゼ姉妹やアースラメンバー、そしてフィーアは忙しくて直接は会ってない。

だが、それも年明けに色々ひと段落したら話は別である。

「とりあえず、なのはとフィーア…あと、フェイトには言っても平気だな…。考えるのは、あいつらを呼んでからにするか。」

「リーゼ姉妹と言う方々は？」

「あの二人は呼ばなくても来るけど、呼んでも来ない。まあ、ジュエルシードほったらかしにしてたぐらいだから平気だろ。何より、悪い奴じゃないから大丈夫だ。」

「信頼してるようですね。」

「...それに対し、みらいはニツコリしながら答える。」

「ああ、はやてやお前らと同じくらい大切な奴らさ...。」

外が本格的に寒くなってきたので、二人はその会話を最後に家の中へと戻っていった。丁度、我慢できずに爆笑しているシグナムという珍しいものが見れたのでラッキーだった。

リーゼアリア side

やや遠く離れた場所から、八神家を監視する二人の人影があつた。先程みらいの会話にも出ていたリーゼ姉妹である。二人は寒い夜空の下、ずっと刑事の張込み染みたことを続けていた。

「…ねえ、アリア……。」

「……言わないでよロツテ…私だって今ので心が挫けそうよ……。」

監視しながら盗み聞きもしているリーゼ姉妹。その最中、みらいがザフィーラに言った言葉が二人に突き刺さった。

「……（リーゼ姉妹は）はやてやお前ら（家族）と同じくらい大切な奴らさ。」

自分達を、彼が大切にしている家族と同じくらい大切な存在と言ってくれたのはとても嬉しかった…。しかし、同時に悲しくもあつた…何故なら……。

「……自分達は彼から、その大切な家族を奪おうとしているのだから……。」

そもそも、『闇の書』の主である八神はやての元に襲撃者と次元漂流者が現れたのがことの始まりだった。襲撃者が現れた当初、二人は慌てて阻止しようとしたのだが次元漂流者が代わりに撃退してしまい、彼はそのまま居候の身に落ち着いてしまったのである。

無論、計画の障害になることを恐れて謎の襲撃者を撃退しながらみらいを排除しようとしたのだが…。逆に返り討ちに遭ってしまった。その後、弱っていたところを襲撃者組に襲われてしまい死にかけたそこを、何の因果か知らないがみらいに助けられてしまい、それを機に交流が始まってしまったのだ。

「気づいたら私だってミランのこともはやてのことも好きよ…。でも、しょうがないじゃない…!!」

「アリア…。」

最初は、自然と接触しやすくなって好都合と思っていた…。しかし、自分達が封印せねばならない『闇の書』の主、はやてやみらいと共に過ごすうちに迷いが生じ始めた。そして、いつしかみらいとはやてを計画遂行のための対象ではなく、彼と同じく大切な存在として見ていたのだ…。

「それでも…父様の目的のためなら、私は……。」



- - -心を鬼にする!!

本人は気づいて無いかもしれないが、リーゼアリアは泣きそうな顔でそう言った。それに対して、リーゼロッテはもう何かを言うのを諦めた。

- - -様々な信念と思惑が交差する大晦日。その日、ある者は自分らしさを、ある者は家族を守ると改めて誓った。彼らは…彼女らはその硬い決意を胸に、新たな年を迎えるのであった。

???side

～謎の空間～

「ほう…中々、おもしろい世界に飛ばされたようじゃないか……。」

そこは真っ白で何もない謎の空間。否、人が3人居た。一人はただ平凡な見た目の少年、一人はシンプルな格好でありながら神々しさを感じる老人、そして最後の一人は、船乗りが被るような三角帽子に青いコートを身に着け、金髪で青い目をした青年であった。

平凡な少年は目の前の光景に啞然としていた。ついさっき自分は事故で死に、気づいたらこの空間に居て、神を名乗る者から転生の話を持ちかけられたのだが…。

――金髪の青年が突如現れ、神を瞬殺したのである。

今、神を名乗った老人は青年に踏みつけられていた。そのまま青年はおもむろに空間にヒビを入れ、何かを映し出した。そこには、謎の一团とドンチャン騒ぎ状態の“赤みのかかった茶髪の青年”が映っていた。

「我が孫ながら元気そうだなによりだ。すぐに連れ帰るのはやめとくかな…。」

「…き、きさ…貴様、神であるこのワシに手を出してただで済むと…。」

どうやら老人はまだ死んでなかったようである。だが、青年は特に気にした様子は無い。

「別にお前が死んだって世界は壊れないだろ？神は世界の仕組みを創っただけ」で“管理なんか微塵もしてない”んだから。」

「ッ！？貴様はいつたい！？」

「“ベルファイア”で通じるか？」

その瞬間、老人の顔がみるみる内に青くなった。やがて、かすれるような声で言葉を絞り出した。

「…さ…さっ…“殺神鬼”…だ…と…？」

「そういうこと…。では偉大なる異世界の創造神様？あなたの力の源である“信仰”は、俺が司る“神に対する怨念”に勝てるかな？」

…その瞬間、真っ白だった空間が真っ黒に染まった。

「あらら残念、惨敗のようで…。」

同時に、黒くなった世界に一層黒い何かが蠢いた…。

「よ…よせ………!!」

「サヨナラ…【喰らえ・黒雲】。」

「うわあああああああッ——————!!」

瞬間、老人は黒い何かに飲み込まれた…。少年はその光景を啞然としながら眺めているしかなかった…。神を名乗る謎の老人をあつさり消し去ったこの男はいつたい…。

…急にその男が少年に話しかけてきた。

「おっと、ほつたらかしにして悪かった。まだ間に合っはずだから、魂を肉体に帰してやる。」

「え…あの、いったい何が起きてるんです………?」

「とりあえず、お前は暇潰しのために殺されて別世界に飛ばされる

ところだった。俺は、ちょっと孫を探しに來ただけさ……。」

何故か少年は神を殺したこの男から恐怖を感じることは無かった……。  
むしろ、安心感を感じる。思わず問いかけてしまった。

「あなたは本物の神様なんですか……？」

……すると、男は自嘲気味な笑みで答えた。

「いや……ただの親馬鹿で爺馬鹿さ……。」

……3千年以上続いた戦乱の時代に、終止符を打ったベルフィー  
ア連邦の創始者は答えた。

## 第八話 大晦日 年越し編（後書き）

フィニアの爺さんは正真正銘チートを予定してますので、当分本編に絡めません。代わりに転生者がこれ以上送り込まれなくなりました。

## プロフィール2（前書き）

転生者二人とじーちゃん。あと神について

## プロフィール2

名前 レスター・D・シャーマン（D＝デカルト）読みは『ディー』  
でいいです。

年齢 18歳

出身 転生後はミッドチルダの一般家庭

階級 三等空尉

武器 『ガデラーザ』（ガンダム00参照）縮小した本機を右腕に  
装着。GNフアング使用可能

備考 転生者その一。前世ではメカ好きの高校生だったが、神の暇潰しのために（本人は知らず）殺されてリリカルの世界に半ば強制的に転生させられた。能力の希望を訊かれた時、レスターが望したのは自身が最も好きなMA『ガデラーザ』をデバイスにすることだった。意外とすんなり要求は通った模様。しかし、いまのところGNフアング使用数は十個前後が限界であり、現在も数を増やすために特訓中。

原作知識を待つてなかったので、展開を壊すことが怖くて転生後の自分の在り方に迷いを持っていた。しかし、フィアと光一のゴタゴタを経て原作とか関係なしに自分らしく生きることを決めた。



名前 閃夜光一

年齢 18歳

出身 謎（光一曰く、その方が主人公らしいとのこと…）

階級 二等空尉

武器 『エクスカリバー』 特に能力なし。

備考 転生者その二。前世でもイケメンだったが、転生の際に調子に乗って金髪オッドアイにしてもらった。自己中な性格は元々で、それが原因で彼女はできなかった…。それを自覚することなく転生、神に願いを叶えてもらったことをいいことに、自身を『神に選ばれた存在』を自称。神に貰った『SSS級魔力』と『ベクトル操作能力』を駆使して好き勝手やってきたので、関わった人間のほとんどが彼を嫌っている。アースラに乗り込んだ時は自重していたが、原作介入が目的だっただけである。

フィーアの逆鱗に触れ、生死の境を彷徨った上に能力を奪われた現在ではただの移動砲台である。しかも、SSS級の魔力をうまく収束できず、“AA級の魔法しか撃てない”ことが発覚。その内に戦力外通告をくらう予定…。

名前 ヴィリアント・リーガ・ベルフィア

年齢 63歳なのだが精神年齢は…（見た目は20代）

出身 ベルフィア連邦

備考 フィアのじーさん。見た目は金髪にしたフィアそのもの。魔法主義と科学主義による戦乱の時代をものの10年弱で終止符を打った大英雄。今ではかつての部下や弟子に連邦を任せて隠居していたのだが、孫であるフィアが行方不明になり、娘であるベルノアにお願い（脅）されて文字通り無限の彼方からやって来た。義理の息子や部下にさえチート呼ばわりされるその力は半端なく、異世界の神をいとも容易く殺す。もつとも、その力に触れる事件に巻き込まれている間にフィアとリーマス、そしてエミリアの悲劇が起きてしまったのだが…。

フィアを発見したものの、思ったより楽しそうにやってるので、もう少しほっとくことにした。ついでに、自分もこの世界をちょっと満喫する気のおうである…。

名前 創造神

年齢 不明

備考 死者に転生を持ちかける怪しげな老人。しかし、正真正銘ち

やんとした神様。暇を潰すために世界を創造し、ずっとその世界を眺めていた。が、結局それにも飽きて適当に死人を別の世界に送ってみることにした。そうやってしばらくふざけていたのだが、『殺神鬼』であるヴィリアントに殺害される。

彼ら神々の力の源は人々の『信仰心』である。なので、人間に感謝されたり祈られたりすると神は力が増えるのである。よって、少しでも力を手に入れるために転生者には能力を受け取らせ、感謝させようとしていた。結局ヴィリアントの力の源である『神に対する怨念』には微塵も及ばなかったが…。

## プロフィール2（後書き）

レスターの友人たちはMSの名前をネタにしていますが、転生者ではありません。

あと、どうでもいいですけど『ベル（ノア）フィア』なんです…。

第九話 明けましてOHANASHIだ（前書き）

さて、本格的に狂ってきた…

## 第九話 明けましてOHANASHIだ

みらい side

〽八神家・0:00〽

「「「「「あけまして、おめでとございます。」「「「「「

除夜の鐘が鳴り響く中、はやてとみらいに倣い、守護騎士の4人も見よう見まねで同じように新年恒例の挨拶を交わす。

日にちが変わり、同時に年が変わった。波乱に満ちた一年が終わり、また新しい日々が始まるのである。もっとも、今年も静かに過ごせなさそうだが…。

「さて、寝るか。」

「そつやね、私もそろそろ限界や…。」

「え？もう寝るのかよ？」

元気が有り余ってしょうがないヴィータがごねる。しかし、朝になったら色々やることがあるので眠っておきたい…。

「朝になったら初詣に行くんだから、今のうち寝とけ。」

「でもよう…。」

「ヴィータ…、あまり主達を困らせるな…。」

「……わかったよ、寝るよ…。」

シグナムにまで言われてしょんぼりするヴィータ。若干哀愁漂う彼女をはやてが寝室に連れて行った。二人が寝室に向かっていった二人をみらいは苦笑いで見送った。そして、慌てて止める。

「おいコラ、ヴィータ。お前だけ歯磨きしてないだろ？」

「ええゝめんどくせえよゝゝ。」

「……三連デコピンスマッシュ…。」

「歯ブラシはどこだあー!!」

「……『今年もこんな調子かよ……』と思いつつ、彼の表情は楽しそうである。」

レスター side

「アースラ・宴会場（食堂）・0:00」

「「「3!」」」

「「「2!」」」

「「「1!」」」

「「「「0!」ハッピー・ニューイヤー!!」」」



時計が0時を回り、新年を迎えることができた。さつきまで充分騒がしかったアースラの食堂はさらなる熱気に包まれた。酔い潰れたり潰された人も今では全員起きて一緒に騒ぎ直していた。

しかし、その騒ぎから抜け出して医務室に向かった者たちが居た。一人は転生者であるレスター、もう一人は次元漂流者であるフィアだ。

「…しつかしまあ、大分離れたつてのにここまで馬鹿騒ぎの音が聴こえるとは……。」

「こういう仕事で出世すると、自然とああいう風に騒ぐ暇無いんだよ。だから余計に羽目を外したくなるってもんなのさ……。」

二人は医務室で伸びてる光一を含めて、互いに知ってることを話し合うことにしていた。お祭りモードに拍車がかかり、食堂に人が集まった今なら話をしやすいと思ったのである。

そして、ついに医務室に着いたのだが…。

「…何で執務官が居るんですか？」

どういわけか先にクロノが医務室に居た。今から大っぴらに話せないような話し合いを言うと云うのに何故いらっしゃる？

レスターが困惑する中、フィアはいたって冷静だった。そんな彼に、レスターと同じように困惑しながらクロノが話しかける。

「…フィア、なんでシャーマン三尉まで連れて来た？」

「こいつも閃夜と同じなんだよ…。」

それを聞いた途端、クロノの目が驚きで見開かれる。そして彼の口からよどみなく出た言葉は、今度はレスターを驚愕させた。

「な！？彼も『転生者』なのか！？」

「ッ！？」

「…なんでクロノが『転生者』という言葉を知っている！？」

互いに警戒の色を出す、フィアがそれを霧散させた。

「落ち着けクロノ…。“ミッドで何回も襲撃された”のは分かって

るがコイツは大丈夫だ。」

「…君がそう言うなら信じよう。確かに、彼は今までの奴らとは違うみたいだ……。」

今の会話から察するに、クロノも転生者に難癖つけられて襲われた身のようなのである。しかも、フィーアと同じく何度も…。

「つまり、クロノ執務官も関係者ということですか？」

「そうだ。さっきフィーアに念話で呼ばれたんだ。さて、色々説明してもらっぞ？」

…ズドムッ！！

いきなり鈍い音が響いたと思ったら、フィーアが眠っている光一に溝打ちを決めていた。その容赦無い光景に、どんな状況になってもフィーアを敵に回さないようにしようと誓う二人であった…。

「ッ！？うえっほ！！げほッ！！」

「起きろボンクラ。」

……こうして半ば強引に話し合いは始まった。

〈会議進行中〉

「なるほど、神様が……って、信じると思ってるのか！？真面目に話せ！……」

「そう言われなくても……。」

想像以上にぶっ飛んだ話の内容にクロノがキレタ……。そりゃ、真面目な話をしにきたのに『神様』だの『輪廻転生』だの言われた挙句に、自分達の世界を『アニメの世界』と言われれば怒る……。

「ファイア！！君からも言ってくれ！！……ファイア？」

……クロノが話をファイアに振ったのだが、彼は想像以上に難しい顔をしていた。

「…どうしたんだ？」

「いや、あとで話す…。ところで閃夜。」

「はひい！？」

すっかりフィアのことをトラウマになったようで、光一から上ずった返事が返ってきた…。

「『この世界』は『お前の知ってる世界』とどのくらい違う？」

「…居るはずの人間は全員居るけど、居ないはずの人間が何人か居たっすよ……。」

- - - 二人の次元漂流者。

- - - 謎の暗躍組織。

- - - 死ぬはずだったプレシア。

- - - 転生者たち。

「それだけじゃ無い…まるで物語が進まなくなったように静かすぎる……。」

「どついうことだ？」

彼の言葉が引っかかり、クロノが尋ねる。すると、光一はクロノを見ながら口を開いた。

「実は今年中にもう一つ、大きな事件が起きる筈だったのさ…。アニメ通りなら、あんたと因縁深い『闇の書』による事件がな…。」

「なんだと…。どついうことだそれは!？」

「落ち着け、後にしろクロノ。」

自分の父親が死んだ原因である、『闇の書』という言葉にいきり立つクロノをフィーアが制した。そして光一に続きを促す。

「俺の記憶が正しければ今年の…いや、もう去年か。12月前後には、局員や高町なのはが守護騎士に襲われて事件が始まる筈だったんだ…けどこの通り、みんな無事に正月を迎えちゃった。」

（（（…その格好で言われてもなあ……。）））

その事件に関係無くさらに自業自得とは言え、明らかに満身創痍の状態で言われると微妙な気分になる。どうにか空気を払拭し、クロノが改めて問いだす。

「…それで、『闇の書』の主は判っているのか？」

ロストロギア『闇の書』は主無しでは何もできない…否、主になるべき人間の元にしか現れない。そして、書のページを埋めきるまで主の体を蝕んでいき、最終的に主を殺す。もともと、書を完成させても暴走して世界を滅ぼすのだが…。

そんな危険なモノを放置できないし、場合によっては主に選ばれた人間を助けなければならない……のだが…。

「ジュエルシード事件の民間協力者、『八神みらい』の身内である『八神はやて』だ。ついでに彼女が車椅子生活を余儀なくしてる原因は『闇の書』の侵食なんだよ…。」

「…何？」

みらい経由で親しくなった妹分の名前が出て怪訝な表情を見せるフイーア。しかし、彼が不審に思った理由は別にある。

「なあ、クロノ…。」

「どうした？」

「その本は持ち主を侵食し続けるんだよね？ということとは、はやての奴は体を悪くする一方の筈だよな？」

「…この後『閃夜光』は、自分が存在するこの世界がアニメでもなく、原作の展開なんて運命染みた物が無い現実の世界であるとううやく認識する。」

「そのはずだが…何かおかしいことでも…？」

「…『闇の書』が狂ったのか、はやてがすごいのか知らんが…あいつ…。」



-  
-  
-  
立ち上がるくらいなら出来るようになったぞ？

第十話 守護騎士と魔王（前書き）

連続投稿。でも中々進まない！！

## 第十話 守護騎士と魔王

ファイア side

くアースラ・転送ポート前・1月1日・a m 7 : 3 0 く

「それでは、しばしお別れさせていただきます。」

「向こうに帰っても元気だね。教導の方、またその内お願いするわね？」

「その点に関しては保留ということぞ。」

現在、ファイアはアースラの面々に見送られながら地球に帰ろうとしていた。武装隊にいたっては全員敬礼までしてくれている…かなり嬉しかった……。

「おっとそう言えば、クロノ、レスター……！」

「ん？」

「なんですか？」

「…無茶するなよ？」

転生者の言葉を借りるなら『原作が滅茶苦茶になった』今、光一の知識は役に立たないかもしれないものの、この事件に『ギル・グレアム』提督が関わっているととなると放置できないので、ミッドチルダや本局ではクロノとレスターが、地球ではフィーアが捜査することになった。

捜査の根拠が『一般局員（転生者）の前世の記憶』なんて言えないのでリンディにすら教えてない。なので基本的に3人はいつも通りの仕事と生活をしながら、こっそり調べることになったが…。

「心配には及ばない。そつちこそ、気をつけてくれよ？」

「分かってる。……おい、アリス…いい加減に抜け出して来い。」

『みゃあ。』

「ああ！？アリスちゃん！！」

フィアと一緒にアースラから去ってしまう事を惜しんで、エイミイがアリスを抱きしめていたのだが、彼の呼びかけに答えたアリスはあっさりとエイミイの腕から逃れて、フィアの肩に乗った。

「それでは皆さん、御機嫌よう。」

・・・その言葉を最後に、フィアはアースラを去っていった。

なのはside

（海鳴市・とある神社・am8:45）

「はやてちゃん、明けましておめでとう!!」

「明けましておめでとうな、なのはちゃん!!」

初詣に来た高町家と八神家。丁度神社の入り口あたりでバツタリ出くわし、新年の挨拶をしていた。みらい達大人組は挨拶もそこそこに世間話を始めている。因みに、ザフィーラは狼形態である。

「ところで、はやてちゃん…その人たちは？」

「私たちの新しい家族や。……少し理由が複雑やから、後で詳しく教えるわ。」

「…もしかして魔法関係なの？」

「うん…。」

不意に守護騎士達の方に視線をやるのは。すると、赤髪を三編みにした少女と目が合った。その後、どういつわけかジーッと見つめてきた…ていうか睨んでる？

「えっと…そんなに、睨まないで？」

「睨んでねーです。こういう目つきなんです。」

「ヴィータ、嘘はあかん。なんや悪い子はこつやで。」

そう言っではやてがポケットから取り出したモノを見て、ヴィータは顔を真っ青にした。

「ちよつ、はやて!?!なんでシャルのオセチ(生ゴミ)の余りな  
んか持つてるんだよ!?!」

「ふっふっふっ…、決まってるやないか…これを何なのか教えずに  
なのはちゃんに食べさせ……。」

「はやてちゃん……少し、頭冷やそうか…?」

――アッ――  
――!?!?――

「私、なのは。高町なのはって言うんだ。」

「ヴィータだ、よろしくな。みらいから話は聞いているぞ。」

目にも止まらぬ速さで折檻を喰らったはやてを余所に、二人は改めて自己紹介をした。丁度、大人組も話を終えたようである。

「おい、そろそろ行くぞ…」って、今度は何したんだはやて……。」

「これ…。」

そう言っただけのシャルのオセチ（毒物）の残りをヴィータが見せる。それとなのはを見て、大体のことを察してみらい。

「…全く、正月早々シャルの料理（産業廃棄物）なんか持ち歩きやがって……。」

「ねえ、ちょっと！？さっきから変な称号付いてない！？ていうか段々酷くなってる！？」

悲しみに暮れるが、この一週間でシャルの料理の腕は上達するどころか落ちる所まで落ちた。故に、料理に関してシャルを弁護してくれる者は居ない…。

「ヴィータちゃん、シャルさんの料理（殺人兵器）ってどのくらい酷いの？」

「…聞きたいか？」



「……やっぱりいいの…。」

ヴィータがあまりに虚ろな表情を見せたために訊くのが怖くなったのはであつた…。

みらい side

何をしたのかは不明だが、一瞬でなのはがKOしたはやてを車椅子で連れてくみらい。そのうち神社の本堂に辿り着いた。

「みらい殿、これはどうすればよいので？」

初詣どころか神社すら知らない守護騎士たちを代表してシグナムが尋ねる。時間が掛かりそうなので高町家の面々には先に済ませてもらった。

「とりあえず、ほら。」

チャリンっと、彼女らの手に小銭を渡す。

「この小銭をあゝの賽銭箱に入れて、今年全体を通しての目標や願いが叶うようにお祈りするんだよ。」

「成るほど、では早速行ってまいります。」

言つや否や早速お賽銭箱に直進する3人と一匹。そこでいい加減ダウン中のはやてを起こすことにしたみらい。

「おゝい、起きろ。」

「ハッ!!ここはどこ?私は美少女?」

「はいはい、アホやってないでさっさと済ませろ。ほれ、小銭。」

「ぶう。ノリが悪いでみらいさん…。よっこいしょと。」

…。そう言つてはやては、弱々しくも車椅子から立ち上がった。

みらいがやって来てからというもの、掛かり付け医である石田先生でさえ理由はわからなかったが、はやての足が徐々に回復してきたのである。本当に微々たる回復量だったが、3年近く経った今は立ち上がるだけなら出来るようになったのだ。もっとも、移動の方は当分車椅子のお世話になりそうであるが…。

「今年は何を祈るんだ？」

「そうやね…家族も増えだし、友達も出来だし、足の病気は治りそうやし……どうしょ？」

……気づけば自分の求めたモノのほとんどが手に入っていた。

「だったら、『今年もこの幸せが続きますように』ってのはどうだ？」

「うん、それがええね。」

ちょうど守護騎士メンバーが終わらせたらしく、二人は並んで御賽銭箱に小銭を入れて両手を合わせた。その様子を見た参拝客達は、全員微笑ましい光景を見るような視線を送ったという…。

「……みらいさん……。」

「ん？」

「これからよろしくー！」

「……こちらこそよろしく頼む。」

……二人の後ろ姿は、仲の良い本物の親子に見えたそうだ。

## 第十一話 懐かしの…（前書き）

やっと出せたよ、この3人…。

あ、今更ですけど…フィアとみらいは描写が無い限り、戦闘中も常に私服です。

## 第十一話 懐かしの…

フイアー side

（海鳴市・前回のマンション・1月1日）

「…やっと帰ってこれた……。」

『たまりにたまった埃がすごそう…』

「それは無い。夜叉鴉に留守番頼んどいたから。」

例によってアリシア（猫形態）を肩に乗っけながら、フイアーは海鳴市にあるかつての拠点のマンションに帰ってきた。ジュエルシード事件の時は、日中ほとんどフェイト達と過ごしていたので自身の部屋はただの寢床になっていたが、事件が解決してフェイト達がミッドチルダに帰った今は、本格的にフイアーの自宅になった。アリシアもフイアーと行動を共にするようになってからは、アースラに出向くまではそこで一緒に暮らしていた。

『それでも、掃除はしましょうよ？気分的に。』

「まあ、それもいいか。おっと、ここだここだ……。」

気づいたら自分の部屋の前に着いた。ところが、扉の前でフィアが動きを止める。

「……………」

『どうしたの…?』

「……………誰か居やがる……。」

『え!?!』

言うや否やフィアは右手に“黒い煙”を纏わせる。実はコレ、フィアの魔剣である『ヴィルガロム』なのである。手入れをしている最中にアリシアが勝手に触り、妖力に反応して異常をきたしてしまい、原型を留めなくなっただけにプログラムと分離できなくなってしまったのだ。だが、煙状態なのは未使用の時のみで普通に使う分には支障が無かった。むしろ、煙状態の方が携帯に便利なので結果オーライである。

「留守番させた夜叉鴉が無反応となると……かなりの手練か……………」

夜叉鴉は並みの戦士なら秒殺できるくらいの戦闘力がある。そんな鴉達がたむろしているこの部屋に居座れるとなると、相当の実力者に違いない…。フィーアは警戒心を一層強くする。

「部屋の中が吹き飛ぶかもしれないが…【ショット】。アリシア、お前は離れてろ。」

『分かった。』

フィーアはアリシアを肩から降ろし、ヴィルガロムを室内戦でもつとも恐ろしい威力を発揮すると言われる散弾銃に変化させ、ドアノブに手をかける。そして…。

…キイツ…。

ほとんど音を出さずにドアを開いて中に進入する。玄関には誰もいないことを確認し、すぐ近くの部屋に入った。その部屋の安全を確認し、全神経を集中させてマンシヨンの部屋全体の気配を探る。そして、侵入者の気配を感じた…。

(リビングか…。)



気配を消し、侵入者が居るであろうリビングに向かうフィア。そして、彼はその姿を捉えた。侵入者は三人…のんきにお茶を飲みながら仲良くテレビで正月番組を見ていた。

…その姿を見た瞬間、フィアは緊張の糸をぶった切った…。

侵入者が相当の実力者というフィアの予想は見事に的中していた。並みの戦士ではこの三人にはまるで歯が立たないのは間違いない…。金髪で赤目の少女はA A A級の魔力を持つてるし、年に不相応な実力がある。それに比例して、彼女の使い魔である犬耳と尻尾を生やしたオレンジの髪の女性も強い。そして、その二人の保護者である黒髪の女性はオーバース級の魔力を持った大魔導師である。

…だが、夜叉鴉が無反応だったのはそんな理由では無い。

「あ、フィアー！！明けておめでとう！！」

「遅かったじゃないかい。」

「今更だけど、お邪魔してるわ。お久しぶりね。」

「……とりあえず、新年おめでとう…フェイト、アルフ、そんでプ

レシアさん……。」

――ジュエルシード事件の中で共に過ごし、共に戦った仲間である『フェイト・テストロッサ』と『アルフ』。そして、『プレシア・テストロッサ』がそこに居た。

フェイトside

――あれ？なんでいきなりorzのポーズになったのかな？疲れてるのかな？

「どうしたの、フィーア？」

「変なもの食べて腹でも下したんじゃないかい？」

最近『転生者』のことで神経質になってたので、その分脱力感の反動が半端無いことをまるで察してくれないフェイトとアルフに若干涙目のフィーアである。だが、そんな理由で彼女たちに文句など言えないので忘れることにした。

「いや、なんでもない…。それより、なんで俺の部屋に？」

「え？リンディ提督から話聞いてないの？」

「んあ…？」

「私が説明するわ。」

そう言ったのはプレシア。彼女曰く、最近テストロッサ親子に纏わり着く不審者が増えたそうだ。当初は前回の暗躍組織の残党が復讐でもしにきたのだと思ったのだが違うようで、どちらかと言うとストーカーの類だったらしい。だが、気味の悪さと数の多さが半端無いのだった。

…なにが不気味って、フェイトに纏わり着く奴等の数が一番多い上に、そのほとんどが無駄に大人染みたり歳児だったらしい…。

(…『転生者』じゃね？)

「それで、リンディ提督に相談したのよ。そしたら、『管理外世界に行けばマシにならないかしら？』って言ったのよ。」

…まあ、確かに管理局員でも無い限り管理外世界にまで追ってくることは不可能だろう。しかし、何故に俺の部屋？なんて思ってたなら、それを察したようでフェイトが口を開く。

「あ、私たちの部屋はミッドに帰る時に解約しちゃったんだ…。それを言ったら、リンディ提督がフィアの部屋ならまだ平気だって言うから…。」

「…因みに、その話はいつしたんだ？」

「えっとね、大晦日の1週間前くらいかな？新年はここで迎えちゃった。」

「……あの性悪め…。」

「…最近、何か企んでるような顔してると思ったらこうなること予想してたな…？ふふふ…いつか覚えてるよ？次回、教導の仕事頼んできたら絶対に引き受けてやる…訓練にあんたも参加する条件でな…！」

「フィア、あんた顔が怖いことになってるよ…？」

「気にするなアルフ、今年の抱負が決まったただけだ…。おっと、そ

ういえば…。」

アルフに軽く返事をし、おもむろに外へ出たフィア。そして…。

『ふぎゃあああああつ!!』

「あだだだだ!! 暴れんな!! 諦めろ!!」

何かの悲鳴と共に、フィアが何かを持ってきた。よく見るとそれは、金色の毛並みと二本の尻尾を持った猫だった。

「ほい、プレシアさん。」

『ツ!?! にゃあああああああ!!』

「え、私?……すごい嫌がつてるわよ…?」

「気にするな、ただのツンデレだ。」

『フツシャアアアア!?!』

激しく抵抗するその猫を問答無用でプレシアに手渡すフィア。すると、プレシアの腕に収まった途端に急激におとなしくなった。

「……………あら…?」

『……………。(ビクビク)』

しばらくその猫、アリスを…自身の娘アリシアを腕に抱き抱えるプレシア。おもむろにアリシアの顔をジーツと見つめる。それに対して、まだ自分のことは黙っていたいアリシアは内心ドキドキしていたが、同時に懐かしい母のぬくもりに安らぎを感じていた…。

「何故かしら…。この子を抱いてると、とても懐かしい感じが…」

「…って、母さん!? 泣いてるよ!?!」

「え…?」

フェイトに言われて気づくと、プレシアは自然と涙を流していた。ただ、流した涙に悲しみは一切感じられず、むしろ嬉しさや喜びさえ感じた…。アリシアも同様のようで、猫の状態にも関わらずプレシアと同じような表情を浮かべてるように見えた。

「…もうしばらく、抱いてていいですよ。」

「……そうね、お言葉に甘えさせてもらっわ…。」

プレシア本人が自覚してないとはいえ、かつての念願だった親子の再会を果たしたのだ…。もうちょい堪能させてもバチはあたるまい…。

「さてと…。フェイト達は今日、予定あるのか？」

「ううん、無いよ。とりあえずフィアと合流してからと思ってたんだ。」

「丁度いい。このあと八神家に行こうと思ってたところだ、一緒に行こうや。」

「うん!-!」

《失礼、フィア殿。》

突如、フェイトのデバイスであるバルディッシュが話しかけてきた。

「おお、久しぶりバルディッシュ。」

《御無沙汰しております。ところで、リリア殿は？》

「そういえば…、いつもより静かだと思ったたらリリアが居ないじゃないかい…。」

そうなのである。今日、フィーアはリリアを身に着けてない…ていうか連れてきてない。

「ちょっと訳ありでな…、アースラの武装隊の一人に預けてきた。」

転生者の一人である『レスター』のことである。彼にはクロノと共にミッドチルダの方で頑張って貰うことになっている。しかし、『闇の書』に関わる者たちの規模と『転生者』特有の異能の力は未知数であり、場合によっては二人には荷が重すぎる可能性があった。

なので、そんじょそこらの魔導師よりよっぽど強いリリアを二人に預けてきたのだ。元々、フィーアに同行せられてたのは、フィーアの補助やサポートでは無くて実戦<sup>データ</sup>経験を記憶し、成長させるためであつた。その経験とデータをフィーア以外の誰かのため生かすことこそ、リリア本来の役目なのである。



《残念です。また一緒に話がしたかったのですが…。》

「そういえば、バルディッシュっていつもリリアと通信繋いでたね…。」

「マジで…？あいつ何も言っていなかったけど…？」

「…言う必要がありました？」

ナチュラルにリリアの声が聴こえた気がしたフィーアだったが、気を取り直して八神家に遊びに行く準備を始めた。フェイトとアルフも同様である。すると…。

「…プルルルルルル！」

「ん？電話か…。どうせまた変な勧誘か詐欺だろう…。」

自分の身内は基本的にリリアを通した『思念通信』か、フェイト達がよく使う『思念通話』で連絡を寄越して来る。なので、家の電話

を利用してくる者は基本的に口クでもない奴ばかりだった。

「でも、フィア…今、そのリリアが居ないんじゃないの？」

「あ、そうだった。」

アルフに言われて思い出すフィーア。よく考えると、みらいとは特に思念通信を多用しまくったので、下手すると彼かもしれない…。そう思い、受話器を取ると…。

『おいしいおいしい！リリアを誰かに預けるなら先に教えろおおおお！』

「うおおッ!? やっぱりか… とりあえず、新年おめでとう。」

「おう、明けましておめでとう……じゃ、ねえよ！！こちとら大切な相談事があるってのに何してんだお前はあああああ！？」

「……相談事？……」

「闇の書のことか……？」

「なんで、もう知ってるんだ…。まあいい、とにかく来てくれ…。」

「分かった。フェイト達も連れてって平気か？」

『お、3人共居るのか？丁度いいや、むしろ連れてきてくれ。』

「はいよ。そんじゃ今から行くわ。」

『おう。待ってる。』

そこで通話は終了した。受話器を置いたフィーアは考える。光一から聞けるだけ聞いた話によれば、『闇の書』の侵食によりはやてが命の危機に瀕してしまいうらしい。しかし、そうだったら今の電話でその事を真っ先にみらいが口にするはず…。

「まあ、行けば分かるか…。」

「どうしたの？」

「歩きながら話す。とにかく、早く行こう。」

――転生者の話により、ある程度の事情を知っていたフィアでさえ、八神家で待ってた“モノ”には驚かざるを得なかった……何故なら…。

「おう、待ってたぞ。」

「久しぶり！！フェイトちゃん、アルフさん、フィアさん……あ、プレシアさんもお久しぶりです！！」

「明けておめでとうや、フィア兄！！それで、初めましてフェイトちゃん！！」

――戦友達と、鎖が解かれた一冊の黒い本を持った車椅子の少女……。

「ふむ……。この者達が、みらい殿の言ってた…。」

「あら、フィア君って結構かつこいいじゃない」

「なんか、個性的な奴ばかりだな…。」

「我らが言えたことでは無いと思うぞ、ヴィータ…。」

「…彼らの新しい家族たち…そして…。」

「初めまして…で、いいのだろうか？我が主の友よ。」

「…鎖が解かれた“もう一冊の黒い本”を手に持った、銀髪の女性がそう言った。」

## 第十一話 懐かしの…（後書き）

因みに、まだ防衛プログラムは健在です。何が起きたのかは次回に…。

## 第十二話 女神の書

みらい side

く数刻前、八神家にてく

「『まずはくその幻想をくぶち殺すく』。」

――バシッ!!

「はい!!」

「ああ、クソッ!! 取られた!!」

「次、『俺がく俺たちがくガダムだく』。」

――バンッ!!

「ふっ…。遅いなヴィータ。」

「私服から騎士甲冑に替えてまでマジになんじゃねーよ!?!」

「せめてレヴァンティンはしまつとき、シグナム…。」

初詣を済ませた八神家一行は、そのまま遊びに来たなのはを加えて家でカルタ遊びをしている。なのはの家族は先に家に帰った。

因みに、なのはに『闇の書』と『ヴォルケンリッター』の説明はした。彼女らが周囲に迷惑を掛ける気が無いというので、特に気にすることは無かった。ただ、『闇の書』がロストログアであることは流石に無視できなかったが…。しかし、蒐集によってページを埋めながら完成させなければ危険は無いという説明もあり、悩んだあげく普通に接することにしたのだった。

「まあ、管理局にはもう少し黙っててくれ。その内、全部丸く治める手段考えるから…。」

「…分かったなの。それに、みんな良い人みたいだし…。なにより、はやてちゃんとみらいさんの家族だもんね。」

「…そんな訳で、今は友人の新しい家族達と改めて仲良く遊んでいるわけである。」

「はい次、『抱きしめて』銀河の『果てまで』。」「



「「ハイッ!!」」

「...ゴツンッ!!」

「「痛ああああッ!!」」

なのはとヴィータが札を取ろうとして頭をぶつけたようである。ふたりは額を抑えながら呻いていた。

「痛ってええ…。何してんだよ“にゃのは”!!」

「“なのは”だよ!!な・の・は!!」

痛くて呂律が回らなかったようである…。デコの痛みと、噛んだ恥ずかしさで顔が真っ赤になるヴィータ。おもむろに、『グラーフ・アイゼン』を取り出す…。

「【ラケーテン・ハン…】」。

「「ヴィータ…、どっちがいい?」」

――“シャマル飯”を持ったはやてと、“デコピンを構えた”みらいが居た。

「すいませんでした!!」

「全く…、照れ隠しでアイゼンを振り回すのやめろって何回言わせる気だ？」

「そのたんびに私らが片付けしてるんやで？」

速攻で土下座ポーズを決めたヴィータに愚痴る二人。そして、自分の料理を御仕置き道具にされることを完全に受け入れた（諦めた）シャマルが部屋の隅でいじけていた…。その光景に苦笑いを浮かべるのは…。

「さうて、気を取り直して次いくで」。

――はやてが次の読み札を取り出し、カルタの続きを始めようとしたその時…。

「『よろしい』ならば『起動。』だ。』。…あれ？」

「ん？『戦争』じゃなくて？」

「て言うか…途中、はやてちゃんの声じゃ無いのが混ざってなかった？」

「ッ！？主はやて、みらい殿！！」

シグナムの声に反応して視線を移すと、『黒の書』が宙に浮かんでいた。別にそれだけなら、いつものことである。しかし…。

「こ、これって…『闇の書』の時と同じや！！」

…宙に浮いたまま妖しく光輝いていたのだ。

「何！？また誰が出てくるのか！？」

「ま、まさか…本当に我らの『闇の書』と同じなのか……？」

呆然とするシグナム達を無視するように、事態は進行する…。この時、はやて以外は気づかなかったが『闇の書』の時と違い、『黒の書』は自身を縛る鎖にギチギチと悲鳴を上げさせ始めたのである。まるで、中から“何かが強引に出ようとしてる”かの様に…。やがて…。

――パリーーーン！！

本を縛る鎖が砕け散った…というか、『黒の書』が無理矢理開いて鎖の拘束を解いた…。だが、出てきたのは守護騎士のような者達では無かった。それは“林檎くらいの大きさ”で、温もりさえ感じる綺麗な光を発する丸い何かだった。それはさながら、小さな太陽のようで…。

「…え？…ええ！？嘘でしょおおおお！？何アレええ！？」

最初に声を発したのは意外なことにシャルだった。どういうわけか彼女は、他の面々より一層驚いているのだが…。みんなを代表してはやてが尋ねる。

「どうしたんやシャル？そりゃ、『黒の書』さんが今日は一段と意味不明なのは解るけど…。」

「『黒の書』って言うより、アレはやてちゃん!!」

そう言つて光の球体を指差す。それにつられて全員は視線を移す。  
はやてやみらい、なのははよく解らなかったのだが、守護騎士達  
はソレが何なのか理解したようである。残りの3人とも顔を青くし  
始めた…。

「ま、まさか…。」

「でかすぎじゃねえか…?」

「しかし、この反応は間違いなく…。」

「……やっぱり『リンカーコア』よね…?」

「……なん…だと…?」

魔導師の魔力の源であり、『闇の書』のページを埋めるための蒐集  
対象『リンカ コア』…何故にこの『黒の書』から出てきた?しか  
も、話によれば『リンカーコア』って確か“ピンポン玉”くらいの

大きさがあるか無いか位じゃ…？

…目の前のソレは、明らかに倍以上の大きさがあるのだが…。

「……どうするよ、ソレ…。」

「どうするって…、言われてもなあ…どうする？なのはちゃん…？」

「ええ、私に振るの！？…どうするの、みらいさん…？」

「おっと、一周してきたか…。んじゃ、どうするよシグナ…。」

「みらい殿、現実逃避はそこまでに…。」

ふざけている間に事態はさらに進行した…。なんと、『黒の書』が特大リンカーコアを“発射した”。放たれたリンカーコアは真っ直ぐに、そばに置いてあった…。

「ッ！？狙いは『闇の書』！？」

――『闇の書』へと飛んでいき、そのままリンカーコアは『闇の書』へと蒐集されてしまった。

事態についていけず、呆然とするしかない一同。守護騎士や主を無視するように、『闇の書』は蒐集を自動的に行ったのである。否、  
“蒐集行為を『黒の書』が行った”のである。恐る恐るシャマルが『闇の書』を開いてページを確かめる…。すると、いきなり彼女は叫んだ…。

「ページが半分も埋まってる!!」

「……………嘘おお!?!……………」

あのサイズは伊達では無かったようである…。いったい何故『黒の書』がリンカーコアを?しかも何故この魔力量?何故この時期に?なんのために?彼らの疑問が尽きることは無い…。

この状況を打破するべく、ザフィーラが何かを思いついたかのように口を開く。

「…そうだ、シャマル!!!ページが半分埋まったということは“彼

女”を呼べるのでは!？」

「ッ!!そうね、今なら『管制人格』の彼女を呼べる!!」

…そんな訳で、本来なら当分現れることの無いはずだった彼女  
…『闇の書の管制人格』が呼び出されたのである。

フイア s i d e

く現在に戻る。く

「『リインフォース』って名前、かつこいいよねフェイトちゃん？」

「うん。『祝福の風』かあ…流石、はやて。センスあるね。」

「そうやる?なのはちゃんに、フェイトちゃん。ほれみい、リインフォース。やっぱり可笑しくないやないかい。」

「いえ、確かに嬉しいのですが…。私には立派すぎて…。」



「遠慮することは無い。正直な話、お前のことを『管制人格』と呼び続けるのは嫌だったからな…。」

「将…。」

何が起きたのかを説明してもらい、はやてが管制人格に『リインフォース』という名前を付けたことを聞いたフィーア達。お子様組が和気藹々としてるなか、魔法に一段と詳しいフィーアとプレシアは二冊の本を観察していた。

結局、『闇の書』の管制人格である彼女さえ、詳しいことは知らなかったようである。当の本人もこの状況に困惑しながら出現した次第である。

「ユーノも呼んだほうがいいんじゃないか？」

「先約があるそうだ。確か、クロノに頼まれたとか…。」

「ああ、それなら多分大丈夫だ。」

転生者の存在と、そいつから聞いた話をみらいに話す。おそらく、クロノ達がミッドで『闇の書』を調べる際に呼んだのだろう…。因みに、テストロッサ親子とアルフにもそのことは話した。最初こそ

信じられなかったものの、心当たりがいくつかあったので半分くらいは信じた。そして、例の転生者が話した状況とかなり同じこの場に来て、ようやく信じるようにしたようである。

「そういえば、『はやては俺の嫁だあああ！』とか言いながら襲ってきた奴が何人居たような…。最近は何で第二期が始まらないんだ！？』って言う奴を最後にメッキリ来なくなったが…。」

「そいつらだ…。神様だかなんだか知らないが、迷惑極まりないったらありやしない…。」

「うちも被害をこうむり掛けたわ…。見ず知らずの輩に『なんで生きてる！？』って言われた時は流石に傷ついたわ…。」

「…もつとも、そのほとんどが能力以外ヘツポコで一人残らず撃退できたが…。」

「しかしまあ、そんな神様なんて本当にいるのか？一応、宗教国家である『アルテミア』出身の俺が言うのもなんだが…。」

「少なくとも、私は信じてないわよ？科学者としても個人としても、そんなのに頼れないわ。」

「『ベルフィア』も同じく。つーか、戦乱の時代のせいで誰も神を信じなくなつたよ…。」

そう言つて彼は思い出す。自身の世界の歴史を。

…三千年続いた『魔法主義』と『科学主義』の戦争。互いに世界にひとつしか無い大陸の両端に存在した両陣営は、中間にある国々や人々を無視するように戦争をした。やがて世界にはその二大国家以外存在せず、大陸の半分はその二力国が有し、残りの半分である中央部分はただの空白地帯となつた。その空白地帯は、もっぱら二大国家の戦場として扱われた…そこにまだ、人間が住んでるにも関わらず…。さらに、『魔法主義』も『科学主義』も互いに自身の神の教えを忠実に信じていた。特に…

…『異教徒（己の国民以外）は人にあらず。皆殺しにせよ。』  
という部分は…。

そのせいで、二大国家の人間は空白地帯の人間をただの獣程度にし  
か見てなかつた…。そんな時代が続けば、そんな教えを創つた神を  
怨むのは当然である。最終的にフィアの祖父『ヴィリアント』の  
手により暗黒の時代は終わりを告げたが…。

（閑話休題）

調査しているうちに、どういうわけか『闇の書』が主を侵食するためのパスだけがこの『黒の書』に繋がっていたのが解った。ご丁寧に、はやてがしっかり主の権限が発動できる程度の繋がりを残して…。しかも、その侵食作用をリンカーコアに変換する機能までついていたのだ。どうやら例の特大リンカーコアは、『闇の書』の侵食作用3年分の結晶だったらしい…。

「ところで、これなんて読むんだ？」

ベル力関係が全く持つて解らないフィアが、ほんのタイトルらしき部分を指差して尋ねる。

「『女神の書』だ。……なんか聴いたことあるような…。」

「あなたの家宝なんでしょ？」

「開けなかったから中身はさっぱりだ…。」

おもむろにペラペラっとページを捲ったみらい。すると…。

「…ん!？」

「どうした？」

「……こいつ、筆談してきた…。」

「「…はあ?」「」

思わずプレシアと一緒に間抜けな声を出してしまったが、よく見ると確かに彼の言うとおり本の空白に見えないペンで書かれるように文字が浮き出てきた。

《嗚呼、遂に辿り着いた!! 巡り合えた!! この日をどれだけ待ちわびたことか!! よくやってくれた!! 我が子孫達よ!! これで僕の願いは叶う!! この世の未練を断ち切れる!!》

「……なんか、やけにハイテンションだな…。」

「…おい、みんなこっち来い。」

「どうしたん、みらいさん?…うおっ 『女神の書』 さんが!」

《おお、君が新たなる『夜天の主』…。ずっと見ていたが、君はとても優しくて温かい、素晴らしい人間だ!! 君になら彼女達を任せられる。どうか、かつて僕の家族だった“夜天の女神様”達を救うのを手伝ってくれないだろうか?》

筆談にも関わらず、やたら高いテンションのせいで本人の声が聴こえてきそうな勢いである…。そんな『女神の書』に対し、一人だけ違う反応を見せた者が居た…。リインフォースである…。彼女は驚きに目を見開き、体を震わせた。やがて、ゆっくりと口を開く。

「その呼び方…、まさ…か…まさか、あなたのですか…!!?」

「知っているのか、リインフォース!」

《本当に久しぶりだね、女神様…いや、今はリインフォースか。シグナムと守護騎士のみんなは…覚えてないよね…記憶はこっちに移してあるし…。》

どうやら、二人は互いのことを知っているようである。しかも、かつて深い関係を築き上げてきたような口ぶりだ…。意外な展開に思わず呆けてしまっ一同だったが、いち早く正気に戻ったはやてが問いだす。

「リインフォース、『女神の書』さんはいつたい…?」

「……彼の名前は『ミトナ』。我々の歴代主の一人です…。よもや、また会える日が来るとは…。」

「『ミトナ』…?」

リインフォースが目には涙を溜めながら呟いたその名前に、フィーアとみらいが反応した。

《皆様、申し遅れました。『マリウス・ミトナ・ギルジツト』と言います。まあ、初めましての方はそちらの3人だけですが…。》

今日、初めて八神家にやって来たテストロッサ親子とアルフの方に浮遊しながら視線（ページ部分）を向ける『女神の書』改め『ミトナ』。その名前を聞いた瞬間、固まった者が約二名。フィーアとみらいである。

《ではでは皆様方、事情の説明を兼ねまして“とある物語”を語らせてもらいましょう。はやてちゃん、『男の子と本の女神様』の話はご存知かな？》

「え？ああ、はい。みらいさんが話してくれましたけど…。」

《それはよかった。今から話すのはその語られなかった部分と裏事情なのさ。質問は、全部話終わってから受け付けるから待っててね？…それじゃあ、話をはじめようか？》

- - - 世界で一番不幸だった男の子が、どうやって世界で一番幸せな男の子になったのかを…。



## 第十二話 女神の書（後書き）

な…長ええ……。次回、『男の子』と『闇の書』の過去が…。

男の子と本の女神 起動編（前書き）

『闇の書』と『ミトナ』と『アルテミア』と『女神の書』と…。

## 男の子と本の女神 起動編

??? side

「遙か昔、アルテミア王国のとある山岳地帯」

「……朝だ。」

新たな一日の始まりの証である朝日を感じながら、濁った銀髪で緑色の瞳をした少年は目を覚ます。年は10歳になるかならないかである。

「……もつとも、年なんて意識する前に親に捨てられたから、自分の年齢なんて判らない。」

「……おはよう、 “黒い本” さん。」

自分を化物呼ばわりして捨てた両親がくれたのは『ミトナ』と言う名前と、物心ついた時から持ってたこの鎖で縛られた“黒い本”だけである。この本は直接話しかけてくれるわけでも、自分の世話をしてくれるわけでもないが、なぜか持っていると安心できるのである。

「……今日も、いつも通りになっちゃうのかな…？」

- - - 生きるために食料を取りに…。

- - - 生きるために魔法の練習を…。

- - - 生きるために寢床の確保を…。

- - - 生きるために、生きるために、生きるために、生きるために、  
生きるために、生きるために、生きるために、殺されないために、  
殺されないために、殺されないために、殺されないために、殺され  
ないために、殺されないために、死にたくない、死にたくない、死  
にたくない、死にたくない、死にたくない、死にたくない、死にた  
くない…。

- - - 何で、みんな僕を殺そうとするの…？

「何で…。」

…僕はただ、魔法が好きただけだったのに…。

「何で僕は…。」

…僕はただ、みんなの言う通りに魔法の練習をただけなのに…！

「何で僕はいつも…。」

…僕はただ、みんなと一緒に居たかっただけなのに…！！

「何で僕はいつも一人ぼっちなんだ…！！」

行き過ぎた才能を持つてしまった少年は、一人で泣き叫んだ。生まれた瞬間に認められたその才能に目を付けた大人達は、彼を即座に鍛え上げることにした。当初は予想以上の成果に喜んだ大人達だったが、やがて手のひらを返すように態度を変えた…。

ミトナの才能が自分達の予想を遥かに超えていたのである。そのことに気づいた彼らは、ミトナが自分達に力の矛先を向けることに恐怖した。

- - - その瞬間、世界の全てはミトナの敵になった…。

彼は世界中の人間に命を狙われ始めた。村人、軍、賞金稼ぎ、王族、魔導師…あらゆる人間が彼の命を狙って襲ってきた…。幼い彼は、自分が何故みんなに命を狙われるのか理解できず、ただひたすら生き延びることに必死だった。

- - - 自分を守ってくれる者が一人も居ない…、そんな生活を“5年間”も送っていた…。

「もう寂しいのは嫌だ!!」

ミトナは叫ぶ、居るかどうかも分からない誰かに向かって…。幼かったがために、彼がいままで感じたのは、自身の命を狙うものに対する“恐怖感”でも“憎悪”でもなく、一人ぼっち故の“孤独感”。それこそが、彼を最も苦しめる感情のひとつ…。だからこそ彼は叫ぶ…願う…。

「誰か僕と一緒に居て!!」

・・・この孤独を終わらせてと、願ひ泣き叫ぶ。やがて、願ひは聞き入れられた…。

『封印を解除します。』

「え？」

『起動。』

・・・ずっと自分と共に居続けた、光輝く『闇の書』によって…。

気がつくと、ミトナ目の前には4人の人物が跪いていた。ピンクのポニーテールの女性、やや短めの金髪の女性、赤い髪を三つ編みにした少女、白髪で筋肉質の男がミトナの前に現れたのだった。やがて、4人が口を開く。

「『闇の書』の起動、確認しました。」

「我ら闇の書の蒐集を行い、主を護る守護騎士でございます。」

「夜天の主の元に集いし雲。」

「ヴォルケンリッター。なんなりと御命令を…。」

ミトナは『闇の書』から突如現れた4人の言葉をほとんど聴いていなかった…。二人目の言った言葉が頭に残ったのだ……。『主を護る』と…それは、つまり…。

「…ねえ、『夜天の主』って僕のこと？」

「はい、その通りです。」

「みんなは、僕のことを守ってくれるの…？」「僕とずっと一緒に居てくれる」の…？」

「主が望むのであれば…って、主！？どうしたのですか！？」

ミトナが涙を流し始めたのである。いきなり主が泣き出したため守護騎士達は戸惑い、慌て始める。彼女らのさっきまでの威厳は、



欠片も無くなってしまった…。

「どこか痛いのですか主！？シャマル、とりあえず治癒魔法を！！」

「ごめんごめん、そんなじゃないよ…。ただ、嬉しくて…。」

…やつと、僕と一緒に居てくれる人と出会えて…。

この日、一人ぼっちだった男の子は彼女らと出会い、物語は始まったのである。結末を、彼が死んで“六百年経った”今も迎えることのない、長い長い物語が…。

男の子と本の女神 起動編（後書き）

この時のミトナは、まだ管制人格の存在を知りません。ただ、  
『書』 本体から誰かの温もりと愛情を感じています。 闇

男の子と本の女神 日常編（前書き）

すみません三分割は無理そうです…。

あ、それとヴォルケンズの口調は若干固めています。

## 男の子と本の女神 日常編

ミトナ side

『闇の書』起動から1ヶ月

アルテミア王国のとある森、そこで彼らは野宿をしていた。人数は3人、金髪の女性と赤髪の少女、そして銀髪の少年である。女性二人はとつくに起床していたが、少年は『闇の書』を抱きかかえたまま眠り続けている。だが、そろそろ時間なので金髪の女性：『シャル』が声をかける。

「主、朝でございますよ。」

「…ん。おはよ、シャル。」

孤独が終わりを告げたあの日、ミトナの世界は変わった。常に一人で静かに目覚める筈だった毎日、今では必ず誰かの呼び声で始まるようになった。

「あ、シャルが起こしに来たって事は…。また僕がビリか…。」

「ふふつ、主はお寝坊さんですね。」

「遅いですよ主。そんなだから、いつもフラフラのモヤシなんですよ。」

「ひどいよ、ヴィータ…。」

毎日が“生きるだけ”の日々…。聞こえだけは普通だが、本当にそれだけの日々だった…。生きるための摂取（食事）、生きるための訓練（練習）、生きるための移動（引越）…。常に一人で死なないための行い。そこに“喜”も無ければ“楽”も無い。かといって“怒”も無かった。

…あつたのは孤独感が生み出し続けた“哀”だけ…。

「あれ？シグナムとザフィーラは…？」

「え〜と、二人は…。」

「…また、来たんだね？」

「…はい。」

「…だが、今は違う。今のミトナには“喜”も“楽”だってある。そして…。」

「だったら僕も行くよ。」

「んなっ！？主は、体が弱いんですからお控えに…！！」

「主が行くって言うてんだから、いいじゃんかシャマル。」

「ヴィータちゃん！？私がシグナムに『主を戦場に来させるな。』って言われてたの知ってるでしょ！？」

「また、シグナムだったのか…。」

4人の中で一番過保護なのは烈火の将だったりする…。本人曰く、ミトナが今までの主で一番弱々しく見えるそう…。確かにモヤシなのは否定しない。だが…。

「その分、僕にはコレがあるもん。」

「……そう言つて、僅か“一日”でモノにしたベルカ式の魔方阵を手に浮かべて見せる。」

「……確かに、魔法だけでしたら私より上ですけど……。」

「主は本当に魔法馬鹿だから大丈夫だろ……。ぶっちゃけ非常識すぎだけど……。」

「實力は湖の騎士の折り紙つきである。出会つた初日に見せてもらったベルカ式の魔法を、いきなりマスターしたミトナに対してヴォルケンリッターは全員驚いた。彼は、全く持つて根本が違うアルテミアに古来から伝わる魔法と、ベルカ式の“両方”を完全に理解したのである。しかも一日で……。」

「でしょ？……それに、もしもシグナムとザフィーラが僕の命を狙つてくる奴らに傷つけられたら、僕はそいつらを一生……。」

「……今の彼には“喜”がある。“哀”もある。“楽”だつてある。当然……。」

「ユルサナイヨ？」

――“怒”だって存在するのだ。

そう言いながら彼は、かつて自身の命を狙ってきた魔導師から奪った服とローブを纏う。彼女らも、同じようにして手に入れた衣服を纏っている。

「さて、行こうか？」

「「御意。」」

――彼は向かう、大切な者たちと共に、大切な者たちの元へと…。

シグナム side

（ちょっと離れた荒野）



「クソっ！！悪魔の子の下僕どもが！！」

「おとなしく神の裁きを受けよ！！」

そう言つて武器を向ける王国軍の騎士たち10人前後。それに相対するはピンクのポニーテールの女性、烈火の将、剣の騎士『シグナム』。そして青い毛並の狼、盾の守護獣、『ザフィーラ』。二人はこの状況に眉一つ動かさず立っていた。シグナムにいたっては、レバンティンを地面に突き刺し、柄の部分に両手を添えて堂々と構えている。

「御託はそれまでか？」

「我らは守護騎士ヴォルケンリッター。主に害なすならば、たとえ神とて容赦はせん！！」

騎士団は二人が放つ気迫に一瞬怯む。しかし、すぐに気を取り直して剣を抜く。やがて隊長格らしき男が声を上げる。

「ええい！！例の小僧が我々に復讐の刃を向ける前に殺すしかないのだ！！かれ！！」

「ハッ！！」

同時に半分が抜刀、残り半分が魔方陣を展開した、それに対し、シグナムは即座に愛刀レヴァンティンを抜き、ザフィーラは魔力を体から迸らせた。

「レヴァンティン、カートリッジ・ロード！！」

《jabow！！》

「【紫電一閃】！！」

――豪っ！！

「ぬああああああああっ！？」

「おのれ！！怯むな！！」

炎を纏った刃による一閃は、斬りかかってきた5人中2人を戦闘不能にし、3人にダメージを与えた。魔法陣を展開していた援護組は、その様子を見た瞬間即座にシグナムに狙いを集中させ、魔法を放つ。しかし、それも…。

「盾の守護獣、ザフィーラ。攻撃などさせん!!」

・・・その全てを障壁で防がれてしまった。

「何!？」

「我々の魔法が...!？」

「くそっ!!こうなったら、大規模攻撃魔法だ!!剣士隊、魔法隊を援護しろ!!」

「隊長!?!ここでやったら周囲に被害が!!」

「構わん!!やれ!!奴らをころー!!」。

・・・ズドオオオオオオオオ!!

「」「隊長おおおおおおお!!?」「」

隊長は言葉を続けることができなかった…。降って来た何かによる轟音と衝撃と共に、吹っ飛ばされて気絶してしまったようである…。よく見るとそれは、魔法で強化された“鉄球玉”だった。

「…ヴィータか。」

「遅せーよシグナム。主が起きちまったじゃねーか。」

空を見上げると、同じ守護騎士であるヴィータが漂っていた。だが、今彼女の口から聞き捨てならない言葉が聴こえた。

「なに…！？ということはまさか！？」

「お待たせ〜シグナム〜。」

「主！？」

…心配だから置いてきた主がそこに居た。戦闘に参加する気なのは一目瞭然である…。

「でたな！！悪魔の子めっ！！」

「喰らえ！！【我らは神の使途、神の加護を持って、悪を討たん。】  
滅せよ！！」

魔法隊の一人がミトナに向かって魔法を放つ。それを見た瞬間、シグナムは慌ててミトナを守ろうとするが距離が遠くて間に合わない。放たれた白い光が彼に迫る…。

「詠唱が違うよ？【我らは神の使途なり、神の加護を受けし我らに討てぬ悪は無し、白銀の光を持って邪を討たん。】滅せよ！！」

ミトナの手から騎士の魔法より大きく、神々しい光を放つ銀色の光が放たれた。放たれた魔法は騎士の魔法を飲み込み、そのまま騎士の元へと突き進む。

「……………これが…悪魔の魔法の光だと…言う…のか…？この美しさは…。」

――神のようではないか…。

眩きを誰にも聞かれることなく、男は神々しいまでに美しい光に包まれて意識を失った。

ミトナ side

その後も騎士団は多少なり抵抗したものの、ミトナと守護騎士たちの手により全員撃破された。とは言っても殺してはいない。殺してしまったら蒐集ができなくなるからである…。現在、さっきまで後方支援に回ってたシャルが、倒した騎士達からリンカーコアを一人残らず抜き取っていった。

「よし、これで全員ね。」

「終わった？」

「ならば長居は無用。主、敵の増援が来る前に去りましょう。」

「そうだねシグナム。じゃ、ヴィータ。行くよ。」

「おう。」

蒐集の終わった騎士達から身包みを剥いでたミトナはその手を止め、同じように金目のものを漁ってたヴィータを呼ぶ。そのヴィータの返事の仕方にシグナムが眉を顰めた。

「ヴィータ…。主に対してなんて返事をしているのだ。」

「え？だって“ミトナ”が…。」

「おまえ！？今、主を呼び捨てにしたか！？」

日頃から口が悪いのは分かってるが、ここまで酷いのは始めてである。理由は違えど、ミトナは歴代の主のように『闇の書』の完成を望んだ。しかし、彼は今までの主と何かが違った…勿論いい意味で。なので、シグナムには敬愛する主にヴィータが暴言を吐いたように聴こえてしまったのである。

「ちよっ、待てっ！！ミトナがそう呼べって言ったんだって！！だからレヴァンティンしまえ！！」

「…主、それは真ですか？」

「うん、本当だよ？堅苦しいの嫌なんだもん…。シャルにも同じこと言ったから無闇に怒らないでね？」

「承知しました。すまなかつたな、ヴィータ…。」

「いや、いいつて…。あたしだって最初びっくりしたし。いきなり『呼び捨てにして敬語もいらない』なんて…。」

「…一層、ミトナが歴代主と何かが違うと感じた守護騎士たちだった。だいたい…。」

「ところで、シグナムとザフィーラもできれば同じようにしてほしいんだけど…。」

「なんですと…？」

「それは、少々無理が…。いや、主のご命令とあらば…！」

「あ、嫌ならいいや。」



「「。 （ガクツ。）」」

「基本的に“お願い”ばかりで“命令”はしない主は初めてである。」

その時、おもむろにシャマルが声をかけてきた。何かいいことがあったようで、若干テンションが高い。

「みんなー！！ページが半分超えたわよー！！」

「本当！？」

「よかったですね主。」

「これで管制人格に会えるぞ、ミトナ。」

「うんー！！」

ミトナが『闇の書』の完成を望んでからと言うものの、蒐集に苦勞

することはなかった。ほぼ定期的にミトナの命を狙う者たちがやって来たので、そいつらを倒しながらリンカーコアを奪っていったらアレヨアレヨと集まっていたのである。

「それじゃあ、ごたいめん。」

――カツ!!

その瞬間、『闇の書』が強く光輝く。その眩しさにミトナは思わず目を閉じてしまうが、すぐに目を開けた。するとそこには、黒い衣服を纏った銀髪で赤目の女性が居た。

――その美しい姿に、ミトナは思わず呟いた。

「女神様……?」

「我が主……、この姿でお会いするのは初めてですね。私が『闇の書の管制人格』です。」

「初めまして、ミトナです。なんでかな、初めて会った筈なのに…そんな気がしない…」

不思議な気分を感じていたら、唐突に管制人格が口を開いた。

「無礼を承知で少しよろしいでしょうか？」

「何を？」

「失礼します。」

――ギョツ。

「……ッ!?」「……」

その場に居た全員が驚いた。守護騎士なんて全員、目が点になっている。何故なら、彼女がいきなりミトナを抱きしめたのである。突然の行動に慌てるミトナだったが、あることに気づく。

「……ア…レ?この…感じ…は?」

「……『闇の書』から感じたぬくもり？」

「……ずっと、こうしてあげたかった……！今まで、一人の時からずっと……！」

「ッ！……もしかして、ずっと見守っていてくれたの……？」

「……本の中からずっと、一人ぼっちの僕のことを見守っていてくれたの？」

「はい……。会うのがこんなに遅くなって申し訳ありませんでした……」

「あ……ああ……ありがとう……。」

彼は彼女に抱きつかれたまま、涙を流し始めた。最初から自分は一人じゃなかったことを知って喜び、そのことに今まで気づけなかったことを悲しみ、今こうして彼女に感謝できることを喜んだ……。

――ずっと寂しかった、辛かった、悲しかった…。それでも、守護騎士の皆に会うまで生きる気力をくれたのは…『闇の書』から感じたぬくもりだけだったのだから…。

その後しばらく抱擁は続いたが、管制人格（ミトナにより『本的女神様』に決定）が大切な話があるらしく、終了した。どうやら『闇の書』と『主』であるミトナに関係するらしいが…。

「それで、管制人格改め『女神』よ…。話とは？」

「将、それにお前達は『闇の書』が完成した主たちがどうなったか覚えているか？」

そう言った彼女はミトナの方を見て暗い顔をする。まるでミトナの未来に絶望をしているかのように。

「何…？そんなの覚えてるに決まって…。」

「あれ…？思い出せねえ…。」

「馬鹿な…。そんな筈は…！…！」

「これから話すことはそのことについてだ…。主…、あなたは私のことを“女神”と呼んでくれた…。しかし…、私は…私は…。」

…今にも泣きそうな、とても悲しそうな顔をしながら、彼女は言葉の続きを紡いだ。

「私は、あなたの命を奪いかねない存在…あなたにとっての“死神”に他ならないのです……。」

…その言葉を聞いた瞬間、少年の心に炎が灯った。されど、その炎は自らの死の元凶を名乗る彼女に対する“恐怖”でも“怒り”でもない。

「…話を、聞かせて。」

-  
-  
- 深い悲しみに染まっていく彼女を救う“決意”だった。

男の子と本の女神 日常編（後書き）

あと『運命に抗う編』と『別れの日編』になりそう…。



男の子と本の女神 抵抗編（前書き）

前回の話、ちょっぴり修正しました。微妙すぎるけど…。

男の子と本の女神 抵抗編

ミトナ side

く とある屋敷にて・夜く

アルテミア王国に存在するとある街の小さな屋敷に、彼らは居た。その屋敷の一室で、ミトナは自分の計画にムラが無いが、もしくは他に楽な方法は無いかと『闇の書』改め『夜天の書』を調べていた。

・・・そして、あることに気づいてしまい、彼は怒り任せに机を叩いた。

「……なんてことだ……。これじゃあ…、この方法じゃあ彼女達は助からないじゃないか!！」

「どうしたんだ、ミトナ? ……本当にどうしたんだ、そんな顔して?」

物音に気づいてヴィータが部屋に入ってきた。入った瞬間に彼の尋常じゃない表情を見て一瞬怯んでしまった。そんな彼女の様子に気づいて、ミトナは壁に掛けてある鏡を見る。

・・・怒りと悲しみで染まりきった酷い顔だった…。

「…ごめん、ヴィータ。でも、大事な話があるんだ…女神さんと守護騎士のみんなを呼んでくれないかい？」

「ガキンちよ共」は？」

「寝かしたままでいいよ。『夜天の書』についての話だから。」

「分かった。」

ここしばらく、旅を続けているうちに野盗に襲われたり、地方の領主による厳しい徴税で苦しんでいる村を通りかかるたびに、ミトナ達は家族を亡くした子供達を引き取り続けていた。一人ぼっちになった子供達をミトナはかつての自分と重ねてしまい、ほっとけなかったのだ…。

・・・いつの間にか10人位にまで増えてしまったが…。

「しかしまあ…、人は見かけによらねーな。そのナリで10人の子供達の親代わりなんてな。」

「その姿で3百歳超えてる人に言われたくないよ。」

「どついう意味だそりゃ!?! たくつ、とにかく大事な話なんだな? 今、呼んでくる。」

そう言つてヴィータは部屋を出て全員を呼びに行つた。その後ろ姿を見送りながら、ミトナはポツリと呟いた。

「こんな大切なことを“5年間”も黙つてたのは、流石にちよつと怒るよ?! みんな。」

――『夜天の書』が起動してから5年。彼は杖デバイスで体を支えながら立ち上がった。

夜天の女神（管制人格） side

（屋敷の別室）

急遽夜中に関わらず主に呼び出された守護騎士たちと夜天の女神。部屋に來ると、椅子に座ったミトナが、5年間の旅で身に着けた氣迫を持って彼女らを迎えた。その無言の重圧は主に女神とシグナムに向けられている…。

「あ、主…?」

「ど、どうなされたのですか…?」

「……。」

沈黙を保ちながらプレツシャーを放ち続けるミトナ。そのプレツシャーは歴戦の猛者である烈火の將さえビビらせた…。それ以前に、彼がここまで怒るのはとても珍しいので全員慣れていないのである。

やがて、ミトナが口を開いた。

「女神さん、あとシグナムあたりかな…? “例の計画” に関して黙ってたことあるでしょ?」

「「「ッ!?!?!」」」

予想外な言葉の上に凶星だったので激しく動揺してしまった……しかもザフィーラまで……。その様子は一瞬でウィータに気づかれてしまい、立て続けに問いただされた……。

「な！？お前らいつたい、ミトナに……あたし達に何を隠していやがった！？……まさか、あの“計画”じゃミトナが救えないと言わねーだろうな！？」

彼らの計画とは、『夜天の書』の呪縛を解くための手段のことである。『夜天の書』による浸食作用も暴走の原因も元を辿ればかつての持ち主により改悪された『防衛プログラム』が元凶である。しかし、それと戦うには『夜天の書』を完成させなければならない。その上、戦ったところで勝てるかどうか分からないし、負けたら世界が滅ぶのだ……。

なので、『防衛プログラム』の強さをある程度理解している女神（管制人格）が“G○サイン”を出せるほどの力を身に付けるために、旅を続けながらミトナは実力を磨き続けていたのだ。その成果のひとつが、ミトナが創ることに成功した『反侵食魔法』である。その名の通り『夜天の書』の侵食に抵抗するための魔法であり、その効果のおかげで5年経った今も侵食は杖一本で事足りる程度に済んでいる。

……もつとも、魔法が高度すぎてミトナにしか使い続けることが出来なかったが……。

「いや、一応僕はその方法で助かるみたいだよ？…“僕は”ね。」

「……ばれてしまいましたか…。」

「いったい、どういうことなの？」

思わずシャルマルが口を挟む…、どうやら彼女とヴィータは知らなかったようである。それに答えるためにミトナは言葉を続けた。

「さつき『夜天の書』を調べ直してて気づいたんだ…。すべての元凶である『防衛プログラム』を僕達は破壊するために努力してきた。でも、女神さん…あなたと守護騎士のみんなは……。」

「…防衛プログラムとほとんど一体化してますね？破壊すると一緒に消えるくらいに…。」

その真実に女神とシグナム、そしてザフィーラは俯いた。話を聞

かされていなかったヴィータとシャルは驚きに目を見開いて固ま  
っている…。しばらく沈黙が続いたが、女神がミトナの問いに答え  
た。

「…はい。その通りです。」

「…今まで黙ってて申し訳ありませんでした……。しかし!!」

「我らはあなたを守るための存在!!故に主が生き延びることがで  
きるのであれば、この命惜しくはありません!!」

本当のことを知らなかったヴィータとシャルの二人はその状況  
について行けず困惑していた。やがて、我に返ったヴィータが女神  
に掴み掛かった。

「なんで…なんで、あたしとシャルには黙ってた!?!…いや、お  
前のことだからどうせ口くでもない理由だろ!!」

目に涙を浮かべた彼女の問いに、女神は視線をそらしながら答え  
る。

「…管制人格の権限で、どうにか守護騎士プログラムを“1人分”  
切り離せそうなんだ……。そして、人格と意識だけなら主のデバイ



スにもう1人分送ることができる…。」

「それがなんであたらなんだ！？お前たちは！？」

「お前達二人が一番、主の平穏な日々に対応しいと思ったからだ…。私や将では戦い続けることはできても、安らぎは与えれない…。だから、主のことはお前達に託すと決めたんだ！！私たちは『防衛プログラム』と運命を共にする！！」

「勝手なことやってん（ドゴオォン！！）」「勝手に決めるなっ！！！！」「……ミトナ…？」

「あ…主……？」

振り向くと、ミトナが自身の支えにしていた杖で床をぶち抜いていた…。怒って杖を思いっきりたたきつけたらしい。今までにないくらいの怒気を纏っていたミトナに、全員後ずさる…。

「女神さん、僕は前にも言ったよね？『夜天の書』のぬくもりが…あなたの愛情が僕を生かし続けたと…。」

「……はい。」

「シグナムだって厳しい時もあるけど、とても優しくて温かい人だ……。ザフィーラも基本無口だけど、よく僕の悩みを聞いてくれるし、いつも一緒に居てくれた……。」

「主……。」

「……そんな君達を僕がただの下僕として見てたと本気で思ってるの！？僕にとって君たちはもう、世界を敵にしても……世界を滅ぼしかけてでも守りたい家族なんだよ……！」

「ミトナ……。」

「ミトナ君……。」

彼は泣き叫ぶように言葉を紡ぐ。その彼の吐露に、女神とシグナム達は自分の考えが甘かったことを自覚する。彼の望んだ世界は、自身を死の脅威が襲わない世界では無い……。

――孤独とは無縁の……大切な誰かと共に在り続けることができる世界……。それが命を狙われ続け、孤独であり続けた一人ぼっちの少年が望んだ世界……。

「だから、女神さん…。勝手にそんなこと決めないでよ…。あなたは、自分の事を“誰かの道具”としか思っていない時があるみたいだけど…。僕はそのあなたに、ただの人間よりたくさんの愛情と温もりを貰ったんだから……。」

「……主……。」

そう言っただけで彼は彼女を抱きしめた…。初めて会った時に、彼女が自分を抱きしめてくれたように優しく抱きしめた…。そして、その時と同じように抱きしめられた方は涙を流す…。

「守護騎士のみんなもだよ？みんな僕にとって大切な人達なんだから…。だから、幸せになるならみんな一緒だよ…？」

その言葉にシグナムが目には涙をためながら答えた。泣きそうになっているのを必死に堪えてるためか若干声が震えている。

「はい、我が主…。そして、本当に…本当にありがとうございます……。」

「うん。」

――その日、ミトナは改めて決意する。家族全員を…誰も犠牲にせず全員を救ってみせると……。

男の子と本の女神 抵抗編（後書き）

次回で回想終了予定。……いつかコレをメインに書きなおそうかな  
…？

**幕間　ちよい休憩の八神家（前書き）**

回想は次回で終了。

## 幕間 ちよい休憩の八神家

はやて side

（八神家・現在にて）

（私も、みらいさんと会わなかったらどうなってたんやろ…？）

『女神の書』改め、『マリウス・ミトナ・ギルジツト』による話を聞きながら、はやてはかつて自分を思い出していた。多少差があるものの、はやてとミトナには似た部分がある。

――魔法の本に出会ったということ。

――孤独であったこと。

――大切な家族に救われたということ。

しかも、みらいを除いたら彼の家族と自分の家族は同じである。ここまで同じ境遇の人間（？）に出会ったことに対して、彼女は不

思議な気分になっていた。

（ていうか…、昔みらいさんにこの物語聞かせてもらった時に『この男の子、私と同じやね。』とか言ってたっけ？）

ミトナは『闇の書』改め『夜天の書』に出会い、守護騎士のみんなに会うまで生きてこれた。自分はみらいと出会い、守護騎士のみんなに会うまで元気でいられた。そう考えるとなんとも言えない気分になるのだ…。

「なあ、みらいさん…。みらいさん…？」

少しみらいと話そうとして声を掛けたのだが、返事が無い。不思議に思い、視線を横に移すと…。

「ちよっ！？みらいさん！？」

「どうかしましたか…って、みらい殿！？」

…みらいが白目を剥いて顔を青くしながら、泡を吹いて気絶していた…。



「ふえええええ！？どうしたの！？」

「わからへん！！シャマル、治療治療！！」

「はい！！」

リビングは一気にカオスな空間に陥った…。そんな状況の中、一人いたって冷静になっている奴が居た。フィーアである…。それに気づいたフェイトとアルフが声を掛ける。

「ねえ、フィーア。みらいはなんであんな風になっちゃったの…？」

「ん？…アルテミア王国にはな、“三大偉人”ってのがいたんだよ。三人は各自称号を…ていうか肩書きみたいのを持ってたんだ。」

「どんなの？」

「親を亡くして路頭に迷う子供達を救い、導き続けた『大神父』。悪事を働く者達を更に強大な悪を持って葬り続けた『悪魔の子』。数世紀経った今でも追いつけない技術を編み出し続けた『学神』。ほとんど昔話みたいになってるが、この三人は素性こそ分からないものの確かに居たって言われてる伝説の人物だったらしい。『学神』の論文にいたっては連邦でも有名なんだよ。」

「へえ……。でも、それとみらいが倒れたのどう関係してるの？」

「あまり関係ないんじゃないかい？」

改めてみらいを見るフェイト。シャマルの治癒魔法を受けるものの、効果はいまひとつのようで顔が青いままである……。

「……その3人の素性は不明だけど……いや、不明“だった”だな……。名前は判明していたんだ。」

こんな時に全く持って関係なさそうな話をするフィーアに、その場に居る全員が意識を向け始めた。それでも尚、フィーアは動じない。

「ちょっとフィーア兄、なんの話してんねん？」

「まあ、はやても聞け。その3人の名前は……。」

- - - 道德を司りし、大神父“マリウス”

- - - 暴力を司りし、悪魔の子“ミトナ”

- - - 文化を司りし、学神“ギルジット”

「「「「「「「「「「……。(シーンッ……)」「」「」「」「」

「さて、質問だ……。物語になったり、教科書に載るほど有名な偉人達が3人とも同一人物で、尚且つ自分の先祖と名乗ってきたら……？」

「……。 (死ーんッ……) 」

答え・思考がフリーズして気絶。

「私らつてもものすごい人と暮らしてたんや…。」

「でも…、あたしら全然覚えてないんだけど…。その、ミトナのこと…。」

これまでの話を聞きながら、ヴォルケンリッターの4人は疑問に思っていた。話の通りなら、彼女らがミトナのことを忘れるはずが無いのだ…。どうでもいい、むしろ最悪だった元主のことだって何人か覚えている。

なのに、何故彼のことを思い出せない？リインフォースが嘘をつくとは思えないので、彼女が覚えてると言うのなら本当なのだろうが…。

《ああ…。そのことなんだけどね…。》

ミトナが言いにくそうに（喋ってないけど…）会話に乱入してきた。どうやら、彼が直接関係しているようである。

《さっきまでの話で分かったと思うけど、みんなを助けるためには5人とも『夜天の書』から切り離せるようにしなきゃいけなかったんだ。だから、『夜天の書』にそれが可能にできるだけの『プログラム』をねじ込むことにしたんだけど…。》

「「「「けど…?」「」」」」

《ごめん…。その時造れた物は容量が大きすぎて入りきらなかったんだ…。そこで、容量を増やすために『夜天の書』から引き抜いたんだ…。君達4人の記憶を…。》

「なっ…!?!」

「そんなことが本当にできたの…!?!」

「いや、それよりもその時のあたしらの記憶は!?!」

「…彼との思い出はどこに行った?」

《この中だよ。》

「え?」

《ヴィータの思い出も、シグナムのもシャマルのもザフィーラのも全部、君達の記憶はこの『女神の書』の中にとっというてあるよ。》

彼曰く長い年月を掛けて作り上げた『プログラム』が完成し、それを早速使おうとしたのだが…先程言ったように容量が足りないという問題にぶち当たった…。そこで彼女らの記憶をいったん預かり、全てが片付いたらすぐ返すつもりだったらしい。

《だけど、また新しい問題が…。》

「今度は何だよ…。」

本人はあまり自覚してないようだが、今ミトナに一番積極的に話しかけてるのはヴィータだったりする…。彼の生前も、一番会話の量が多かったのは彼女だった気がする…。

《女神さんの…リインフォースのシステムプログラムが君達と全く違ったから、別のプログラムを造らないといけなかったんだ…。》

「……………申し訳ありません…。」

《リインフォースが謝る必要は無いですよ…。とにかく時間も充分にあったから、同じ容量でさっさと造るつもりだったんだ…。…けれど…。》

- - - 元凶を叩きのめすだけの力は身につけた。

- - - 守護騎士たちを呪縛から解き放つ準備はできた。

- - - あとは女神を救うための手筈を整えるだけだった…。

- - - しかし…。

《どこかで『夜天の書』の力を聞きつけた王国軍が僕達の元に現れたんだ。その時の指揮官が…。》

- - - アルテミア王国軍、魔導騎士隊千人隊長、ミルトナン・ギル  
アーク。

-  
-  
- 僕の生みの親の片割れだったのさ…。



男の子と本の女神 迎えることなき結末（前書き）

過去話は今回で最後です。つーかいつもより長くなりすぎだ…。

## 男の子と本の女神 迎えることなき結末

??? side

くアルテミア王国・ウェイグ城く

アルテミアに存在するひとつの城、『ウェイグ城』。その一室で、領主である『ミルトナン・ギルアーク』は先日捕らえた人物のことを考えていた。

「ふん…、よもや生きていたとはな…。」

国王に命じられ、『夜天の書』なるものを持つ者を捕らえに大軍を率いて向かった彼は、思いもよらない人間に出会った…再会と言ってもいい…。

「ミトナ…、あの疫病神が…。」

…彼の実の息子、『ミトナ・ギルアーク』だったのだ。

この世に生を受けた瞬間に発覚した魔法の才能…。それに目を付

けた王宮の人間は、ミトナの才能を昇華させるために引き取りたいと言って来た。無論、報酬として『十人隊長から百人隊長への昇格』、『領地の拡大』、その上『天才魔導師の系譜』という名誉までついて来るのなら文句はなかった。妻も特に反対せず、むしろ賛成した。

――結局彼らは、あっさりと自分の息子を国に売った。

しかし、ミトナの大きすぎた才能により『天才魔導師の系譜』の称号は『悪魔を生んだ一族』に成り下がってしまったが……。そのせいで色々と苦勞したが、今では自力で千人隊長の座に就いた。

「結局、奴が居なくても私は出世できたということだ……。むしろ、奴さえ居なければ『悪魔を生んだ一族』などという不名誉な呼ばれ方をしなかった……。そう思わんかね？『夜天の書』の『管制人格』とやら……。」

「……グッ……。」

彼の足元には、ボロボロの状態で『夜天の女神』が横たわっていた……。相当痛めつけられたようで、ミトナの実の父親とはとても思えないこの男の言動に、怒りをぶつけてやりたくてしょうがないが動けず、呻くことしかできなかった……。

「だが、あの小僧は最後にいいものを持って帰ってきてくれた…。  
この本の力さえあれば、アルテミア王国を…いや、世界を手に入れることができる…！」

そして、おもむろに彼女の髪を掴み上げてグイッと持ち上げる。  
そのまま覗き込むように見つめながら彼は言葉を紡ぐ。

「…確か、お前は『夜天の書』は主にしか使えないと言ったな…。  
だが書に唯一命令できる主に対し、私が命令できればいいのだろう？」

「…な…何を…？」

「簡単なことだ。あの小僧が拾ってきた餓鬼共を人質にすればいい。」

「ッ！？……あなたは…、本当に人間なのか…！？」

「プログラムである貴様らよりはな。話は終わりだ…、衛兵…！こいつと牢獄にいる奴らを例の場所に連れて来い…！儀式を始める…！」

「ハッ…！」

――物語は狂い始める…。

ミルトナンスide

（儀式上）

「女神さん!!」

「おい!!しつかりしろ!!」

「ッ!!貴様らあああああああ!!」

衛兵に連れてこられた彼らが最初に見たのは、痛めつけられてボロボロにされた夜天の女神だった。今すぐにでも駆け寄り、治療してやりたかったが拘束されているため動けなかった。

「あなたは…、なんであなたはこんなことを!？」

自分の父親に向かって問いかけるも、帰ってきたのは侮蔑の眼差しと嘲笑だった。

「子が親に尽くすのは当たり前であらう……。貴様は死ぬまで私の役に立ってもらう。まずは最初に、この『夜天の書』を使いこなして貰おうか？」

「駄目だ、それは完成させても暴走するだけだ！！使いこなすなんて無理なんだ！！」

「貴様の意見など訊いていない。使いこなせなければ、餓鬼共の命は無いぞ？……そもそも、私は貴様のその才能だけは買ってやってるのだ……。お前の悪魔の力でどうにかできぬ事もあるまい。」

「ッ！？」

そう言われ、彼らとともに連れてこられた子供たちのことを思い出す。子供たちは未だに牢獄に囚われたままであり、実質人質状態である。

「貴様の所持品は全て持ってきてやった。さっさと始めろ……。」

ミルトナンの言葉に応じるように、衛兵の一人がミトナのデバイスと試作型魔導書を持ってきた。この試作型の魔導書には、守護騎士たち4人の記憶が納められている。『夜天の書』とパスを繋いでいるため、実質彼女らの記憶は本人達が持ったままと同じだが…。

「……分かりました…、やります…。」

「「主!?!」」

「駄目だミトナ!! そんな奴らの言う事聞いちゃったら…!!」

「大丈夫だよ、みんな…。なんとかしてみせる。」

「…君たちと一緒に居られるなら、僕は…。」

「まずは『夜天の書』を完成させなければいけません…。準備が必要なので少し待ってください。」

蒐集もそうだが、まずは夜天の女神を書から切り離す術式の完成が先だ。そうしないと、防衛プログラムを制しても彼女が消えてし

まっ…。いくらミトナでも、防衛プログラムと戦いながらではその術式を組むことは不可能だ。

そして、決意を胸にミトナは父親<sup>ミルトナ</sup>と向き合った。

…だが、彼はミトナのことを最初から見てなかった…。

「安心しろ、最後の蒐集により書はすぐに完成する。」

「……え…?」

…彼が見ていたものは最初からただひとつ…。

「…奪え。」

「ハッ!!」「ハッ」

「っ!?!まさか、よせっ!?!」



・・・この世にあるモノは彼の欲望を満たすための存在だけ…。

「あああああああああああああああ！？」

「うああああミトナあああああああああああああ！？」

「ウグッ！…くそおおお…ある…じ…！！！」

「ぐわあああああ！！！」

・・・それが彼の…ミルトンにとっての世界の在り方…。

「みんなあああああああああああああ！！！」

「さあ、これでページは埋まったぞ…？」

ミルトナン達は守護騎士の4人に対して躊躇うことなく蒐集を行使した…。魔力で構成された彼女らからリンカーコア…魔力の源を奪うこと、それはすなわち…。

- - - 彼女達の消滅を意味する。

「あ…ああ、あああ…。」

4人がさつきまで居た場所には、もう何もなかった…。彼の大切な家族は、呆気なく消滅してしまったのだ…。

- - - 悲しみにくれる彼に構わず、ミルトナンは全てを続ける。自身の欲望のために…。

「プログラムごときに涙するとは…。人外同士、仲良くやってきたようだな…。さて、余韻に浸るのはそこまでだ。さつさと…。」

- - - そんな彼だからこそ、この結末を迎えたのは必然だったのかもしれない…。

「あ…あああああ…あああああああああああああああああ



彼の周囲に巨大な魔方陣が展開されていく。その数は1つではなく、1種類でもない。アルテミアとベルカ、そして彼のオリジナルを混ぜた百近い数種類の魔法陣が儀式場を埋め尽くした。

「な！？詠唱も無しにこの規模だと！？」

「ああああああああああああああああああああああああああああああ！！」

――ゴオオオオオオオオオオウ！！

放たれた魔法の数々は儀式場を吹き飛ばした。同時に魔方陣のいくつかが別種の輝きを放ち、どこかへと飛んでいく。

「呪ええええええ！！【スロタリウス・アーダスト】！！」

「な、なんだ！？……うぐっ！？」

「馬鹿な！？これは…っ！！」

何の前触れもなく衛兵達が次々と倒れていく。まるで糸を切られ

た操り人形のように力なく倒れていく。  
。気絶したわけでは無い、“絶命”しているのだ…。

…その魔法は禁断の呪詛…、この世の理を無視しながら相手の命だけを刈り取る封じられし魔法…。

「禁呪『死召詩』…！？まずい、逃げ…！！」

もはや手遅れ…。彼の怒りは『夜天の書』の防衛プログラムさえも凌駕していた…。周囲を破壊し、死の呪いを屋敷中に向け、自身の家族を奪った者達を次々と殺していく。

彼の憤怒と暴走が創り出したのは地獄絵図。被害は儀式場だけにとどまらず、城中の人間がミトナの逆鱗に触れて命を落としていく。

…やがて、彼は全ての元凶へと歩を進める…。

「ひっ！？…うあっ！？」

さっきまでの雰囲気は微塵も無く、蹲りながらミルトナンが情けない悲鳴をあげた。そんな彼をミトナは魔法で強引に引き寄せ、首を掴みあげながら睨みつける。

…ミトナの緑色だった瞳は、怒りで赤く染まっていた…。

「…………。」

「よ、よせ……！私が悪かった……！だから許してくれ……！」

「…………【我は復讐者】……。」

「っ……？その詠唱は……！！！」

「【我は断罪者、我は破壊者、憎悪と怨嗟の赴くがままに……】……！！！」

「や、やめろおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおお……！！！」

「【削り殺せ・負感情蟲】……！！！」

「……放たれた魔法は、殺すためのモノでも拷問のためのモノでもない……、“惨殺”のための魔法……。」

「アグx津sだl期亜k s d h g kじゃbなj s f d s j v んj ん  
あんv j k d ああ；ヴぁlk あv k j k ふぁk g かあああああ  
あああああああぁっ!？」

- - ミルトナンの体が少しずつ、少しずつ、体の内部からゆつくりと“すり潰されて”いった…。

「があああああさっふぁウエj k q r 感化；っぁlv l；あつか  
fl；あdそぁk!?!?？」

見えない力により、徐々に己の体を潰されていくミルトナン。骨が砕け、内臓をバラバラにされ、肉が溶かされ、激痛に苛まれながら狂った悲鳴を上げ続ける。だが、それも長くは続かなかった…。

「……もう、声も聴きたくない…。」

「あああああだfどぁrふえらq q r r f b てえr r w!?!！」





そして、悲しみに満ちた慟哭を上げた…。彼の腕には、先ほどまで横たわっていた『夜天の女神』が抱えられていた。彼女だけはどうにか無事のように、今は気を失っているだけのようだ。人質として連れてこられた子供たちも、ミトナはあの惨状の中にありながら確実に巻き込まないようしたので同様である。

――だが、それでも…。大切な4人が消えたことへの悲しみが消えることは無い…。

しばらく泣き叫んでいたミトナだったが、その叫びが突如止まる。彼は怒りに任せ、ミルトナン達を殺すために全ての魔力を攻撃にまわしたのである。命を削る禁呪まで用いて…。

――彼はその腕に抱いた彼女と重なるように倒れ、意識を失った……。

「闇の空間」

しかし次に目を覚ますと、視界に入ってきたのは先ほどの廃墟では無く、ましてや天国でも地獄でも無かった。あたり一面、真っ黒な世界だ。ミトナはその状況を不思議に思いながらも、特にできることもなさそうだったので何かすることを諦めた。

「あの世っていうのは、こんなにつまらない所だったのか…。」

「まだ、死んでませんよ。我が主…。」

「っ！？…女神さん！！！」

声のした方を振り向くと、夜天の女神が居た。

「まだ死んでないって、どういうこと？…っ！！…そういえば、『夜天の書』が！！！」

一時的に止めたとはいえ、完成させてしまったので暴走することには変わらない…。本来なら、管制人格である女神と守護騎士の4人を切り離れた後に書を完成させ、防衛プログラムを倒すつもりだった。だが、女神を救うための術式を完成させる暇も無く、『夜天の書』は完成してしまい、唯一切り離し可能だった守護騎士たちは蒐集により『夜天の書』と…“女神と一体化”してしまったのだ…。

・・・つまり防衛プログラムを壊したら彼女たちも完全に消える…。そして書が完成した今、暴走と戦わなければ世界は滅ぶ…。

「女神さん、僕はいつたいどうすれば…!!」

・・・世界を救えば家族が消え、家族を救えば世界が消える…。

「落ち着いてください、我が主…。書は“暴走してません”…。」

「え…?」

「あなたが『夜天の書』に向かって怒り任せに放った魔法が書の項を削ったのです。そのせいでギリギリでしたが、書は“未完成状態”なのです。」

「…は…ははは…それはまた…。」

彼が放った魔法は『夜天の書』を壊しかねない威力だったため、自動的に項を減らしながら防御魔法が起動したらしいのだ。なので、目が覚めれば先程の光景がそのまま残ってるらしい。

「ああ…、よかった…。だったら守護騎士のみんなを復活させることもできるし、女神さんを切り離すための術式を造る時間もあるってことか…。本当によかった。」

ミトナは思わず脱力してそのままへたり込んだ。自分の大切な人たちは誰も消えてないことに安堵したのだ。しかし、彼は気づいた…。女神の表情がとても暗いことに…。

「女神さん…？」

「……主…。私は、お別れを言いに来たのです…。」

「な…！？」

「我が主…。あなたは確かに死んではおりません。ですが、あなたは仮死状態なのです。『夜天の書』があなたを“死んだと判断する”くらい、深い眠りについておられるのです。」

「そんな…！？それじゃあもしかして…！？」

――持ち主が書を完成させる前に死んだ場合、『夜天の書』は異世界へと転移する。

「そんなの駄目だ！！守護騎士のみんなはともかく、あなたはまだ書と分離できてないんだ…！！このままじゃあなたはずっと防衛プログラムと…！！」

「それでも、我々には行かなければなりません…。」

「そんな…。お願いだ、行かないで！！僕を一人にしないで！！」

この空間のミトナは意識だけの存在にすぎない。故に、今の彼には何もできない。彼女の別れの言葉を素直に受け取るしかできない…。

「主…いえ、ミトナ…。私たちは、あなたに出会えて本当に幸せでした…。」

「女神さん…。」

「ただの魔導書のプログラムにすぎない私たちを人として扱い、家族にしてくれた…。私たちのために笑ってくれた、泣いてくれた、怒ってくれた、喜んでくれた…。それを幸福と言わずなんと言うのですか…？」

彼女は今までのことを思い出しながら目に涙をため始めた…。ミトナも着々とせまる別れの時を感じて涙を流し始める…。

「それでも…、それでも一人になるのは嫌なんだ…！！」

「もう、あなたは1人ではありません…。あなたが救い続けた子供たちは、みんなあなたのことを慕ってついて来たのですから…。」

「……あ…あ…。」

「…そうだ…。今の自分には愛すべき人達と、愛してくれる人達が…。」

「だから、ミトナ…。どうか笑ってください…幸せになってください…。」

「…そう言って彼女は抱きしめる。自分達を幸せにしてくれた彼を…ずっと孤独だった男の子を…。」

「女神さん……。う……。うああああああああああああああああああああ……。！」

……。そして彼は抱きしめる。自分を幸せにしてくれた彼女を……。終わらない悲しみを背負う女神を……。

悲しみと喜び……。様々な感情がこもった涙を流す2人。だが、ついに別れの時はやってきた……。女神の体とミトナの体が消滅してきただけ……。

「……。時間のようです……。ミトナ、改めて言います……。あなたは1人ではありません、幸せになってください……。」

「……。ありがとう……。」

「さようなら、我が主ミトナ……。私達の自慢の……。」

「さようなら、夜天の女神、守護騎士のみんな……。僕の最高の……。」

「……家族よ……」

その言葉と同時に、ミトナの意識は再び闇に落ちた…。

（廃墟（ウェイグ城））

「……。」

意識を取り戻したミトナ。彼の腕に彼女の姿は無く、『夜天の書』も消えていた。その場に存在しているのは瓦礫と死体の山、そして自分の所持品のみだった…。

しかし、今の彼の表情に迷いと戸惑いは無かった。やるべきことは決まっている。



「行かなきゃな、子供達のところに…。」

「…彼女達を救うために造り続けた魔導書を手に、彼は向かう。自身が愛すべき者達と、自身を愛してくれる者達の元へと…。」

「…女神さん、みんな……。本当にありがとう……。でも…、幸せになる時は一緒だからね…？」

「…男の子は歩み始めた…、彼の望んだ幸せな世界のために…。」

第十三話　そういえば、まだ正月迎えて一日目…（前書き）

やっと帰ってきたZ E本編に!!

第十三話　そういえば、まだ正月迎えて一日目…

みらい side

く八神家・夕方く

《いや、子供たちを引き取り始めた時の話とか初恋の話とか、結構省いたんだけど長くなってごめんね。懐かしいからつついっ止まらなかったよ。あっはっはっはっは…。》

ミトナによる昔話を聞いた面々は、その内容にただただ呆然としていた…。特にヴォルケンリッターの4人は、かつて自分達にとっても大切な家族が居たという事実には衝撃を受けていた。

「…………ミトナ殿…。」

《何かな、シグナム？》

「…我々の当時の記憶は、あなたが持つておられるのですね？」

《うん、そうだよ。でも、しばらく返せそうにないや…。》

「っ！？何故ですか！？」

「そうやでミトナさん！！何でみんなの大切な思い出が返せないっちゅうねん！！」

「…主。」

おそらく、今のヴォルケンリッター全員の気持ちを代弁したシグナム。だが、本題を言う前にミトナが先読みして無理と宣言した。そのことに納得いかず、現主のはやてが異を唱える。

《とにかく最後まで聞いて…。君達が旅立ったあと、リインフォースとの約束通り僕は幸せになるために生きてきた。子供達を導いたり、魔法を極めたり、恋をしたり…。》

…捨て子を引き取り続け、百人の子供の父親になった…。

…野盗や悪徳領主をケチヨンケチヨンにしたこともあった…。

…ベルカ式の魔法を少しアレンジして国中に広めてみた…。

「おいしいiiiiii!?!今、さらりとんでも無いこと言わなかったああああああ!?!」

「おわっ!!みらいさん、復活したんか!?!」

自分の御先祖様がとんでもない人物であったことと、ミトナと自分達の家族の関係を聴いて泡噴いてたみらいだったが、今度は自分がずっと疑問に思ってたこと…アルテミアとベルカの技術が同種という謎をさらりと答えられてしまった…。

「いや…、話の途中で予想できたら?」

「私もなんとなくは…。」

「そうよねえ…。」

どうやら気づかなかったのは脳がショートしてたみらいだけだったようである…。最近、丸くなったせいで勘の鋭さも減ったらしい  
(フィニア・談)

「……………しょうがないだろ…。最初のカミングアウトに驚いたせいで、頭が真っ白なんだよ…。」

《続けていいかな？…確かに、みんなと出会う前と比べたら僕の世界（人生）は眩しいくらい明るい物になった。僕を愛してくれる人達と、僕が愛すべき人達に囲まれて毎日が幸せだった…。でもね、やっぱり心残りがあったんだ…。君達を呪縛から解放できなかったことさ…。》

「ミトナ…。あなた、まさか……。」

彼の人柄と性格をよく理解しているリインフォースは、なんとなく予想がついたらしい。他の面々も、彼が『女神の書』を造ったということを踏まえ、おぼろげに想像がついた…。

《僕は君達が去ったあとも、例の試作型魔導書を改良し続けたのさ。『夜天の書』が転移しちゃったからリンクが切れたせいで、守護騎士のみんなの記憶も切り離されちゃったけど、消滅はしなかった。》

だったら尚更、何故返してくれない！？と、シグナムが再び問い詰めようとしたがみらいとはやてが落ち着かせる。二人は、きつとミトナはみんなが納得するだけの理由を話してくれると、この短いような長いようなやり取りで確信していた…。そして、彼に続きを促す…。

《とにかく完成させようと思って魔導書の改良を続けたよ…。でも君達が目の前から消えた当時では、ただリインフォースを解放する

プログラムだけじゃあ足りなかった。》

- - - 課題その1。異世界に転移した『夜天の書』がどこにあるか判らないといけない。

- - - 課題その2。場所が判ったところで、そこに行けなければならない。

《しかも、完成するころには僕は御爺さんになってそうだったから、元気なうちに『夜天の書』探しの旅するのは無理そうだったんだよね…。》

- - - 課題その3。自分が死んでも起動し続けなければならない。

- - - 課題その4。みつけた時の彼女らの主も助けなければならない。

- - - 課題その5。逆もしかり。最悪な主から彼女らを助けることができなければならない。

《これらの課題をクリアするためにありとあらゆる術式を組み込んだ…。そしたら、その…。》

途端にまた言いにくそうにするミトナ。この場で一番気が短いヴィータが痺れを切らす…。

「だー！！めんどくせーな！！早く言え！！」

《…また、容量が足りなくなっちゃったんだ……。》

「うおいつ！？」

《でも、さっきの課題っていうか条件を最低限に削っても足らなかったんだよ…防衛プログラムを破壊した後、形態維持と再生機能の力を失ったリインフォースをこの『女神の書』に移すためのスペースが…。そこで思いついたんだけど…。》

…『女神の書』に保存しといた君たち4人の記憶部分メモリーを媒体にしようかなと…。

その考えに全員言葉が出てこなかった…。確かにミトナによるオリジナルの術式よりも『夜天の書』の一部とも言えるヴォルケンリッターの記憶は、管制人格であるリインフォースにうってつけだったかもしれない。

《だから、全部終わってリインフォースが『女神の書』に宿ったら、みんなの記憶は彼女を経由して戻ってくるからしばらく待っててね？》



そんな彼の言葉（筆談）に守護騎士たちは一瞬だけ沈黙したものの、すぐに気を取り直して肯定の意を示す。

「…分かった。けど、必ず思い出させてくれ……。」

「リインフォースが涙を流したのだ…。よもや、嘘ということもあるまい…。」

「そして何より…。」

「記憶は確かに無いんだけど…、懐かしい感じは確かにするのよね…。」

ヴォルケンリッターの4人は彼のことを信じることにしたようである。

《ありがとう、みんな。…さてと、はやてちゃん。》

「え？…あ、はい。」

突如ミトナがはやてに話を振った。いきなり自分に話しかけてきたので少し呆けてしまったが、すぐに話を聞く体制に入る。

《君に、選択肢は2つある。》

「…。」

――1つ。このまま平和な日々を過ごす。

――2つ。『夜天の書』の防衛プログラムと戦う。

ミトナの提示した言葉の意味を、はやては8歳とは思えない表情で考えはじめる。やがて、逆に訊き返してみる。

「…1つ目はどういうことや？」

《最近のことを考えれば分かると思うけど、『女神の書』がこの世界に存在する限り、はやてちゃんは『夜天の書』に侵食されることは無い。つまり、君は天寿を真つ当できる。》

「…みんなは、どうなるんや？」

《はやてちゃんが死んだら、『夜天の書』ごとまた転移してどこかに行っちゃおうと思うよ？その時は僕もついて行けるから別にいいけど…。》

「……なあ、みんな…。みんなはどうしたいんや…？」

はやては自分の家族に問いかけてみる…。自分の家族のことなのだから、本人たちの気持ちを聞かない事には始まらない…。

「あたしたちは…。」

「……主、私たちは彼女を…リインフォースを苦しめ続けた闇を破壊したいです…！！」

「確かに『女神の書』さえあれば、問題は起こりません…。しかし…。」

「それだけでは、何の解決にはならないのです…。」

「お前たち……。」

守護騎士たちはリインフォースを救う気満々のようである。家族の満場一致なら躊躇うことは無いと言わんばかりに、はやてがいい表情でミトナに向き直る。

「そう言うわけや、ミトナさん。選択肢はその2でよろしく頼むわ……！」

《……ありがとう……。ところでミランダル君、さっきから喋ってないけど大丈夫かい？》

どういうわけか、みらいはずっと沈黙を続けている。別にさっきの気絶の後遺症というわけでもなさそうでボケ面は晒しておらず、むしろ鋭い刃物の様な雰囲気に戻っていた。

「……なあ、ミトナのじーさん……。やっぱり“長生きは大変”だったのか？」

《……ああ、すごく“大変だったことが分かった”よ……。だからこそ、ね？》

「みらいさん…?」

意味深な会話をする二人に、はやてやなのは、そしてフェイト達は首を傾げた。この二人の会話の意味を察したのは、同じ“長生き”と“死の経験者”達だけだったろう…。

「何でもない、ちょっと改めて決心しただけだ…。」

「そうか…、どっちにしろ反対はしないんやな?」

「当たり前だろうが、家族の望みを叶えずして何が家族か。」

硬く拳を握り、力説するみらい。すると、八神家以外の面々もそれに参加してきた。

「俺も手伝わせてもらおうか?」

「私も手伝うの…!!せっかく仲良くなったばかりなんだし!!」

「私たちも、はやての家族のためなら…!!」

フィーアとなのは、続いてフェイトが加わった。当然アルフとプレシアも手伝う気である。特に家族を失うことの辛さを知ってる分、フィーアとプレシアは人一倍気合が入ってたりする…。『絶対に自分たちと同じ気持ちにはさせない』と…。

「みんな…。ありがとうな…。」

「そんじゃあ、今年やることが決まって一段落したことだし…。夕飯でも作るか。お前ら、食ってくか？」

「「「「お言葉に甘えます（なの）。「「「「

「…新年早々、大きな波乱が始まった…。しかし、当事者達の表情に暗いものは一切無い…。」

第十三話　そういえば、まだ正月迎えて一日目…（後書き）

なのに口クに進まねええ！！

### プロフィール<sub>3</sub>(前書き)

無論、彼のです。



### プロフィール3

名前 マリウス・ミトナ・ギルジット

年齢 享年76歳（本に意識を移してから600年経過）

出身 アルテミア王国

備考 歴代『夜天の主』の一人。リインフォースとヴォルケンリッターの5人を防衛プログラムの呪縛から解き放つために、救済プログラム満載の『女神の書』に自分の意識を宿していた。

その正体はみらいの御先祖様で、アルテミア王国の“三大偉人”である。3人の内の一人ではなく、3人ともミトナのことであったことに対してみらいは衝撃を受けた。『信長と秀吉と家康は同一人物であなたの先祖』と本人に言われたようなものである…。

『大神父』の異名の通り慈愛に満ちた性格をしており、同時に『悪魔の子』と『学神』の通り名に恥じない実力の持ち主。現代のアルテミアの魔法の基礎を造ったのは、『夜天の書』を参考にした彼であり、そのためベルカ式と類似点が多い。しかし、凡庸性と滅茶苦茶加減では彼の魔法が一枚上手。

今は八神家を筆頭に『リインフォース救済作戦』の準備を始める

つもりである。

## 名前 女神の書

備考 夜天の書にそっくりな、リインフォースを救うために丹精込めて造られた魔導書。ミトナが生涯を費やして作り上げたため、基本的に害は無いが性能はロストログア並である。鎖が取れるまでミトナの意識が完全に覚醒することは無かったので、当初の行動の数々は彼の潜在意識によるもの…。

## 機能一覧

転移能力：『夜天の書』がある程度近くにあった場合、即座に転移できるようになっている。ある程度近くと言っても、地球とアルテミアはとんでもなく遠く離れていたりするのだが…。移動のために瞬間移動する時もコレを使ってた。

自衛機能：自分で浮遊したり冗談で済む程度に反撃してくる。主な被害者はみらいとヴィータ。

浄化機能：『夜天の書』の侵食を抑え、尚且つそれをリンカーコアに変化させる機能。これが最も容量を奪って大変だったと彼は語る。

抹殺機能…えらく物騒な名前だが、書のページを半分埋めれる魔力が溜まったらリンカーコアを自動的に発射するシステム。ただし、その時の『夜天の主』が最低の人間だった場合は『夜天の書』に蒐集させず、そのまま主を撃ち抜いて殺すようになっていた…。無論、はやてにその心配は一切必要なかったのでご安心を…。

救済機能…ヴォルケンリッターの思い出をベースにしたリインフォースの媒体部分。防衛プログラムを破壊した後はここに引っ越してもらうつ予定。

戦闘機能…自衛機能では耐えれない状況の時にのみ使うつもりだが、その効果は…。

使用魔法について

【死召詩】…アルテミアの禁呪。刺された、斬られた、撃たれた等の過程をすっ飛ばして“死という結果”を大規模に問答無用で突きつける禁忌。扱いが難しすぎるのでミトナしか使いこなせなかった。

【負感情蟲】…アルテミアの魔法。最大の苦しみをもって相手を殺す惨殺魔法。主に見せしめ専用だったらしい。

余談だが、フィーアはアルテミアの魔法を参考にしたことがあるた

め、似たような詠唱を唱える。

## 第十四話 元旦に詰め込みすぎたよ…

リインフォース side

〽八神家・pm18:03〽

「……負けたわ…。」

「何、初っ端から凹んでるんですか…。」

「子供とは言え女の子にならまだしも…、あなた達にまで負けるなんて…!!」

「…いや、そう言われても……。家事をロクにやらなかったからでしょ…。」

現在、みらいのお言葉に甘えてフィアとテストロッサ家、そしてなのはは八神家の食卓にお邪魔していた。ただ夕飯をご馳走になるだけなのもアレなので、フィアは食事を作るのを手伝ったのだが、どうやら完成した夕飯はプレシアの女のプライドを粉々にしたようである…。

「プレシアさん、あなたの気持ちはよくわかります…。仲間です…。」

「シャル…。」

「残念だがシャル、プレシアさんの場合は俺より腕が低いだけで不味くは無い。ていうか、ちゃんとした食べれる物だ。」

「…はやて〓みらい>ファイア>>プレシア>並>初心者>>越えられない壁>>シャル。」

「酷っ！！！！？」

シャルには悪いけど、当分このネタは使い続けますwww（作者・談）

「しかしまあ…、連邦随一の調理兵（笑）の腕前とはこの程度か…。」

「てめっ！！俺の場合は低レベルの食材でも美味しいもの作れるのが自慢なんだよ！！」

「ふんっ！！だったら今度、勝負だ。お題は、お菓子でどうだ？」

「乗った！！しかし、採点項目に『費用の安さ』も入れることを所望する。」

「許可する。」

「みらいさん、フィア兄。その勝負、私も参加するで。」

日頃の倍の人数がいるためか、八神家の食卓はいつもより賑やかである。その様子を眺めながら、穏やかな表情を浮かべてる人物が居た。

《…懐かしいかい？》

「ええ、とても…。」

リインフォースは、ミトナと過ごしたかつての日々を思い出していた。自分とミトナ、守護騎士の4人、そしてミトナが救い続けた子供達…。あの時は、この場の雰囲気にも勝るとも劣らない賑やかさを誇っていた…。

《どうせならプログラムを壊すのはやめて、侵食作用を抑えるだけにしてずっと旅を続けるかい？》

- - - 実質、不老不死になれるのだ…。防衛プログラムが消えれば暴走の心配は無くなり、主が幸せに死ぬまで寄り添い続け、主が死んだらまた新しい主の元へと旅に出る…。

「ミトナ、本気で思っていないことは言わない方が良いでしょう。60年の時を生きた今のあなたなら、私達の気持ちが分かるのでしょぅ？」

《あははっ…。やっぱり、思い込みってわけでは無かったみたいだね。独り善がりじゃなくてよかったよ。……リインフォース、“自分達だけ”長生きをするというのは本当に…。》

- - - 辛いものだね…。

フイアー side



「わぁ…、アリスちゃんすごい。」

『ミヤア。』

「どうしたの、なのは？……わ、すごい…。アルフもできる？」

「いや、肉球じゃ無理だから…。」

猫アリス（アリシア）が器用に両手でフォークを一本持ちながら食事をしていたのである。やや小柄な体躯には不釣り合いでシユールな光景だが、ほぼ不自由無く食事を続けていた。因みにアリシアが食べてるのは、全員と同じではやて達の手料理である。みらいが猫缶を出そうとしたのをフィーアが全力で止めたのである。

（アリシアにペットフードなんて食わせたらプレシアさんに殺される…！！）

プレシアは、まだアリス（猫）の正体がアリシア（娘）であると感じてないものの、今までの経験からしていずれバレるのは明白なので、発覚した時のために色々必死になっていた…。

（主に『犬食い禁止』とか、『トイレ』とか…。）

「どうしたのフィア…？」

「いや何でもない、何でもないぞフェイト…。」

…一部の者は穏やかに、一部の者は賑やかに、そしてヒヤヒヤしながら楽しいひと時を過ごした。

みらい side

（18：52）

「さてと…。議長、準備整いました…！」

「よろしい…！これより、第28回『八神ファミリー家族会議』を行う…！」

「色々とちょっと待て。」

食事も終わり、出されたお茶を飲みながら一息入れていたら、みらいとはやてが急にこんなことを言い出したのである。しかも、いつのまにかはやては車椅子から豪華な装飾がされた王座のような物に座っていた…。彼女らの家族であるヴォルケンリッターは、どうやら一週間のうちに何度か経験したようで、慣れた動作で議長はやしと向き合った。

《まだ残ってたんだその椅子…。》

「げっ！？ミトナさんのやったんか！？」

《ああ、気になくていいよ。ゴミ捨て場から拾って直しただけの奴だから。》

「…みらいさん？」

「いや、俺は知らないぞ！？親戚が『由緒正しき名家に伝わる王座』って渡してきただけだし！！」

ミトナの所有物だった時点であながち間違っていないが、まさかのリサイクル品…。微妙な気分になるのは仕方が無い…。

「ところで、はやてちゃんが議長なの？」

「そつやで、なのはちゃん。」

「――八神家暗黙のルールその2。『八神家で一番偉いのは、はやて。』」

「みらい、お前……。何か思うところは無いのか……？」

「無い。」

彼の名誉のために言うが、みらいが自宅警備員だから偉くないとかでは無い。むしろ、魔方で作った亜空間で野菜を栽培したり、最近は魚の養殖を始めたので稼ぎは多いくらいである。しかし、この家ははやての物であって家主もはやてである。そんな彼女を差し押えて家のことを仕切るのは間違い、というのが彼の考えである。

（閑話休題）

「では、議長。これからの方針をリストにしましたので、お聞き下さい。」

「うむ。」

「…はやて、なんだか様になってるね……。」

「あの子、将来大物になるわよ…。」

とりあえず転生者から聞き出した情報と、ミトナの説明を踏まえて考え出したこれからの方針をまとめてみた。

- - - 『夜天の書』を完成させる。

- - - 管理局と折り合いをつける。

- - - 転生者の対策。

- - - 防衛プログラムと戦うために戦力増強。

「当分の問題は管理局だな…。」

『女神の書』により、時間はたつぷりあるので完成を急ぐことも無い。転生者も特に脅威にはならないだろうし、あわよくばリンカーコアを奪えるかもしれない。しかし、実際はこの世界にリンカーコアを持つ者は少ないので、最終的に別世界に行く必要がある。そうなると、管理局に目をつけられるのは必須…。

「事情が事情だから、説明すればいいんじゃないのかな？」

「甘いぞ、なのは。組織つてのは規模が大きいほど意見がバラバラだ。全員が全員、リンディ提督みたいに話の分かる人じゃ無いんだよ。当分は、慎重に動かないと……。」

「……なあ、みらい。」

「どうしたフィア？」

フィアがすごく言いにくそうに話しかけてきたのを怪訝に思いながら、聞き返す。

「リンディ提督はともかく、クロノ（執務官）は『夜天の書』のことを知ってるのを忘れたのか？」

「……。。」「」「」「」

……流れる沈黙……、そして……。

「忘れてたあああああああああ！！！！？」

みらいの絶叫に耳を塞ぎながらも、フィーアは昼間の会話を聞いてなかった面々に話す。例の転生者の話を、自分ともう一人の転生者、そしてクロノがそれを聞いたことを……。要するに、限定的にはいえ、管理局員に『夜天の書』のことは発覚しているのである。

ついでにハラウン親子と『夜天の書』の因縁も話した。その話題になった瞬間、リインフォースと守護騎士たちは顔を俯かせた……。

「そうか、あの二人にそんなことが……。」

「ああ……、でもクロノは割り切ってたよ……。あいつは、もう過去に囚われてなんかいなかった……。」

結局クロノにはこっちで分かったことは全部説明し、彼を経由して改めてリンディに協力してもらうことにした。そこで、ふとみらいが気づいた……。

「ん？……そういえば、クロノともう一人の転生者は本局で何を調べてるんだ？あっちでやれることなんてたかが知れてるだろ？」

「……実はな、俺も信じられなかったから言わなかったんだが……。」

「……ファイアは口を開こうとする……、みらいとはやての大切な人たちに……」

「リーゼ姉妹とグレアムおじさんのことなん……っ!？」

「……っ!」「……」

「誰だ!？」

突如、誰かの気配がファイアの言葉を遮ぎり、『ドサッ』という物音がベランダの方から聞こえてきた……。全員、各自のデバイスと武器を構え、唯一戦術を持たないはやてを守るように集う。

「シグナム、ついて来い。他のみんなは、はやてを頼む。」

「おう。気をつけるよ?」

みらいはオルギニスを、シグナムはレヴァンティンを構えながらゆつくりとベランダに迫る……。そして、みらいは銃剣を外に向けな



がらシグナムに目で『開ける』と指示する。

やがて、みらいの合図と共にシグナムが勢いよくベランダの扉を開けた。するとそこには…。

「っ！？いったいどうしたんだ…！？」

「……ミラン…お願い…い…アリ…アを…。」

……傷だらけでボロボロの『リーゼロッテ』が倒れていた…。

## 第十五話 星を従えし亡霊（前書き）

ちよつと、雑だったかもしれないんで後日書き直します…。

## 第十五話 星を従えし亡霊

リーゼアリア side

〈3年前・海鳴市〉

「…クソっ、なんなのよアイツ…!!?」

「どうするのよアリア…?このままじゃ…。」

自分達が敬愛する主人の願いを叶えるため、『闇の書』の主選ばれた『八神はやて』監視していた『リーゼアリア』と『リーゼロツテ』。その二人の監視中にいきなり現れた次元漂流者は謎の襲撃者を撃退し、監視対象を守った。

だが、そのまま居候されては困る。計画にどう影響するか分からないので、二人は彼を排除しようとしたのだが…。

「強すぎよ…。」

「私達、二人掛かりで無理なんて…。」

「……ものの見事に返り討ちにされてしまった…。」

「戦闘技術も一流だったけど…。魔法がやっかいね…。」

「もう意味分かんないわよ、アレ…。」

魔力もほとんど使い切り、変身魔法まで解除してしまい満身創痍である。今、誰かに襲われたら…。

「…見つけたぞ…。」

「「っ!?!」」

「……死ぬ。」

声のしたほうを見ると、いつだか監視対象を殺しにやってきた黒装束の同類だった。二人は何度か奴らを撃退しており、それほど強くは無いが弱くも無いと感じていた。

「…今、戦ったら確実に負けるくらいには…」

「前はよくも邪魔してくれたな…。まさか、グレアム提督の飼猫だったとはな…」

「何故、父様のことを…!?」

自分達の素性をあつさり言い当てたことに驚いたが、それも長く続かなかった…。

「それを貴様らが知る必要は無い。…お前達、やれ!!」

「『ハッ!』」「『ハッ!』」

「くっ!？」

潜んでいた複数の黒装束達が一斉に二人に襲い掛かってきた…。二人は、一瞬覚悟を決める。しかしその時、二人の背後から青白い光が差し込んできた…。

「【十六夜流星群】!!」

「何!？」

……ドゴゴゴゴゴゴ!!

「「ぬわあああ!!」」

「魔力の弾丸!?!なんだこのふざけた濃度は!?!」

突如、どこからともなく飛んできた魔弾に黒装束が次々と蹴散らされていった。何が起きたのかと思い、リーゼ姉妹は後ろを振り向く。

「よう、誰だか知らないが無事かお前ら？」

……先ほど自分達を撃退した、『ミランダ・ラインベルト』が居た。

変身魔法で姿を変えていたため、自分達がさっき彼を襲った人物であるとは思ってないようである。ミランダは若干ぶっきらぼうに安否を訊いてきた。

「え…ええ、お蔭様で…。」

「あ、ありがとう…。」

戸惑いながらも、一応礼を述べる二人。正体に気づいてないなら、それにこしたことは無い。その時、邪魔をされた黒装束のリーダー格が声を荒げた。

「…貴様っ！！何をする！！？」

「黙れ外道共。うちの居候先の女の子だけでなく、道端の女性まで襲う輩は徹底的に滅してくれる！！」

「何っ！？ちよつと待て、我々は…！！」

「問答無用！！【爆砕満月砲弾】！！」

…ミランダルの言葉と同時に、リーダー格が立っていた場所が吹き飛んだ…。

その後もミランダルの猛攻は続き、結局黒装束たちは撤退していった。やがて、ようやく夜の静けさが戻ってきた。

「で？お前達はなんなんだ？耳と尻尾を付けてるところを考えると魔法の関係者みたいだが…。」

「えっと…私の名前は『リーゼアリア』。」

「私は『リーゼロッテ』…。とりあえず助けてくれてありがとう。」

「気にするな。とりあえず、治療もかねて家に来ないか？」

「『え！？』」

まさか監視対象の家に呼ばれるとは思わなかった…。

「あんた居候じゃ無いの？勝手に私達を連れて行っているの？」

「…うちの居候先の家主はな、家族が居ないんだよ……。」



「「……。」」

計画のために事前に調査しておいた内容なので、特に驚くことは無い…無いのだが……。

「今のあいつには通院先の医者と、遺産を管理してくれるが会ってくれない親戚だけなんだ…。だからせめて、あいつの話相手ぐらいにはなつてくれないか？」

序盤はやや悲しげな表情を、後半は苦笑いしながら彼は言ってきた…。そこで、二人は考える。このままコソコソ隠れながら監視するのもいいが、自然と接触しながら監視するのもいいかもしれないと…。

（ロツテ…。）

（了解。）

念話で一言だけ確認しあい、彼の誘いを受けることにした。あくまで計画のためである…、断じて観察対象に情が沸き始めたわけでは無い……筈…。

「じゃあ、お邪魔させてもらうわ。あなたの名前は？」

「『ミランダル・ラインベルト』。アルテミア王国つてところから飛ばされてきた、世間的には次元漂流者つて奴らしい。」

（現在 pm 19：04・海鳴市・住宅街）

（……昔のことを思いだすなんて、これが走馬灯つてやつかしら……。）

リーゼアリアは思い出していた、彼と初めてまともに会話した時のことを……。彼に連れられて、監視対象である彼女に1人の友人として接し始めた時のことを……。

……みんなでお互いのことを語り合った……。

……みんなで彼をからかってふざけた……。

……みんなで彼女が立てるようになったことを喜んだ…。

（今思えば…、血の繋がりが無い家族を持つ者同士で通じる物があったのよね……。）

……グレアムを『父様』と呼ぶ自分達。

……互いを家族と認め合ったみらいとはやて。

「ふっ、これで八神はやてとヴォルケンリッターは安全だな…。」

「もう一匹はどうした？」

「さあな…。だが、今はとにかく八神家に居る“イレギュラー”を仕留めに行くぞ。」

だんだんと意識が朦朧としてきたものの、それでも素手で自分の腹部を貫いた”襲撃者の言葉は聴こえてきた…。

先日引き続き八神家を監視していたリーゼ姉妹だったが、突如

この3人に襲われたのである。不意を突かれた上に中々の実力者で、人数でも不利な二人は徐々に追い詰められていった…。そして、襲撃者のうちの1人がロツテにトドメを刺そうとしたところを庇い、自分が死に掛けていた…。

今彼女は腹部から出血しており、口からも少々血が溢れてきた…。

「…お前らは先に行ってる。今の八神家はマジックトラップだからから気をつけろよ？」

「心配ねえよ。俺がもらったのは『幻想殺し』だぜ？」

「ちっ…、プレデターの武器なんて貰うんじゃ無かったぜ…。」

「つべこべ言わずにさっさと行け。俺は猫姉妹の片割れにトドメ刺したら行く。」

何を言っているのかよく分からなかったが、どうやら自分は殺されるらしい…。それを証明するかのように、最後に残った男がアリアの首を掴んで持ち上げた。

「あぐっ…。」

「さて、八神家のために死んでもらおうか。」

襲撃者は腕を構える、先ほど自分を貫いた突きの構えを…。確実に息の根を止めるためか、心臓に狙いを定めているようである…。

――ああ、これは罰なんだ…。みらいとはやてを騙し、自分の心さえ騙した自分への罰…。

(…でも、せめて最後に…直接…。)

――二人に謝りたかったなあ…。もう一度、彼の姿が見たかったなあ…。

「……おい。」

「なっ!？」

――突如、彼女の耳に響いた音は聴きなれた者の声であり、初めて聞いた口調だった…。

「俺の身内に…何をしている……。」

「何でここにお前が…!？」

――その声は、今最も聴きなくなかったし、聴きたかったものでもある…。

「何を、していると…!! 訊いて、いるんだ…糞野郎がああああ  
!-!」

ドゴオオオン!!

「グおわっ!？」

彼の怒声と轟音と同時にアリアの首を掴んでいた手は離れ、彼女は重力に従って落ちる。しかし、体が地面にぶつかる事はなかった…。誰かの腕が自分を支えていた…。

「おい!!しっかりしろアリア!!」

「…ミ…ラン…。」

…今、最も会いたくなかった彼が…同時に会いたかった彼が…  
八神みらいがそこに居た…。

みらい side

「【我は救済者、我は修復者、我が意志の元に彼の者の傷を癒したまえ】。」

古くから伝わるアルテミアの治療魔法でリーゼアリアの傷口を塞

ぐみらい。どうやら効果があったようで、彼女の顔色がよくなってきた。そして、口を開く。

「…ミラン…、私達…。」

「今は喋るな。治療魔法って言っても応急処置だ…。」

「…でも…。」

「ロツテから雑な説明はしてもらった…。」

「っ!？」

「だから、詳しい説明はあとでもらう…。今は…。」

視線を上げると、さきほどぶっ飛ばした襲撃者が若干覚束ない足でフラフラと戻ってきた。封鎖結界を張ったので手加減無くぶん殴り、空つぽの民家を壊しながら吹っ飛んで行ったのだが…。

「思ったより頑丈だな…。」



「神から貰った『夜鬼族』の肉体を舐めんなよ…?」

「神…、転生者か…。」

「初めましてだな、イレギュラー。とりあえず、その猫を殺すのを邪魔しないでもらえないか?」

そう言ってリーゼアリアを指差す転生者。見た目は黒髪で金色の目をした普通の人間だが、もらった力により尋常じゃない身体能力を所持している…。

「一応、お前の家族を守ってやったつもりなんだぜ?」

「…。」

「そいつら猫姉妹は、過去に囚われた主人の復讐のために八神はやととヴォルケンリッターを利用しようとしてたんだ…。そのために、お前らに近づいて騙してたんだ。」

その言葉に、アリアは俯いた…。もちろん、事実なので弁解するつもりは無い。だがせめて、自分の口で言いたかった…。自分で彼に懺悔したかった…。

「だから何だ…？」

「…はあ？」

「え…？」

みらいの口から発せられた意外な言葉に、転生者もアリアも固まった…。しかも彼は、まるで騙されていたことなど、どうでもよさそうな口ぶりで…。

「その話なら、さつき来る前にロツテから聞いた。『私達は二人にとんでもない隠し事をしていた』とな…。」

「だったら何故!？」

「そんなの簡単だ…。騙してたことを怨んだり憎んだりするより、何か事情があるって信じてやれるほど…。」

「…こいつが大切な奴だからさ…。」

「ミラン…。」

「ついでに、これは八神家全員の意志だ。はやても、詳しいことはアリアの口から聴きたいそうだ。」

まさかの思わぬ展開に焦ったのは転生者である。自分の予定では、猫姉妹を手土産に八神家の信頼を得ることに成功し、イレギュラーを油断したところで仕留めるつもりだったのだから…。

「…しかも、『八神家全員の意志』と言ったか？

「そ、そんな馬鹿な…。はやては何も思わなかったのか!？」

「うちの家族を勝手に呼び捨てすんな。あいつは、ただ何をするにも本人の口から直接聞いてから考えるとよ…。」

「……そんな…。」

「そついうわけだ…、余所者はとっとと帰れ。“俺の気が変わらないうちに”な…。」

そう言ってみらいは、肩にアリアを担いで家に帰ろうとする。だが、転生者は諦めきれなかったようである……。どこからか傘を取り出し、その先端を二人に向けた。

「…はい、そうですかと言うわけないだろ!!」

「……最後の警告だ、帰れ……。」

「黙れ、そして死ね!!この世界を俺達『転生者同盟』の理想に造り変えるために!!」

「……がががががががががが!!」

傘の先端にある銃口が火を吹き、銃弾が放たれた。弾幕はみらいとアリアの二人を襲う……。筈だった……。

「何!?!」

「気が変わった……。アリア、ちょっと待ってる……。」

全ての銃弾が見えない何かに止められたかのように、“宙で静止”したのである。それを余所に、みらいは、そつとアリアを路上に降ろす。そして…。

「…悪いが、今日の俺は……。」

…魔法の効果が切れ、銃弾が地面に落ちたのとほぼ同時に…。

「容赦できそうに無い。」

「な!？」

…目の前に銃剣を振り上げたみらいが居た。

「ふんっ!!」

ドゴォ！！（メキィ！！）

「ぐああつ！！」

今の一撃で左腕を砕かれた転生者……。だが、彼の猛攻は止まらない。足、腰、頭、首、腕……体のあらゆる部分に重たい一撃が加えられていき、体が粉碎されていく……。

「があああああああつ！？なんでだ！？俺の体は『夜鬼』の……！」

「確かに頑丈だが、お前程度の防御力と全く遭遇しなかったわけでもない……。」

「クソっ！！だったら……！！」

- - - 接近戦は不利と感じた転生者は距離を取ろうとするが、逆に絶望してしまう…。

「な、なんだそれは……？」

- - - 300”。

みらいの背後に、無数の光の弾が浮かんでいた…。その数、

「終わりだ、転生者…。」  
【天龍星空連隊】！！」

「く、くそおおお！！やられてたまるかあああああああああああああ  
あああああああ！？」

.....  
.....  
.....

転生者は傘を広げて放たれた魔弾の流星群を防御する。傘が悲鳴を上げながらボロボロになっていったが、段々と腕にかかる衝撃が減ってきた…。そしてついに…。

「防ぎきつたぞ……。ははは……。」

衝撃が無くなり、魔法の嵐が収まったと確信した彼はそつと傘をどける…。やがて、彼の視界に入ってきたのは…。

「容赦はできないと言った筈だが…？」

…自分の目の前に添えられた銃口と、そこから放たれた閃光だった…。



## 第十六話 和解（前書き）

レイハとバルディの破壊と強化の展開は考えてありますのでご安心を…。書くのはもう少し先になりそうですが…。

## 第十六話 和解

リーゼロッテ side

「八神家・みらいが外出して数分」

「外出つてか、進撃だろありや…。」

「封鎖結界張った瞬間に“住宅地壊しながら”進んでたもんね…。」

重傷のロッテから断片的な説明を受けた途端、みらいは躊躇うことなく走り出した。よっぽど焦ったのか、結界も張らずに魔力を漲らせて光弾を纏い始めた時は全員が焦った。

「で…、ロッテ。説明してくれるんだろうな？」

フィーアは、今シャマルに治療されながら安静中のリーゼロッテに向かい合う。それにつられるように全員の視線がロッテに集まり、彼女は一瞬ビクリと体を振るわせた。

しかし、元々アリア以上にみらいとはやてを騙している事に迷いを持っていた彼女は、彼らに助けを求めた時点で多少なりこうなることを覚悟していたが、ここにきて彼女らに全てを告白することを躊

踏ってしまった…。

（何故か“アイツら”は私達の目的を知ってたみたいけど…。それでも父様を裏切るわけには…。）

謎の襲撃者（転生者）はどういうわけか自分たちの目的を知っており、それを阻止するために襲ってきたようなのだ。みらいとはやての知り合いって訳でも無さそうだったので、向こうの目的は結局分からず終いだったが…。

「なあ、ロツテさん…。私らに隠してたことって、なんや？」

「っ…、はやて…。」

ところが、唐突に口を開いたのははやてだった。

「確かに2人が私らを騙してたり、欺いたりしてたってのは正直シヨックやったわ…。」

「…。」

「でもな？それだけでロクな話も訊かずに絶交するほどの薄い仲で

も無いやろ？」

「……！！」

「だから、話してくれへんか？……どんな事情であれ、私は受け止めてみせる。」

「……分かった、全部話すよはやて……。」

もうこれ以上、この小さな友人を騙すのが耐えなくなり、彼女は洗いざらい吐くことにしたのだった…。

転生者 side

く八神家付近、半径50メートルく

「ぐあああああああああああ！？……な、なんで『幻想殺し』が……！！？」

「本当に魔法なのかコレ！？」

あの場所に残ったリーダー格がフルボッコになってるとも知らず、  
2人の転生者は目的地の近くまで辿り着いていた…のだが……。

「く、くそっ！！もう一度…『ドパアアン！！』ぎゃあああああ  
ああアスッ！？」

2人の行く手を無数の光弾が塞いだのである。おそらくリーダー  
格が言ったマジックトラップだろうと思い、あらゆる異能を打ち  
消す『幻想殺し』を持ってして消滅させようと試みたのだが…。

「腕が変な方向にiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！！？」

全くもって意味を成さないのである。右腕で触れるたびに、光弾  
は爆弾のような衝撃波を生み出し、彼を襲い続けた。しかも、拳句  
の果てに腕をポッキリやってしまったようだ…。

「痛ええええええええええ！！？オイ！！俺じゃ駄目だ、お前のプラスマキ  
ヤノンで……オイ……？」

宇宙人の科学装備を持った相方に頼もうとしたのだが返事が無い。  
怪訝に思い後ろを振り向くと…。

「…死ぬ。」

「…ズタボロになって路上に捨てられた相方と、自分達の“リーダー”殴りかかってくる亡霊が居た。」

ファイア side

〈再び八神家〉

ロツテが事情を説明し始めた最中、突如響いた炸裂音と誰かの悲鳴が止み、静かになった。何が起きていたのか分からず、不思議そうな顔をしていたお子様組だったがフェイトがファイアに尋ねてきた。

「ファイア、さっきまで何が起きてたの？」

「襲撃者がみらいのマジックトラップに掛かったんじゃないか？」

「っ！ー！やばい！ー！ファイア、奴らの中に魔法を完全に無効化する奴が…！ー！」

フィーアの言葉に反応したロツテが焦燥感に駆られた。このままでは奴らがここに来るのではと…。しかし、フィーアはそのことに冷や汗ひとつかかなかった…。

「大丈夫だ。あいつのトラップは『アンチ・アンチマジック・マジック』だ。」

「…早口言葉？」

「違うわアホ。」

「『魔法を“潰す術を潰す”魔法』…ってことかしら？」

「流石プレシアさん、そういうこと。」

先ほど転生者が酷い目に遭わされた魔法の正体は案外簡単なものであり、魔法の膜で空気を限界まで“圧縮しただけ”のものである。限界まで圧縮された空気は、解放された瞬間爆弾よろしくな勢いで拡散し、強烈な衝撃波を生む。空気自体は自然の物なので、能力が反応することも無い。

- - - 『幻想殺し』は魔物（衝撃波）の封印（魔法の膜）を自分で破ってるだけなのだ…。

「よしんばココに来れたとして…、お前は“この面子”と戦えるのか？」

- - - A A A 級の魔導師が2人と、使い魔が一匹。

- - - オーバーS級の天才が1人。

- - - 歴戦の猛者である騎士が4人。

- - - ロストロギアとそれに匹敵する魔導書に宿りし2人。

- - - 異世界の現役将軍が1人。

- - - 現在出撃中の元近衛銃士1人。

「…無理…。」

今更ながら、今の八神家に集っている面々は一国の軍隊すら滅ぼせそうな戦力を有していた…。魔法が通用しないからどうこうなるレベルでは無い。

「そうになると、總統は私やな…。八神帝国総帥、はやて總統や！！」



「「「「「……。「」「」「」「」

「主……。」

「流石に何というか……。」

「むしろ何て言えばいいんだよ……。」

「反応に困ります……。」

はやてのボケに返ってきたのは微妙な空気と沈黙だった……。うん、すべったね……！！

「……聞かなかったことにしてや……。」「

「お、馬鹿やってる内に終わったようだな……。」「

「……がちやつ

「ただいま。」

玄関の扉を開ける音と、みらいの声が響いた。アリアのことが心配だったロッテは真っ先に2人が居るであろう玄関へと向かって行った。

するとやはり、アリアを背負いながら何かを引きずってきたみらいが帰ってきてた。どうやら全部片付けたようである。だが、いくら顔色が良くなったとは言えグッタリしたままのアリアを見て、ロッテは思わず叫びながら駆け寄った。

「アリア!!」

「大丈夫だ、命に別状は無い。けれども腹に穴空けられたからな……シャル!!」

「はい!!」

アリアをシャルに託しながら、みらいとロッテはリビングへと戻って行った。

みらい side

「『闇の書』への復讐、か…。」

「ずっと黙っててごめんなさい…。」

アリアをベッドで休ませながら、残りのメンバーはリーゼ姉妹から全てを聞いていた。二人の主人である『ギル・グレアム』提督が、はやての親戚を名乗っていた『グレアムおじさん』と同一人物であることと、彼が『闇の書』に対する復讐のためにははやてを利用していたことを…。

…その告白に対し、みらいとはやての反応はと言うと…。

「まあ、家族の望みは叶えなくなるものやしな…。」

「しかたないっちゃ、しかたないか…。」

「へ…?」

「……それだけ…?」

――軽かった。

煮るなり焼くなり好きにしてもらうつもりだったアリアとロツテは、拍子抜けして間抜けな声が出た。

「主はやて、みらい殿！？そんなのでいいのですか！？」

これに真つ先に反応したのはシグナムだった。自分たちの大切な主であり家族である２人が、こんなにアツサリとした態度を取っているのが納得いかないようである。

「そう言うてもなあ：確かにグレアムおじさんと、アリアさんとロツテさんのことはショックや：。けど、まだ何も起きてないんやで？それに、真相を自分達から教えてくれたことの方が大事や。」

「それにだ、２人とも。俺たちに対する、お前らの今までの態度も全部演技だったのか？」

――共に自分たちのことを語り合い、一緒にふざけ合い、皆ではやてが立てるようになったことを喜んだあの日々は…

「それは違う！！……けど私たちは……」

「だったら充分だ。とんでもない隠し事とやらも、まだ何とでもなる内容だったしな……」

どうやら2人は、本当に気にしていないようである。それでも、やっぱり後ろめたいものがあるようで再度訊いてくる……。

「……本当に、許してくれるの……？」

「ああ、もう気にするな。はやても言ったが、まだ何も起きてないんだから……」

「そうやで2人とも。私らとの縁は、そない簡単に切ることはできないで？諦めや。」

「……ミラン、はやて……。ありがとう……」

もう二度と2人の前に顔を出すことも出来なくなると思った分、一気に安心感に満たされたリーゼ姉妹。たまらずロツテは涙を流した。アリアは意地を張って堪えてるようだが、それを知ってか知らずかみらいとはやてが何かを思い出した。

「あ、そういえば…。」

「忘れてたな、みらいさん…。」

「「？」」

みらいとはやての2人は、一度互いに目を合わせ頷きあい視線を  
リーゼ姉妹に再度向ける、そして…。

「「明けてまして、おめでとう。 “これからもよろしく” お願いしま  
す。」」

…結局、アリアは泣いた。無論、嬉し泣きである。

フイーア s i d e

(さて…、どうしたもんかね?)

八神家の面々とリーゼ姉妹が話し合ってた中、フィアとプレシアは別室でみらいが引きずって来たモノと対話を終わらせたところだった。

「『転生者同盟』、こりゃまた安直な名前を…。」

「頭が残念なのは確かだけど…、物騒なのは変わらないわね。」

…黒羽製の鎖で縛られた転生者トリオが転がっていた。

「とりあえず、『夜天の書』は『グレアム』提督と話を付ければ大丈夫そうだな…。いつかの誰かさんほど狂ってないらしいし…。」

「それ、私のことかしら？」

ロツテ曰く、グレアム提督は確かに『夜天の書』に復讐心があるものの、幼いはやてを犠牲にすることに罪悪感を感じていたそうだが何も失わずに済むプランがあるのならば、迷わず飛びつくだろう…。

管理局全体も、長年の悩みの種である『夜天の書』の被害がなくなる可能性があるのなら、そんなに目くじらを立てることも無いだろうし、グレアム提督がそれなりに手を回してくれそうだな。ハラオ

ウン親子もクロノの態度からして大丈夫だろう…。

「クロノには明日、朝一で連絡を取って説明するか…。その後にはリゼ姉妹経由でグレアム提督と話をつければ問題ないな。……当面の問題はこいつらか。」

そう、転生者である。対話（拷問）を終えた彼らは現在沈黙しているが、喋ってくれた現実は何介極まりなかった…。

――遂に我慢できなくなった転生者たちが、手を組んで世界を“修正”しようとしていると言うのだ。

彼らの言う“修正”とは、勿論『原作の展開』のことである。予定より半年近く遅く始まった上に、彼らの知らない展開が次々と起きる中、とうとう自分たちの手で世界を戻すと決めたそう…。

「『怒りも悲しみも乗り越えてこそ感動があるんだ！』とぬかした馬鹿の右腕を“踏み千切った”俺は悪くないと思いたい…。」

「……そこはノーコメントよ…。でも、さっきの言葉は認められないのは確かだね…。」



――“感動”ねえ…。他人の人生をなんだと思つてやがるんだ？

部屋の空気が途端に重くなった…。フィアが殺気を滲ませ始めたのである。

「人の体験や記憶を聞いて何かを感じるのは別に構わないさ…。ただ、それを娯楽扱いされて喜ぶとでも思つてるのかい？何故、君たちの要望に合わせた生き方をしなきゃいけない？何故、悲しい思いをしなきゃいけない？僕たちは“見世物”や“語り部”の為に生きてんじゃ無いんだよ？」

「フィア、例の口調に変わつてるわよ…？」

「おつと失礼。つつい殺意が…。」

「殺るなら子供たちが居ないところにしてちょうだい…。」

プレシアが恐ろしいくらい低い声でそう言ってきた…。

「あ、殺すのは反対しないの？」

「私の娘が…アリシアが死んだことと、フェイトの経験した全てを“物語の展開”で片付けられて許せると思ってるの？」

「それもそうだな…。けれど、こいつらは管理局に引き渡すのでしょうか。下手すると転生者対策に管理局の協力が必要になるかもしれないし…。」

“同盟”と言うだけあつてか規模もそれなりのようで、場合によつては人手が足りないかもしれない…。幸か不幸か、管理世界でも転生者による被害は出ているので、改めて脅威（転生者）を送りつけて詳細を教えたら、案外簡単に増援を寄越してくれそうだ。

「なににせよ、何事も明日からか…。今年も忙しくなりそうだ…。」

そう言つや否や、彼は転生者3人を亜空間魔法による別の空間に放り込んだ。因みに、右腕を踏み千切られたのは『幻想殺し』の男である。故に、今の彼はただの片腕のチンピラである。

「さて、戻りますか。」

「ええ、そうね。」

――2人は皆の居るところへと戻っていった。

## 第十七話 怒りのダークホース（前書き）

ネオクリムゾンさん、オリキャラありがとうございます。彼らは明日あたりにでも出します。

今日は、実は怒らすと一番怖い彼女の話…。

## 第十七話 怒りのダークホース

グレアムside

「1月2日・時空管理局本局」

「……これは、どういうことかね……？」

「え、え」と……。

「あはは……。」

管理局の重鎮である『ギル・グレアム』提督は自分の部屋で驚愕した。使い魔であり、娘たちでもあるリーゼ姉妹に呼ばれて来てみれば、そこには思わぬ珍客が居たのである……。

「いやあ、こうして会うのは初めてやなグレアムおじさん。」

「……。」

…『夜天の主』と『銀河の守護霊』が、そこに居た…。

はやてside

「…そうか、全て知ってしまったのか……。」

「はい。」

ここに来た粗方の理由を説明され、自分の企みがはやてに知られ  
たと理解したグレームは少々落胆したようである。

「軽蔑するかね…?」

「…確かに、最初に聞いた時はショックでした……。けど、まだ誰  
も傷ついてないし、誰も悲しんでませんやん?」

「…。」

「せやから…、これまでのことは水に流します。幸い、グレアムおじさんの因縁である『夜天の書』の問題も片付きそうですし。」

「…はやて君、君はそれでいいのかな…？私は、君たちのことをずっと欺いてたのだよ？」

自分のやったことへの罪悪感故か、なかなか自分の気持ちに決着がつかないようである。そこら辺はリーゼ姉妹と一緒にだなど、はやてとみらいは内心苦笑した。

「さつきも言っただけど、まだ何も起きてないし誰も傷ついてないんやから別にいいんです。それに…。」

「…？」

「アリアさんとロッテさんの二人と友達になれたのも、『夜天の書』のみんなと家族になれたのも、大好きなみんなと今日という日を迎えたのも、全部グレアムおじさんのおかげやったんやから…。」

「はやて君…。」

「グレアムおじさんが遺産の管理をしてくれたり、アリアさんたちに私を守らせたのは計画のためやろうけど…、それでも今日まで私が生きてこれた理由に変わりないんです。私にとってグレアムおじさんは、大切な恩人に他ならないんです!!」

「…私などには、勿体無い言葉だな……。ありがとう…そして、すまなかった……。」

グレアム提督はようやく肩の重荷を降ろすことができたようだ…。彼の表情は、心なしかスッキリしたものになっていた。

フイーア side

〈アースラ艦内・艦長室〉

「まさか、別れてからたった1日でここに戻るとは思いませんでしたよ…。」

「まったくよ…。しかも、まさか『闇の書』…今は『夜天の書』ね。それに関する要件なんて…。グレアム提督から話を聴かされた時な

んて本当に驚いたわよ……。」

みらいとはやてに同行してきたファイア。グラム提督と和解した2人は、今後のための下見を兼ねた『クロノ』と『レスター』、そして正月早々クロノにコキ使われた『ユーノ』を連れて先に家に帰った。能力上、基本的に本局に入れない彼はアースラに直行し、『夜天の書』に関するこれからの計画のためにリンディ提督と相談をしに来ていた。

結果、全面的に協力してもらえることになりそうだ。やはり、グラム提督が関わってることが一番大きかったようである。アースラの艦長室に着くころには話を通ってた…。

「ところでクロノから聞きましたが…、よろしいのです？」

「…あなた達の家族を奪った『夜天の書』を救うような形になって…。」

「息子であるクロノに割り切れてて、私が割り切れてないわけ無いでしょう？……でも、確かに今回の件に関わりを持った時点で運命染みた物を感じるのとは否定しないわ…。」

リンディのそのいつも通りの雰囲気になんか安心したファイア。もしも彼女の雰囲気にも黒いものが混ざっていたら即効で2人を連れて逃げるつもりだったが…。



「それを聞いて安心しました…。では、またよろしく頼みますよ？」

「ええ、任せてちょうだい。」

――『夜天の書防衛プログラム』の破壊計画における監視と協力。

――転生者による妨害対策。

この二つが、フィアの提示した要求である。一つ目は、こちらの事情とミトナの魔法技術の一部提示したら許可が出た。勿論、破壊するためとは言えロストログアを所持し、尚且つ完成させることに変わりないので野放しは論外である。それ故、監視が付くのは当然なのでフィアは特に気にしなかった。むしろ、場合によっては手伝ってもらう。上層部は、あえて『夜天の書』と因縁があるハラオウン親子に任せようだが、かえって好都合だ。

そして、二つ目は言わずもがな…。もはや、こちらのことなど御構い無しの迷惑集団のことである。万が一、奴らの規模が軍隊クラスだと流石に厄介なので数は多いにこしたことは無いのである。

「あなた達の家に居る人達で十分な気もするのだけど…？」

「……天才とか大天才とか騎士とか銃士とか軍人とかロストロギアとか……」

「少数精鋭というのは遊撃や突撃には最適ですけど、防衛には限界があるんですよ？……ミッドチルダで防衛戦は今まで無かったんですか？」

「大規模な物は……」

基本的に連邦の戦い方は、フィアの様な化物クラスが先陣を切って敵陣を掻き乱すだけ乱し、一般兵が取りこぼしを始末しながら徐々に進撃するというものである。防衛線も同じようなものであり、精鋭部隊が敵の主力を削るために思う存分暴れ、取り逃がした敵は一般兵が数の暴力で始末するのだ。

戦いは数で決まらないと言うが、限度があるのだ。

「もし一人でも防衛線を抜けてしまったら犠牲者は一人とは限らないんです。一人の敵兵は百人の民間人を殺すことだって出来るんですから……」

「……分かったわ。その提案も全面的に協力するわよ……」



「ん……？……あゝあ、なんてこったい………え？……ハア！？それはヤバイ！！すぐ帰る！！」

徐々に顔を真っ青にしたフィーアが慌てて携帯の電源を切り、立ち上がる。その尋常じゃない雰囲気にはリンディは怪訝な表情を見せる。

「どうかしたのかしら？」

「……一番怒らせたくない奴が怒ったらしい……。」

……なのはが『魔王』なら、あいつは『破壊神』だ…。

みらい side

（海鳴市・公園にて・先ほどの電話の数分前…）

「お久しぶりです、みらいさん。」

「しかしまあ、久しぶりだなユーノ。半年振りか？」

「はい。なかなか連絡できなくてスイマセン…。」

「いや、別に気にするな。」

本局からの帰り、先遣隊を兼ねたクロノとレスター、そしてユーノはみらい達と合流し八神家に向かっていた。そのことを家に居たシヤマルに連絡すると、その帰り道の公園にシグナムとフェイトがいるらしく、ついでに一緒に連れ帰ってきてほしいとのことである。

ちなみに、何をしているのかと言うと…。

「あゝ、クロノ君？ちゃんと結界は張ってるから大目に見てや…？」

「今回はともかく、今後はちゃんと許可を取ってくれ…。管理外世界で無闇に魔法の行使をすることは禁じられている。ましてや…。」

…  
… “模擬戦”なんて論外だ…。

「スマンな、あのバトルジャンキーにはキツク言っとくからな…。」

「いや、あなたも同類でしょうみらいさん…。」

初めて会った時の彼は、ジュエルシードを渡す代わりにフィアとの試合（死合い）を求めたのである。現在も、家族の目を盗んではシグナムとの模擬戦を楽しんでいる。

「…なるべく自重する。ところで、シャーマン三尉だったか？」

「はい。レスターでいいですよ。」

《御無沙汰です、みらいさん。》

「お、久しぶりだなリリア。」

話題を変えるためにレスターに話しかけたみらい。彼に同行してタリリアも会話に加わる。

「ふむ…。確かに、お前は平気そうだな…。」

「え？…ああ、“転生者の割には”ってことですね？」

「うむ。気を悪くしたのならスマン…。」

「いや、転生者が全体的に悪質なのは事実ですからね…。昨日も一人戦う羽目になりましたけど、やっぱり性格がちょっとアレでした…。」

《二度と動けなくしてやりました。》

彼が転生者の一人だというのは、はやてとユーノを含めたここにいる全員が知っている。しかし、彼は断然まともな人間性を持っており、ユーノとは初対面にも関わらず仲良くなれたそうだった。

「ところでクロノ、そっちで何か判ったことはあったか？」

「ほとんど君達が調べたことと一緒にだ。しかし、『転生者同盟』か…。最近、ミッドチルダでの襲撃が減ったと思ってたら地球に集まってきたようだな…。」

「これからも厄介なことが続きそうだな…。だが何にせよ、協力してくれて感謝する。」

「気にすることは無…。」ドゴオオオオオオオン！…！「ーっ！？何

だ!？」

クロノの言葉を遮る様に爆音が鳴り響いた。気づけば話してる内に目的地の公園に着いており、丁度結界の中に入ったところだったのだが、音のした方を見ると…。

「すまん、テストロッサ!!大丈夫か!？」

「は、はい…。どうにか…。」

「本当に大丈夫かい!？」

モクモクとしていた砂塵が晴れると、そこには地に倒れ伏したフェイトとそれに駆け寄るシグナム、さっきまで結界を張ってたアルフの姿があった。2人ともバリアジャケットとデバイスを展開しているところからして、模擬戦中にシグナムが加減をミスり、半ば本気でフェイトをぶっ飛ばしたようである…。

「あの馬鹿…、【紫電一閃】使いやがったな?…おいコラ、シグナム!!何してやがんだ!!」

「っ!!みらい殿、主はやて!?!いや、そのこれは…。」



シグナムは弁明しようとするが、言い訳のしようが無い。シグナムにとってフェイトが予想以上の実力者であり、ついつい熱くなってしまったのだろうが、それにしっただてやり過ぎだ…。

…そして、ユーノが気づいてしまった…。

「あれ…？フェイト、バルディッシュは？」

「え？……あ、ああああああ！？バルディッシュうつうつうつ  
！！」

「「「「あ…。」」」」

…シグナムの攻撃に耐えきれず、粉碎されたバルディッシュが居た…。

「シ、シグナム……！！！」

「何してるんやああああ！？さっさと謝りいー！！！」

「ほ、本当にすまなかったテストロッサー！！！」

八神家の三人の顔面は真っ青である。特に、自身の相棒（武器）の大切さをよく理解している戦士2人はなおさらで、シグナムは綺麗な土下座を決めている。

しかし、やはりフェイトは涙目である。プレシア経由で、このバルディッシュの大切さを聞いたあとなので、一段とショックが大きかったのである…。

「おい、フェレットもどき。お前には直せないのか？」

「誰がフェレットもどきだ！……コアは無事みたいだけど、あそこまで本格的に壊れてるとなると僕じゃ無理だよ……。」

「幸い、この世界にプレシアさんがいるなら平気じゃないか？」

……すでにそこは、カオスな世界が展開されていた…。

《そこに直れや巨乳ピンク…。》

「「「……。」」」

「……混沌具合はいつもより5割増しのようだが…。」

「……レスター…?」

「いやいやいやいや俺じゃない俺じゃない!!」

「じゃあ…、誰なんだ？」

《バルディッシュさんとの半年振りの再会をよくもまあこんな形にしてくれたなあ…ええ、おい？》

いきなり公園に響いた声。その声は、背筋にゾクリとするものを感じると冷たく、低い“女性”の声だった…。発信源は“レスターの右腕”…。

…ファイアの相棒、サポートAIの『リリア』だった…。

「り、リリア…さん…?」

《ちょっと『ガデラーザ』借りますよレスターさん。》

「え…? いや、ちょっと…。」

《貸せつつてんだろ糞ガキ。》

「イエス・マムツ!!…って、うわ!? GNファンング全部使う気で  
すか!?!」

言うや否や、半ば強制的にレスターのデバイス『ガデラーザ』を  
展開し、ありったけのGNファンングを射出するリリア…。既にコン  
トロールも奪ったらしい…。

…後に彼らは知ることになる…。腕時計サイズである、小さな  
彼女は…。

「み、みらい殿!? 彼女は何者なんですか!?!」

「あれは『リリア』って言ってフィアの相棒兼部下!! あいつ曰  
く、そんじょそこの魔導師よりよっぽど強いんだとっ!! あ、そ  
ういえばバルディッシュとすごく仲が良かったらしい…。」

…とてつもなく強大な存在であると…。

《覚悟しやがれボケナス…。》

「ちょ、落ち着いてリリアさぎゃあああああすっ!?!?」

「レスタあああああ!?!?」

(口調が違いすぎる!?!?)

っく。

## 第十七話 怒りのダークホース（後書き）

ちよつとギャグテイストになりました…。レイハの破壊はちよいシリアスになりますけど…。

第十八話 日頃の？いえいえ積年ですよ？（前書き）

連続投稿！！新キャラは次回に…。



第十八話 日頃の？いえいえ積年のですよ？

みらい side

海鳴市・公園にて

《こおおおのおおおおやあろおおおのおおおお  
おお！！》

「うわあああああああああああああああああああああ  
あ!？」

「お、落ち着けええええ！」

現在、公園は阿鼻叫喚の地獄絵図と化していた…。久々に会えたバルディッシュが粉々にされており、怒りの化身となったりリアが容赦なく破壊活動を行っているのだ…。

彼女は今、レスターから半ば強奪した1Mサイズの『ガデラーザ』を乗りこなしており、ビームキャノンを連射しながらシグナムと止めに入ろうとしたみらいを襲っていた。

《脳粒子波同調…。》

「お前脳みそ無いだろ!？」

《細けえこと気にしてんじゃねえよ…、GNフアング射出をする！》

さらに追い討ちをかけるかのごとく、リリアはGNフアングを射出した。しかも“全部”…。

「……明らかに、持ち主である俺より使える数が多いんですけど？俺ってまだ10機前後が限界なのに、リリアさん100機超えてるよね…？」

「なあなあ、レスターさん。あれって『ガンダム00』の『ガデラーザ』？」

「…ん？そうそう、かませ犬とか言われてるけど多分最強のMA『ガデラーザ』。」

「なかなか、ええ趣味してるやん。」

「それほどでも……あれ……？」

「……何故はやてが『ガンダム00』（前世の世界のアニメ）を知ってるんだ？」

「え？…去年から普通に放映も上映もされとったで？」

「マジで？…まあ、いいや。今度、長々と語ろうか…。」

「バッチコイ！」

前世ではロボットアニメ好きの少年だったので微妙な謎より、久々に語れる相手に会えたことが嬉しかったのでそれ以上気にしなかったレスターだった…。

不意に視線を戻すと、さらなる修羅場が目に入ってきた…。

「レヴァンティン！！」

《シュランゲフォルム。》

「【飛竜一閃】！！」

――ガガガガガガン！！

「カートリッジ装填！！」

（ガチャン！！）

「【十六夜流星群】！！」

――ドドドドドドドドドド！！

シグナムとみらいが二人掛かりで必殺技を放ち、ファングを次々と撃ち落していった。しかし、二人の表情は険しい…。

（（思ったより当たらない…！！））

確かに撃墜しているにはしているのだが、いかんせん予想より攻撃が当たらない。3機墜とすつもりで放つと1機しか墮ちなかった…。

《やってくれるじゃねえか…。流石にフィアが一目置くだけあるってか!―!》

「頼むから口調だけでも戻してくれない!？」

《だが断る!―!》

言うや否や、全てのファングが上空に集う。そして、その銃口と刃を2人がいる真下へと向けた…。

《堕ちるがいい!―!この戦闘馬鹿共が!―!》

「くそっ!―シグナム、とにかく土下座しろ土下座!―!」

「さっきやりました!―!」

…オワタ ¥(＾Ｏ＾) /

覚悟を決める暇も無く、リリアの指令により2人の元に飛んでいくファングの大群。その時…。

「**【炎翼砲門】！！**」

ズ  
---  
...  
---

! ?

《ちっ！！邪魔を…！！》

顔を青くした救世主が現れた。

ファイア  
side

(二、怖えええええええええええええええええ！?)

救世主は完全にビビっていた。相棒であり、上司である彼でさえリリアがここまでキレてるところは初めて見た。何度か喧嘩したことはあったものの、これほど凄まじいものではなかった。

（まあ、帰ってきたそうそう仲のよかったバルディッシュがアレじやあ…。）

そう思いながら粉碎されたバルディッシュに目をやる。コアは無事だったからよかったものの、やはり軽い問題ではなさそうだ…。

「ファイアー!!」

「おう、フェイト。とりあえずバルディッシュは壊れてないか？」

「ちょっとAIがフリーズしてるけど、少ししたら戻ると思う…。」

「そりゃよかった…。もしも再起不能になってたらアイツ…。」

…シグナムを殺してたかもしれない…。

「そ、そんな筈…あるかも…。」

「お前もお前だ…、模擬戦で無闇に本気出すんじゃない!!」

「…はい。」

軽い説教を済ませ、リリアに向き合うファイア…。リリアの方は、狙いをファイアの方に変えたようで、空中のファングが全部こつちを向いていた。

「とにかく、早くバルディッシュを起こせ。今のリリアを止めれるのはソイツの言葉だけだ…!!」

「う、うん…!!」

「クロノ、ユーノ!! 結界を張り直せ!! レスター、ガデラーザには悪いがちょっと傷物にするぞ?」

「了解!!」

「了解!!…なるべく優しくしてやってください……。」「

「今のバルディッシュよりはマシな状態にしとく!! じゃ、逝って



くる!!」

――“不死鳥”は“破壊神”の元へと駆け出した。

リリア side

《来やがったな!! フィーアああああ!!》

「ちょっと待て!! 本当にお前リリア!？」

《細けえことは気にすんじゃねえ!! GNキャノン発射!!》

「っ!! 【黒羽・溜め無し殲滅妖光】!!」

――ドゴオオオオオン!!

問答無用で放たれた閃光をフィーアは同等の威力を持った閃光で迎撃する。互いの光線がぶつかり合い相殺される前に、二人はすで

に動いていた。

《GNファングー!!》

「【舞え、黒羽】ー!!」

二人の言葉に答えるかのごとく、空を『鋼の牙』と『漆黒の羽根』が埋め尽くした。そして…。

《日頃の鬱憤…、晴らせていただくー!!》

「上等ー!!【速射弾頭・参式】ー!!」

…ズドガガッガガガガガッガガガガ!

無数のGNファングと、黒羽により造りだされたミサイルの大群がぶつかり合った。互いの破壊の嵐は衝突するたびに爆発を生み出し、昼間にも関わらず空をさらに明るくした…。

「…おい、フェレット。」

「余裕ないからスルーするけど…、何？」

「ジュエルシード事件の時もこんなだったのか…？」

「…手加減してくれてたみたいだ…。」

「……そうか…。増援、呼ぼうかな…。」

既に結界の負担がやばくなってきたにも関わらず、2人の戦いは終わる気配が全く無い。否、規模的にはもはや戦争に近い…。

「おらおらおらおらおら【炎翼砲門・機銃式】！！」

《痛てっ！！…あああたまにいいいい響くんだよ！！叫んではかりでええ！！》

「叫んではっかなのはお前だ！！」

次々と建物が吹き飛び…というか公園の面影がなくなっていく。結界の中では無かったらと思うとゾツとする。何度かクロノ達のところにも流れ弾が跳んできて肝を冷やした…。

しかし、バルディッシュとフェイト達がいるところに流れ弾が一発も行っていないのは、流石というべきだろうか…？

「いい加減頭冷やせ！！これ以上やったら死人が出る！！」

《聞く耳もたん！！周りなどどうでもいい…、私は戦う！！己の意思で！！》

「…Mr・ブシドー？」

「リリアさん、実は遊んでる…？」

終わりが見えなにかに思えたこの戦い…、それは唐突に終わった。

…【止まれ】。

《な!?!》

「っ!?!体が、動かない!?!」

突如響いた声…。その言葉の通りにフィアとリリアはおろか、黒羽とGNフアングすら凍ったように動きを止めたのである。

何が起こったのかまるで理解できない面々であつたが、すぐに謎は解けた。

《まったく、騒がしいと思ったら皆して何してるのさ…?》

「将…、またお前の悪い癖が原因だそうだな?」

…ミトナ（本）と、それを腕に抱えたリインフォースが居た。

ミトナ side

「改めて申し訳なかった、バルディッシュ…。」

《いえいえ、お気になさらず。むしろ、マスターである彼女を守りきれなかった私に非が…。》

《そんなことはありませんよバルディッシュさん。大人気ない彼女が悪いです。》

「お前もだ馬鹿野郎…。」

バルディッシュのフリーズも解けたのでリアの機嫌（口調）も元に戻り、平穏が戻った。直接戦闘に巻き込まれた3人と、結界を張っていた2人は肩で息をしていた…。幸か不幸か、序盤でぶっ飛ばされたレスターは比較的マシな被害で済んだ…。ガデラーザが少々ボロボロになったが……。

ミトナの魔法（詠唱無しのチート）により、戦闘は強制終了になった。聞くところによると、二人は散歩中だったらしい。はやて達が本局に行くときには、守護騎士達も含めて全員でついて行こうとしたのだが『夜天の書』自体をよく思っていない人間も多いらしいので地球で待機していたのだ。

「そして結界の気配ができてみたら、お前たちが暴れていたということだ…。」

《まだ、その“戦闘症候群”治ってなかったんだね…。いつそ治療プログラムでも造ろうか？》

「ぐう…何も言い返せん……。orz」

一歩間違えれば友人が悲惨な目に遭ったかもしれないこともあり、ミトナとリインフォースの説教は長かった…。みらいとはやての御仕置きと違い、この説教は精神的につらいものがあると経験者は語る…。

《ところでバルディッシュ君にフェイトちゃん。もしよかつたら僕が修理しようか？》

《なんですと？》

「え？いいんですか？」

《一応、プレシアさんにも許可は取るつもりだけど強化もしてあげるよ。最近、何かと物騒だし…。》

こうして済し崩し的にバルディッシュの修復強化が決定した。様々な魔法を理解し、根本が全く違うアルテミアにベルカの魔法を普及させた彼なら、バルディッシュを託しても問題無いだろう…。

「ありがとうございます。でも、一応母さんに訊いてみますね。」

《うん、待ってるよ。あ、ついでになのはちゃんのレイジングハー  
トも強化しておこうかな?》

- - - ようやく収束した大騒動…。しかし、新たな波乱はすぐそこ  
まで来ていた…。



第十九話 そいつは現れた…（前書き）

彼の感じはこんなんでいいですか？

## 第十九話 そいつは現れた…

??? side

く海鳴市・とあるビルの屋上く

(…なんだありや……。)

彼は今、街のビルの屋上である光景を眺めていた。その光景が繰り広げられている場所は、彼の立っている場所から大分離れているが関係ない。この黒髪の少年の能力を持ってすれば、“地球の裏側から”でも覗けるのだから…。

(イレギュラーの連れな時点で警戒しておくべきだったか…。あの腕時計、リリアとか言ったか?)

さっきから見ているのは、激昂して破壊の限りを尽くしているリリアである。

(神に力を貰った転生者よりよっぽど危ないじゃねえか…。あのイレギュラー2人と魔導書にしたってそうだ。実際に、あいつらの手によって何人の転生者がやられたことやら…。)

能力を駆使してずっと観察を続けていくうちに、例の2人がいかに驚異的かよく理解した。胡散臭い神により授かった能力を扱う転生者を、彼らはもう何人も潰しているのだ…。もともと、この少年は『転生者同盟』と訳あって敵対してるので、あえて好都合だったか…。

（ん？……馬鹿なっ！？）

唐突に、さらに驚くべき光景が目に入ってきた。リリアとイレギュラーの一人…フィア達の動きが完全に静止したのである…。それはもう、写真のように空中でピタリと止まっている。

（いったい何が…って、あれはリインフォース？……そうか、例の魔導書か…！！）

彼女が手に持っている『闇の書』にそっくりな謎の魔導書が見えた。あれは、もう一人のイレギュラーが持ってきて数年前から八神家にあつた正体不明の本だったが、昨日本格的に起動したらしい…。

（本当に厄介な奴らばかりだな…。けど、こっちも止まるわけにはいかねえんだよ……。）

――管理局を潰すために…。

（そのために悪いが…。）

彼はさっきまで見ていたのとは別の方角を見る。常人にはただの街並みしか見えないが、彼には見える…。自分が会うべき存在が、自分が潰すべき存在が…。

（お前の未来を潰させてもらおう！！）

――彼は飛び立つ。一人歩く、栗色の髪をした少女のもとへ…。

フイアーside

く住宅地く

「本当にふざけた真似しやがって…。」

《ふざけてません。悪いのはそのバトル中毒です。》

「…そ、そろそろ許して貰えないだろうか……？」

《お断りじゃボケえ。》

「フィーアさん…、リリアさんを返していいですか？頼もしいけど怖いです…。」

現在、3人と1機はなのはの元へと向かっていた。ミトナとプレシアの手により、バルディッシュの修繕を兼ねた魔改造が決まったので、ついでになのはのレイジングハートも強化してしまおうということになったのである。

出迎えの面子がフィーアとシグナム、そしてレスターとリリアという最悪の組み合わせになったのは、この間にシグナムがリリアに先ほどのことを水に流してもらったのが目的であった。フィーアは万が一の時のストッパーである。

《だいたい、いくら通信で連絡を取れてたといってもですね、直接会つのと話すのでは全然違うのですよ？折角こっそりと自己修復

と称して体に磨きをかけたというのに見せるべき相手は粉々で瀕死の状態で私に気づけやしないし気づいたと思ったら何故か私を見て顔を真っ青にするしなんでこんな思いしなきゃいけないんですかってねえ聞いてます？私はこの馬鹿について行きまくったせいで所謂キヤリアウーマンみたいなものになったんですがそのせいで他のA I仲間がロクによりつかなかった中あのバルディッシュさんだけは紳士的で貴公子然とした態度で接してきてくれてその瞬間にときめいて…。》

「…フイア殿……。」

「諦める…。」

「つつか後半は惚気…？」

……無視して構いません。(by作者)

リリアとの和解を半ば諦めてゲンナリしたその時、彼らに誰かの念話が響いた。

(誰か来てええ!!！)

...なのはの悲鳴が、3人の頭に響いた…。

??? side

「ちっ、助けを呼びやがったか…。」

「あなたは誰！？なんでこんなことを！？」

（マ…マスター……。）

なのはの手には砕かれたレイジングハートが握られていた…。突如、なのはの前に現れたこの黒髪の少年は有無をいわず襲い掛かり、剣のようなデバイスで慌てて展開したレイジングハートを粉碎したのである。

「あえて言うなら復讐の下準備か…？」

「…！？」

「まあ、何も知らないうちに魔法の世界から退場してもらっ。何、命までは獲らない…。」

「な、何を…？」

「お前が二度と魔法を使えなくなるように魔力を封印させてもらっ…。そのためには気を失って貰わなければいけないんで…。ちよつとゴメンな…。」

そう言って彼は剣を棍棒のような物に変形させ、それを振り上げる。なのはは思わず恐怖で目を瞑った…。そして…。

…ガキンッ！！

「くそっ…、もう来たのか…。」

「…こりやまた面倒くさそうなのが…。」



――長剣で棍棒を防いだフィアが現れた。

フィア side

「フィアさん!!」

「よう。ここも本当に物騒な街になってきたなオイ。」

内心でフィアは舌打ちをしていた。今の受止めた一撃でだいた  
い相手の実力が判ってしまった。恐らく、ここしばらく相手にし  
てた転生者とはワケが違う。

（こいつは、今までの能力にかまけた馬鹿共とは違う。下手する  
と俺と同等か？）

「…そいつは光栄だな。」

「……しかも、能力持ちか。」

恐らく自分の思考なり心なり読んだのだろう…。これはいいよ  
厄介になってきた。

「シグナム、レスターとなのはを連れて先に八神家に行け。あわよくば援軍を呼んできてくれ…。」

「なんで私なのだ!？」

「レスターはまだ道をイマイチ把握できていない。ついでに、帰宅途中に手負いのなのはが襲われるのが一番不安だ…。だから頼む。」

「…心得た、極力速やかに戻ってくる。だから、死ぬなよ…?」

シグナムも相手の実力が驚異的なものであると薄々感じているようだ。しかし、今は手負いのなのはを守るのが優先…。彼女は渋々承諾した。

ついでにと言わんばかりに、シグナムは黒髪の少年を睨む。それに対し、少年は苦笑いを浮かべた。

「噂通りのバトルマニアだな…。こんな時に『手合わせしてみたい』なんて…。」

「っ！？私の思考を！？」

《シグナムさん、さっさと行きますよ。いい加減にしないと…。》

「クッ！！貴様、名前は何だ！？」

「俺か？…俺の名前は、」

「……『ストーク・カーキング』。お前達を潰す者だ！！」

ストークside

（…なんで名乗ったんだ……？）

この場を去っていくシグナムたちの背中を見送りながら、彼は心の中で呟いた。自分で答えておきながら、何故シグナムの問いに答えてしまったのか疑問に思う『ストーク』。だがそんな疑問もさっ

さと切り捨て、思考を切り替える。

――目の前の敵を潰すために…。

「しかし、アンタは心を読まれても平気な面してたな…。」

「故郷の奴らはなんでもありだったからな。嫌でも耐性が付くさ…。」

「普通は先ほどのシグナムみたいに動揺したり取り乱すものなのだが…。」

「…しかも、もう頭の中では俺の能力対策を考えてるな？」

「当たり前だ…。武器の使い方も身体能力も同じ様な癖してそんな能力まで持つてるお前に俺はどうしろと？」

そう言いながらも、黒煙状態の『ヴィルガロム』を右手に纏わす。それに対しストークも自身のデバイスである『形無』を一度光の粒子に変化させる。

「先にダメ元で尋ねるが…、なのはを襲った目的は？」

「教える義理は無い…と言いたいが、あえて言うなら復讐の下準備だ。」

「ああ、そう。本当に面倒なことこの上ない…、場合によっては気が引けそうだ…【サーベル】。」

…黒煙から細身の剣に切り替え、ストークに向ける…。

「お喋りはそこまでだ。どのみち邪魔をすると言っのなら…。」

…光の粒子を槍に変え、フィアに突きつける…。

「まずはお前を潰す…！」

「やってみろ…！その前に全て奪いつくしてやる…！」

-  
-  
- 急遽展開された封鎖結界の中に、特大の衝撃が走った…。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8489y/>

---

漂流者は守護者で保護者～ヤテンノオヤコ～

2011年12月21日13時13分発行